324
338

始

334-338

紹益禪師提唱
今津洪嶽講義

碧巖集講義

（第一卷）

東京　無我山房藏版

大正
2. 2. 20

原序

至聖の命脈。列祖の大機。換骨の靈方。頤神の妙術なり。其れ惟みれば、雪竇禪師は超宗越格の正眼を具し、正令を提掇して風規を露はさず。佛を烹り祖を煆ふの鉗鎚を秉つて、衲僧向上の巴鼻を頓出す。銀山鐵壁(ママ)孰か敢へて鑽研せん。蛟鐵手を咬む、口を下すにところなし。大匠に逢はずんば焉んぞ玄微を悉にせん。粤に佛果老人ありて碧巖に住せしに學者迷ふて請益す。老人愍んで以つて慈を垂れ、淵源を剔抉し底理を剖析す。當陽の直指なり。豈に見地を立せんや。百則の公案、頭より一串に穿ち來り。一隊の老漢次第に總べもつて安過す。須らく知るべし道璧もと瑕類なく相如謾りに秦王を誑すことを。至道には實に言なし。宗師慈を垂れて弊を救ふ。儻し是くの如く見ば方さに徹底老婆なることを知らん。其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ免れず佛の種族を滅すことを。普照幸ひに師席に親しみ未聞を聞くことを得たり。道友集めて簡編を成し、鄙拙其の本末を叙す。

時に建炎戊申暮春晦日。叅學の嗣祖比丘　普照謹みて序す。

四十二章經中國に入りてより始めて佛あることを知る。達磨より六祖の傳衣に至つて始めて言句あり。本來無一物と云ふを南宗と爲し。時々に勤めて拂拭せよと曰ふを北宗となす。是に於いて禪宗の頭古ありて世に行はる。其の徒翻案の法あり。佛を呵し祖を罵る。爲さゞるところなし。間ま深く吾が詩家の活法を得るものあるも然も謂ゆる第一義に焉んぞ言句を用ゐん。雪竇圜悟老婆心切なり。大慧已に一炬にこれを丙く。嶋中の張煒明遠死灰を燃して復た版行す。亦謂ゆる老婆心切なるものか。

大德四年庚子四月初八日癸丑。　紫陽山方回萬里序す。

碧巖集は圜悟大師の述ぶるところなり。其の大弟子大慧禪師乃ち其の書を梵棄す。世間種々の法は皆執着を忌む。釋子の歸敬するところは佛に如くはなきも、猶時あつてそれを罵る。蓋し我れあつて彼れなく、我れに由つて彼れに由らざればなり。己を舍てゝ物に徇へば必ず己を失するに至る。夫れ心と道とは一にして、道と萬物とは一なり。大虛に充滿す。何くに適くとしてか道にあらざらん。第常人は之れを觀るに能く其の見るところを見れども、而も其の見へざるところを見ず。これを人に求むれば人之れを語る。東坡日喩の說の如し。往復推測すれば愈々遠くして愈々失す。吾が夫人道を體してより猶ほ言無からんと欲す。況んや佛氏は出世間の法たり、文字言語にして之れを求むべけんや。然りと雖も亦廢すべからざるものあり。智者は少くして愚者は多し。已學の者は少なく未學の者は多し。大藏經五千餘卷。盡く未來世のために設く。苟に以つて言を忘すべくんば釋迦老子便ち當さに口を閉づ。何ぞ是くの如く叨々たるに至んや。天下の理は固に尋常の中を離れずして而も尋常の表に超出し。知り易きが若しと雖も而も實は知り易からざるものあり。それを人に求めずんば則ち身を終ふるまで得べからず。古は名世の人千人の英

にあらざれば則ち萬人の傑なり。太阿の劒は天下の利劒なり。山に登るときには則ち虎豹を戮し。水に入るときには則ち蛟龍を剸る。人の之れを知ることは是に盡くせり。然も古人善く之れを用ゆる者あつて、城に乘つて戰ひ風に順して之れを揮はゞ、三軍之れがために大いに敗れて流血千里を赭す。是れ豈に一己の能くするところを以つて盡く之れを疑ふべけんや。吾れ是の書あることを聞いて之れを求ること甚だ至れり。嵎中の張氏始めて更に木に刻み來つて予に謀る。遂に贊けて之れを成さしめ且つために其の首に題す。

大德九年の歲乙巳三月吉日。

玉岑の休休居士聊城の周馳錢唐の觀橋寓舍に書す

或る人問ふ碧巖集の成毀孰れか是なる。曰く皆是なり。齷齪集り來つて、口印を單傳して文字を立せざることは固よりなり。而も血脈歸空の諸論果して誰れか之れをなすや。古へに謂ゆる文字に在らず文字を離れずと謂ふは、眞に知言なり。已に人人をして簾を卷き板を聞き指を竪て脚に觸るゝの際に於いて大事を了却せしめば文字何ぞあらんや。拈華微笑以來、門竿倒却の後、才に言句に涉る。文字に非らずんば以つて傳ふることなけん。是れ又廢すべからざるなり。嘗つて謂へらく。祖敎の書之れを公案と謂ふは。唐に倡つて宋に盛なり。其の來ることや尙矣。二字は乃ち世間の法の中の吏牘の語なり。其の用に三つあり。面壁功成り行脚事了るも、定盤の星は明め難く野狐の趣は墜し易し。具眼之れがために勘辨して一呵一喝、實詣を見んと要す。老吏の獄に據り罪を謝うが如く底裡恙く見、清見遺さゞるは一なり。其の次は卽ち嶺南より初めて來つて西は未だ吸はず。亡羊の岐泣き易く、指海の針必ず南す、悲心之れがために接引す。一棒一痕證悟せしめんことを要す。廷尉の法を執る平反は人を死より出すが如くなる二なり。又其の次は則ち犯稼の憂〻深く繫驢の事重し。學奕の志は須らく專なるべし。染絲の色は悲しみ易し。大善知識之れ

がために付囑す。之れをして蒲團に心死せしむ。一動一參、官府の條令を頒示して人をして律を讀んで法を知り、惡念才かに生ずれば旋て卽ち寢滅せしむるが如き、三なり。方冊を且へ案底を作し機境を陳べ格令をなすことは、世間の謂ゆる金科玉條淸明對越の諸書と初めより何を以つてか異ならん。祖師の立丶公案となし叢林に留示する所以のものは、意或は此に取る。奈何せん末法以來、妙心を瘡紙に求め正法を口讀に付す。鬼神を點盡して猶ほ籌を離れず。人の門戸に傍ふて喚んで郎となすに任す。劒去つて舟猶刻み。兎逸して株移らず。滿吐の葛藤能く問ふこと千轉なるも、其れ生死の大事に於いて初より干涉なし。鐘なり漏盡くれば將に焉んぞ之れを用ゐん。烏乎。羚羊角を掛く。未だ形迹を以つて求むべからず。而も善く下惠を學ぶものは豈に步まば亦步み。趁は亦趁んや。之れを知るときは則ち二老の心皆是なり。圜悟子を顧み孫を念ふの心多し。故に重ねて雪竇の頌を拈す。大慧は焚を救ひ溺を拯ふの心多し。故にたちどころに碧巖集を毀ぶる。釋氏大藏經を說き、末後に乃ち謂ふ。曾つて一字を說かずと。豈に我を欺かんや。圜悟の心は釋氏經を說くの心なり。大慧の心は釋氏說を諱むの心なり。禹稷顏子地をかへば皆然らん。之れを推し之れを輓くも、車行を主どるのみ。爾來三百餘年嶋中張明遠、復た梓に鏤めて以つて其の傳を壽す。豈に祖敎春を回へすか。抑世故數あるか。然れども是の書の行る關る所甚だ重し。若し水を見て海に卽き指を認めて月となさば、特に大慧の憂ふるのみにあらず、而も圜悟も又まさに之れがために粘を去り縛を解かんとす。昔人寫照之詩に曰く、分明なり紙上の張公子、力を盡して高聲に喚へども膺へずと。此の書を觀んと欲せば先づ此の語に參せよ。

大德甲辰四月望。

三敎老人書す。

緒言

碧巖集は一に碧巖錄とも申すが禪宗では古來宗門第一の書と名けられて七八百年來非常に珍重せられたものである。何故に宗門第一の書と申すかと云ふと、古人は、「此の碧巖は傳灯錄千七百則の古則の中にて、最も肝要なる處を、雪竇が拔いて編まれたものなる故に宗門第一書と云ふなり。又此の百則の中には陞座もあり拈香もあり。一切これにもれたることはなき故に宗門第一書と云ふなり」と白された、卽ち此の碧巖集は雪竇山の重顯禪師が、宋の永安寺の宣慈道原禪師の景德傳燈錄三十卷から最も肝要なる、最も代表的なる古則一百則を拔き出して、編まれたもので、此の中には、陞座說法の語もあれば拈香の法語もある。傳燈の機緣もあれば、經中所說の要語もあると云ふ風に一切漏らすところがないから、禪に志すものゝためには最も便利な重寶な書物であると云ふので、宗門第一の書と尊崇せられたものである。雪竇和尙は諱は重顯字は隱之と申して、宋の太宗の太平興國五年八月八日卽ち我國では圓融帝の天元三年に遂州と云ふ處で誕生せられた。俗姓は李氏母を文氏と申した。十八九歲の頃に父

母を失ふたものであるから、兼ねての志を達して益州の普安院の仁銑法師の室に投じて落髪せられた。其の後大慈寺の元鑒法師から圓覺經の講義を聞いて、其の指南に依つて、襄陽石門の蘊聰禪師の室に投じて、始めて佛心宗の門に入られた。聰和尚が石門山に住せられたのは眞宗の咸平三年卽ち雪竇の二十一歲の時のことであるから、聰禪師の膝下に居られたのは師の廿一、二歲頃から廿四五歲に至る三年間計りのことであらう。斯くして再び聰禪師の指南によつて、隨州智門の光祚禪師卽ち雲門大師の孫であつて、香林澄遠禪師の法嗣にあたる智門大師の室に入つて參學辨道に苦心せられた。此の間時には廬山の林禪師の道場に居られたこともあるけれども遂ひに智門大師の法を得て、始めて蘇州洞庭の翠峯山に住院をせられたが、幾くばくもなく明州の大守曾會居士の請をうけて雪竇山資聖寺に入院をせられた。雪竇山は其の始め智覺禪師卽ち有名なる宗鏡錄一百卷の著者永明寺の延壽禪師の開かれた道場であつて、禪師は大法眼禪師の孫で、天台山の德韶禪師の法を嗣いだ人であるから、雪峰大師から云へは五世の法孫に當る人である。重顯禪師も同じく雪峯下五世の法孫であるから、誠に因緣不思議と申さねばならぬ。禪師が此の山に居られたとは三十一年、門弟子の多きことは非常なもので得法の者だけでも七十有八人の多きに達したと云ふことである。仁宗皇帝の皇祐四年卽ち吾が後冷泉天皇の永承七年六月の十日と云ふに世壽七十三臘五十歲を以つて遷化に相成つた。明覺大師の號は師の住院の始めに賜つたところである、門人惟益文軫圓應文政遠塵允誠子環等の諸師相謀つて師の提唱の語句詩頌等をあつめて、洞庭語錄。雪竇開堂錄。瀑泉集。祖英集。頌古集。拈香集。雪竇後錄等の七集を編し、呂夏卿は明覺大師塔の銘一卷を撰ばれたと云ふことである。偖雪竇七部集の中で雪竇顯和尚明覺大師頌古集一卷は、師の門弟遠塵禪師が集められたもので、其の門弟の曇玉の序には、今又古聖機緣の妙を採る者凡そ百則。言を發して以つて頌となし頌に由つて以て義を宣ぶ。義に由つて以つて垂裕す。夫の昧者をして明かに窒者をして通せしむ等と見へて居る。先きにも申した通り、雪竇禪師は其の師匠の智門禪師の提携をうけて、深く宗乘に達して居られたことは勿論であるが、又餘程文才に優れた人であつたから、其の頃の儒者たちの間にも、雪竇に翰林の才ありと言はれて、卽ち雪竇が若し在俗の人であつたならば翰林院の大學士となるべき人であると評判されたことである。之の雪竇が吾が佛心宗歷代の祖師

たちの歴史の中から、宗旨の本色をあらはして、後人の依標とするに足るべき問答や説話などを一百則あつめて、一々其れを詩に作つて門人に示されたのを集めたのが、此の頌古集で、其の題になつた古人の問答や説話のことを本則とも公案とも古則とも申し、其の詩のことを頌と云ふのである。

此の頌古集は當時既に一部の刊本となつて、餘程盛に行はれたと云ふことであるが、其の後凡そ二百年計りを經て宋の哲宗徽宗の頃に、佛果圜悟禪師と云ふ人があつた。此の人は諱を克勤字は無着と申して、崇寧縣の駱氏と云ふ儒者の子であつた。出家の始め文照、敏行等の諸師に就いて敎相の學を學ばれたが、後に眞覺の惟勝禪師の室に投じて始めて敎外の宗旨を學んだ。是れより王泉寺の承皓禪師を初め、金鑾の信禪師、大僞の慕喆、黄龍の晦堂祖心。東林寺の常聰禪師等の諸名匠に歴參して最後に五祖山に法演禪師を訪ねて、遂に其法を嗣がれた。成都の太守郭知章が師の德を慕ふて六祖院に迎へて供養をしたが間もなく昭覺院に移つて茲に八年程住して居られた。其の後蜀を出て荆南の方に向はれたところが、偶ま无盡居士張商英に遇ふて、其の請をうけて碧巖院に住し重ねて道林寺に徙られた。佛果の號は此の頃徽宗皇帝から賜つた勅號である。

政和の頃に詔をうけて金陵の蔣山に移り、更に勅によつて、天寧萬壽禪寺に住せられた。南宋の高宗の建炎元年九月には三度勅命を奉じて金山の新遊寺に住山せられたが十一月には雲居山の眞如院に遷られた。圜悟禪師の號は翌年の正月揚州の行宮に於いて賜つたものである。建炎三年八月に廬山の雲居寺を退ぞいて蜀に還つて、再び成都の昭覺寺に遷られた。紹興五年の八月に世壽七十有三、臘を重ねること五十有四を以つて遷化せられた。翌年三月には謚を眞覺と賜はり、塔を寂照と名けられたと云ふことである。

此の圜悟禪師が彼の雪竇の頌古を殊の外まろこんで、一則毎に小序をつけてそれを垂示と名けられた。是れは圜悟が自家の門人に示されたのであるから、垂示と云ふものである。又本則と頌とにも一句毎に寸鐵殺人的の短評を加へられた。之を著語と申して、好く味ふと實に面白いものである、又本則と頌に各々詳細な總評を施こされた、其れを評唱と名け又單に略して評とも申して居る。碧巖集は卽ち以上述べたところの雪竇の集められた本則と頌と圜悟が施こされた垂示と著語と評唱と都合五つをまとめて初めて一部となつたもので、碧巖の名は、圜悟が居られた濃州山の靈泉院の方丈に碧巖と云ふ二字の額が掲げて

あつたから、それに因んで名けたものである。此の靈泉院は、夾山の善會禪師と申して、法を船子山の德誠禪師に嗣いだ人が開かれた寺であつて。碧巖窟は此の寺の一境であると云ふことである。名の起りは、一僧が禪師に向つて、如何なるか是れ夾山の境と問を起して來た時に、師が猿子を抱いて青嶂の後に歸り鳥花を啣んで碧巖の前に落つと答へられたのに基いたものであると稱せられて居る。

偖此の碧巖集は、南宋の高宗の建炎戊申年卽ち圜悟が雲居山の眞如院に住して居られた時に其の弟子の眉州中岩の普照禪師が序文を書かれ、それより四年前卽ち徽宗の宣化七年に關友の無黨が後序を書いて居られるから、其の幾年頃かは明らかでないが、圜悟の晩年か若しくは遷化後幾く程もなくして上梓せられたものと思はれる。後序の中に、圜悟老師成都に在ましゝ時、予諸人のために其の說を請益す。師後に夾山道林に住して、復學徒の之れを扣くがために、凡そ三たび宗綱を提さぐ。語は不同なりと雖も其の旨一なり。門人掇つて之れを錄すること既に二十年なり等と見へて居るから、圜悟は哲宗の祟寧元年卽ち蜀の成都の昭覺寺に居られる頃から雪竇の頌古を拈提せられたので、それより政和年中に夾山の道林寺に在つて頌古百則を拈提せられる迄には早や三度までも學人のために提唱せられたものと考へられるのである。

然る處茲に師の門弟の中に大慧の宗杲と云ふ人かあつた。此の人は初めに曹洞禪に參した人であるが、曹洞禪では餘りに傳授と云ふことをやかましく云ふものであるから、師は禪は佛の自悟自證の法なり。豈に別に傳授あらんやと云つて、去つて臨濟禪につき遂ひに圜悟の室に投じて付法の高足となられた。後に高宗の勅によつて育王山に住し又詔をうけて徑山にうつり、孝宗の時には大慧禪師と云ふ勅號を賜つた人であるが、此の人が、佛心宗は本より不立文字敎外別傳直指人心見性成佛と云ふが一宗の根本義であるから、吾が宗に於ては手に信せ口に任せて活潑自由に自らも參し人にも參せしむべきであつて、決して斯樣な一部の書物などを書いて、それを以つて人に示し人を導くべきものではない。斯樣な書物などがあると、遂ひには文字の上、口先きばかりで禪宗の悟りを開いたやうな風をしたり、或は又單に理窟が分つただけで大悟徹底したやうなつもりになるから、却つて後人を誤まらすの基となると云ふので、師匠の圜悟禪師が書いて居かれた碧巖集を全部火の中へ投じて燒き棄てゝしまはれた。

ところが其の後凡そ百五六十年を經て元の世祖世宗の頃に、蜀の國の人で、嶋中の張氏、名は煒、字は明遠と稱する人があつた、此の人は非常に崇佛の志の厚い人で殊に佛心宗に歸依をして居つたものであるから、どうかして碧巖の善本を得てそれを梓に上して後世へ傳へたいと云ふので色々と苦心をした結果、幸ひに預期通りの善本を得て愈々梓に上すことになつた。今傳はつて居る碧巖集の卷頭に

碧巖集標的宗門眞霧海之南梓夜途之北斗也。一炬之後善刻不存、今多方尋訪得成都大聖慈寺白馬院趙大師房眞本。與江浙諸禪刹所藏本參致無訛。敬繡梓以壽其傳。得於希有發於久秘。圓悟心法了然目前。向上機關。頭々是道具眼幸鑒。

と安して杭州北橋北街東嶋中張氏書隱印行

とあるが卽ち其顚末を張氏自らに記したものである。此の中に一炬の後善刻存せずと云ふのは、大慧の投火を指したもので、善刻存せずと云ふは、或は全然刻本がないではないけれども、善本がないと云ふ意味ではなからうかと思はれる。虛谷の後序に　嶋中の張明遠偶ま寫本の後冊を獲。又雪堂の刊本及び蜀本を獲て訛舛を校訂して此の書を刊成し萬古に流通すとあるから、此れと相まつて確かに刊本があつたことゝ思はれる。雪堂は恐らくは元の世宗の大德七年に禪源諸詮集部序二卷を重刊した雪堂のことではないかと思ふが、或は圜悟と法兄弟の間柄の佛眼澄遠禪師の法を嗣いだ雪堂通行禪師のことであるかも知れない。兎に角張明遠が上梓する迄には確かに刊本として流布せられたものと考へられる。大聖慈寺白馬院の趙大師と云ふは是れ又誰のことか明かでないが、福本の凡例には成都府の大聖慈寺白馬院三聖堂超大師の印本に到り對勘して彫り行ふ卽ち差誤なし。福州城の東尊僧坊の口林宅にて新板印行と見へて居るから、之れも同じく印本であつたものと考へられる。成都は圜悟の居られた昭覺寺のある處であるから、若し寫本であるとすれば原本に近いものとして頗る貴重すべきものであらう。

偖張氏の上梓した碧巖には、普照の序と無黨の後序の外に序が三文と、跋が三文、及び碧巖重刊の疏とが載せられて居る。序の中第一の序は、元の世宗の大德四年寅子四月に湖南路紫陽山の方回萬里が書いたもので、此の人は恐らくは是れより七年先き卽ち世祖の至元三十一年甲午に龍舒の淨土文十一卷を上梓し

た時に序を書いた紫陽の靈谷居士方使君のことであらうと思はれる。第二の序は大德五年乙巳三月に王岑の聊城の人休々居士周馳字は景遠と申した人が杭州錢唐縣の觀橋と云ふ橋の側の寓舍にあつて書いたもので、嶋中の張氏とは餘程親密な友人であつたこと丶思はれる。次に第三の序は、大德甲辰年四月卽ち大德八年に三敎老人と名のる人が書いたものであるが、此の人は本名は何と云ふたか傳つて居ないが恐らくは佛儒道の三敎に通じた老居士であつたこと丶思はれる。序も中々味ふべき言葉が多くて、殊に結文の「此の書を觀んと欲せば先づ此の語に參せよ」と云ふ語の如きは最も味ふべきものであると思はれる。

跋文に就いても、第一の跋は大德壬寅中秋卽ち大德六年に東巖淨日禪師の書かれたのである。禪師は法を無準師範に嗣いだ人であるから正しく圜悟大師七世の法孫であつて、天童山に住して居られた。元の武宗の至大元年に八十八の高齡を以て示寂せられた人である。

次に虛谷の序は仁宗の延祐丁巳年卽ち延祐四年に出來たもので、作者は徑山の虛谷希陵禪師であるから、先きに申した無準師範の法嗣雪巖祖欽禪師の法を嗣いだ人で正さしく圜悟大師八世の法孫である。

最後の跋文は、同じく延祐四年丁巳に海粟老人馮子振と云ふた人が書いたもので、此の人には又怪々翁と云ふ號がある。此の跋は張居士が此の書物を刊行した時に偶然にも居士の二子が病氣にかゝつた。そこで一類の人があれは大慧が燒かれたものを再び版にするものであるから、恐らく其の祟りであらうなど丶云ひ出したことがある、それに付いて海粟老人が其の妄を辨じたのが卽ち此の跋文である。

碧巖集再刊の疏は誰れの手になつたものか分からないけれども、大德四年に張居士が上梓する時十方有緣の士に印刻の資財を募緣した時のものであることは明かである。文章も餘程立派であつて、朗々として誦すべきものと思はれる。

以上此の書の上梓に就いての大體のことを話し終つたが、偖此書は何時頃吾が國に傳はつたかと云ふと、恐らくは吾が國曹洞宗の開祖永平寺の道元禪師が、後堀河天皇の安貞二年正月に彼の地から歸朝しられた時に、持つて來られたものが先づ最初のものであらう。此れは勿論寫本であつて、今現に加賀の大乘寺に秘藏せられて居ると云ふことである。此の時は支那では南宋の理宗皇帝の

紹定元年であるから、圜悟大師が入滅せられた高宗の紹興五年からは丁度九十二年目のことであつて、張居士が上梓するより遙かに以前のことである。張居士の印行した碧巖は、何時頃將來せられたものか明かでないけれども、南北朝より足利氏の治世にかけて早く既に吾が國に傳つたやうで、室町時代には、其の覆刻本まで出來て居つたやうである。今回拙衲が講義の原本として用ゐたのは卽ち室町時代初期の板で世に稱する五山板と云ふものゝ最も古いものゝ一種である。尙足利時代に板になつたのが此の外二三本もあるやうで、拙衲の記憶して居る丈けでも本朝濃州路瑞龍禪寺新刊記とある岐阜の瑞龍寺藏板のものが一部ある、此れは足利時代の末葉に出來たもので、德川氏の時代になつてからも覆刻せられて居る。次に正法山妙心寺の正眼院で刊行せられたものがあつて、之れには大冊の本と小冊の本と二種あるやうに思はれる何れも東山時代前後のものゝ樣である。尙此の外慶長の頃に木活字で出板せられたものがあつて、其の零本は一見したけれども、どこで板になつたのか記憶して居らぬ。若し幸ひに御存じの方があらば敎へて戴きたい。德川氏になつてからの板は別段申す迄もありますまい。近來になつては活版本もあつて、何人と雖も容易に手にすることが出來るのは誠に悅ばしいことである。

次に碧巖集の末疏に就いて一言申して置くと、先づ古いところでは、(一)碧巖錄鈔十卷。これは東福寺の不二菴主岐陽方秀禪師が提評せられたものであつて、蜀福二本を對比校合して最も親切に出來て居るから、誠に珍重すべきものである。師は法を石窓泉和尙に嗣いだ人で應永三十一年二月に六十二歲で以つて遷化せられた。此の本は元は寫本であつたけれども、明曆丁酉暮春吉旦卽ち明曆三年に京都の村上勘兵衞が刊行したものがあるから、容易に手に入れることが出來る。(二)碧巖鈔正的正口鈔一卷。これは伊勢淨眼寺の開山玄虎字は大空と申した人が延德年中に武州前澤常救院の碧巖窟で拈評せられたもので世に穴鈔又は大空鈔など〻稱せられて居る。師は曹洞宗の人で法を崇芝性岱禪師につぎ總持寺にも出世せられたことがある。永正二年の七月遷化せられた。在日の日に朝廷詔して紫衣を賜ひ、且つ佛性活通禪師の徽號を賜つた。然し此の書は惜いことには寫本であつて稀れにも見ることが出來ぬ。(三)碧巖集種電鈔十卷。これは黃檗宗の大智實統禪師が書かれたものである。實統は法を悟岩性撞禪師に嗣いだ人であるから、卽ち卽非性一禪師の孫であつて、隱元禪師の

玄孫にあたる人であります。碧巖集全文に講じたものとしては外に少ないから極めて珍重すべきものであります。既に幾く度びも版に上ぼされて居るから、誰人でも容易に見ることが出來ます。(四)碧巖錄牴牾抄十卷。これは曹洞宗の天桂傳尊禪師が享保二年卽ち師の七十歳の時に攝州の明月林藏鷲庵で提唱せられたものを筆記したもので、普通碧巖の天桂抄と稱へて居る。禪師は法を五峯海音禪師に嗣いだ人で、駿河の靜居寺に住して居られた。著書にも正法眼藏の辨註二十卷と云ふ大部なものがある。享保二十年十二月に八十八歳を以て遷化せられた。此の鈔は近來碧巖集講義として活版本で出版せられて居るから誰れにでも見ることが出來る。(五)鐵碧雲片三卷。之は華嚴寺の鳳潭名は僧濬と申した人が著はしたもので、彼れが自家の宗風を發揚せんがために禪門の破斥を試みたものであるけれども、又他山の石として珍重すべきものである。鳳潭は天文三年二月に洛西の華嚴寺で八十五歳で以つて遷化せられた。(六)碧巖百則辨。之れは白隱門下の英傑、東嶺圓悉禪師の拈評せられたものであつて、寫本で而も卷數は色々になつて居るが、近代の禪風を知るには最も適切なものである。禪師は伊豆の龍澤寺の第二世となられた人で寛政四年の二月に七十二歳を以つて遷化せられた。諡を佛護神照禪師と賜つた。著書の中では宗門無盡燈論などが最も廣く行はれて居る。以上碧巖の末疏の中で最も重要なものを列擧したが此の外本光和尙の黑涌桶を初め國耳鈔とか耳林鈔とか云ふ鈔物もあつて、良く調べたならば限りもないことであらうと思ふけれども、先づ我が臨濟の宗風を伺ふには東嶺和尙の百則辨を初めとして不二道人の碧巖錄抄及び黃檗の者ではあるが種電鈔などか最も適切な者であらうと思はれる。

附　言

碧巖の序を書いた三敎老人のことに就いて碧山日錄寛正三年八月二日の條に常在和尙(雲)曰く、碧巖の序に三敎老人の孫あり世の人誰某なるやを知らず。余張炳の錄を按するに三敎老人と號し又如々居士と號す。是を以つて便ち知る碧巖の序は是れ張炳の作なることを。炳は乃ち大惠の孫にして然可庵の子なり。其の錄往々之れあり一二冊なり。廣錄數十冊之れあり。之れを儲くるもの罕なりと見へて居る。これによると三敎老人は卽ち碧巖を燒き棄てゝしまふたと云ふ大慧禪師の孫にあたる張炳居士のことであることが分る。書見の序でにふと此の事を見つけ出したから念の爲に追加して置く。

凡例

一。禪は參すべくして講ずべからずと先哲は申して居る。此の一語は、言は簡にして最も意味の深い言葉である。禪の妙味、禪の特色を遺憾なく此の一語の中に道破して居るやうに思はれる。何故かと申すに、本來禪は、宇宙萬象の眞理實相を體得することであるから、宇宙萬象皆禪ならざるはない。そこで其の宇宙萬象の中から、特に或る一つのものを拔き出して、此れが禪で御座るなどゝは決して云はれたことではない。其れはほんの大禪海中の一滴にすぎないのである。そこで、言語道斷心行處滅と申して、言語で云ひあらはすことも出來なければ、心で思ふことも出來ぬのが卽ち禪である。一體に言語と云ふものは、音聲に依りて自己の思想を表示するものであつて、文字はそれを附號にあらはしたものに過ぎないのであるから、如何なる微妙な言語でも、如何なる立派な文章でも、決して思想そのものを完全に表示することの出來得るものではない。それであるから、如何に古人が老婆心切に書いて置いて吳れられたものと雖も、決して十全に古人の意旨を伺ふことの出來るものでない。それによつて宇宙の眞理實相に體達しやうなどゝは抑も誤謬の甚しきものである。

偖碧巖集は古來宗門第一書と稱せられて最も尊重せられたものであるが、然しいかに宗門第一書

と申した處で、元より月を示すの指、方を指すの地圖に過ぎないのであるから、若し此の言語文句に拘泥して、單に言葉の意味合、理路が解つたからとて、それは決して悟りが開けたと云ふものではないのである。謂ゆる口先きのこなし、頭の中のこなしがついた丈けのことである。ところが動もすると一類の人があつて、文字言語の詮索によつて、宇宙の眞理實相に達體することが出來るやうに思ふて居る。これは實に愚なことで、恰も月をさすの指を見て月なりと思ひ、方を示すの地圖を見て巴里の街を散歩して居るやうに思ふのと、其の愚に於ては些の相違もないのである。大慧禪師が師匠のかゝれた此の書を燒棄せられたのは全く此の妄を誡めん爲より外はないのである。それ故に若し諸君が眞に碧巖の意味を味ひ、圜悟の期望通りの妙境界に悟入體達しやうと思ふたならば、單に此の一冊の講義を味ふに滿足をせず、是非とも脚足實地を踏んで實參實究してもらはねばならぬ。此の書を講ずると云ふ拙衲の眞の目的は實に茲に在るのである。

二。さりながら、どれ程脚足實地を踏んで實參實究すると云ふことになつても、豫め言句理路の會得をして置かなければ、決して一足とびに其の言句理路を超越して妙境界に到り得られるものではない。そこで宗門に於いても古來から祖錄の提唱と申すことがあつて、其の言句の意味を更らに他の言句を以つて評したり、又は言句以外に色々な形稱、たとへば拄杖を卓すること一下とか、拂子を擲つとか、或は咄とか喝とか打棒一下するとか云ふ風のことで、其の言外の意味を開發さることがある。これ等は言語と云ふものゝ外に、身振若しくは象形等の目に訴ふる方法、若しくは拍手、擊柝等の音聲によつて耳に訴へて其の意味を表示する方法でありで、廣い意味の言葉と申しても差し支へはなからうかと思ふ。今拙衲がおほけなくも碧巖の講義を試みたのは、畢竟するところは、先きに申す狹い意味の言葉によつて、幾分文字言句の說明をして、それによつて此の書の道理理路を宣明しやうと考へたものに外ならぬ。それであるから、幸ひ拙衲の手本にある、先德の提唱されたのを慶長前後に筆記したものを二三の異本によつて校合して、拙衲の講義の外に本則の提唱として中間に挿むことにした。これに依つて諸君は、吾が宗の特色なる祖錄の提唱なるものゝ大體を味ひ、且つ拙衲の講義に依つて益々其の意味を會得してもらうことが出來るであらうと思ふ。どうか諸君は拙衲の婆心を無にせないで幾度も是の提唱を熟讀玩味して此の講義と相まつて圜悟集主の眞意を會得するやうに心懸けて戴き度い。

三。前項で申した先德と云ふのは、卽ち三江紹益禪師のことである。禪師は京都の人でありて、諱は紹益字は友竹又竹林と申された。三江は其の號である。族姓は奧村氏、父は醫を業として居られた。禪師の生れられたのは元龜三年の十二月二日である。天正十四年に年十四歲にして建仁寺の明室宇旰禪師に依つて剃髮受具せられたが、十六年には師匠の明室禪師にわかれられたので、卽ち師命によりて當代の名德南化玄興禪師卽ち後に定慧圓明國師と諡號を賜つた方の室に投じて

這箇の大事を究明せられた。禪師は彼の甲斐の慧林寺にありて怪傑織田信長の攻圍をうけて、炎々と燒へ上つて居る山門上に於いて安禪何ぞ必ずしも靜坐を用ひん、心頭を滅却すれば火自ら涼しと道破して泰然として示寂せられた快川紹喜禪師の法を嗣いだ方でありて實に關山國師十世の法孫である。三江の號は實に圓明國師の賜つたものである。

業成りて後は先師の後をうけて東山の常光院に住せられたが、同九年に木下二位法印家定の請によりて常光院を中興し、十年には建仁寺の席を、十三年には南禪寺の席を董された。此の間には奥平家正（作州大守、家康の女婿なり）の請によりて東山に久昌院を建て、又、山中山城守の請によりて慈芳院を創立せられた。寛永元年に故豐太閤の夫人一品高臺院湖月尼公の請をうけて東山に高臺寺を開き開山始祖となられた。後水尾、明正の兩天皇を始め奉り、堯然、智仁、梶井等の諸親王より幾多の顯官貴紳の歸依をうけて至る處に法輪を轉じ、妙光、興雲、圓德、清住等の諸寺を或は開創し或は中興し、門下には藏源紹相、三雀紹善、欽天永洪、韋天祖旭、心傳正鐵等の諸德を初め幾多の俊才英哲を出した。慶安三年秋八月、師七十九歳にして微疾を示されるや、かしこくも太上天皇の聖勅により亞相坊城俊宗親しく師の病室に臨まれ、又侍醫を遣はして病を問はしめられた。二十二日、本寺の遺誡を記し、又弟子の求めによりて同姓釋氏七十九年卽今底也玄又玄玄と遺偈を認めて遂ひに遷化せられた。

遷化の時にあたり尊純親王は親しく師の病室に見舞はれて、師のために勅號を請はむと申されたが、師は我れ法門をけがすこと六十餘年、中ごろ諸名刹をけがし名聞を好むに似たり。紫衣の一號身に於いて餘りあり。近來の碩德梅谷、策彥、西笑、月溪等の諸德猶未だ諡號あらず、況んや我れ德なくして豈に宣麻の一紙を費やさんやと謝して遂ひに受けられなかつたと云ふことである。

遺著には語錄及び鷲峯一杖と稱する詩集がある、此の提唱は師が門下の諸生のために講せられたものであつて、叢林の間にまれに傳寫して傳へられて居る。師は人格の人であつた。それ故に勿論文筆の見るべきものは少ないであらうけれども、其の提唱たるや實に丁寧親切であつて、又其の造詣が如何に深かつたかゞ伺はれる。文體は全く五山時代に行はれた鈔物と同樣であつて、一見解し難いところがある。さりながら、其の下語の如きは實に寸鐵殺人的の妙味があつて、圜悟の着語を味ふと同じく、云ひ知れぬ深い味がある。拙僧は讀者諸君が此の講義を讀まれるにあたり。此の高僧三江紹益老禪師に對して一辨の香を捧ぐるに吝ならざらんことを深く希ふ次第である。

四。碧巖集に關する詳しいことは緒言の處で申して置いたからそれに讓るとして、預めに茲に注意して置きたいのは、此の書は一則ごとに垂示と本則と頌と著語と評唱との五つを以つて組み立

てられたものであつて、本則と頌は雪竇山の重顯禪師が集められたもの、垂示と着語と評唱は佛果圜悟禪師が施こされたものである。そこで、此の五つの中で、本則は申すまでもなく碧巖集の主腦であり中心たるべきものであるが、垂示は圜悟が其の門人のために如何やうに一則の公案を伺ふべきかと云ふ注意を與へられたものであるから、後學初機のために禪學の指南とすべき處は却つて此の垂示にあるのである。それ故に此の講義を見られる諸君は、是非とも先づ第一に能く垂示に心をひそめて其の眞意を玩索し、それから其の垂示に明かされた道理を本則の公案に於いて、古人は如何やうに實踐せられて居るかを窺ひ、更に頌に依つて其の本則を雪竇禪師がどのやうに味はれたかと云ふことを知るのである。偖着語は其の本則の公案と頌とを圜悟禪師がどのやうに見られたかを窺ふべきものであり、評唱は本則や頌に關する取りまとめての圜悟禪師の見識を頌得すべきものである。さりながら、評唱は其の文が非常に長くて若し一一講義することになれば到底短日月の中に卒業することが出來ないから、只和譯を試みて、其の會得のしがたい要點だけを拔き出して講義をする丈けに止めて置いたから、この上の處は諸君に於いて、各自の見識で味うてもらひたいと思ふ。

五。碧巖集の版本などのことに關しても緒言のところで一通り申して置いたことであるが、元來此の書物は久しい間寫本で傳つたものであるからして、さなくても久しい間の傳承に依つて色々と異本の生ずるのは當然である上に、更に其の上に幾多の混雜を來して、或は垂示が前後安置を異にしたり、或は評唱に脫落や纔入を來たしたりして居るが、其の中にも着語に最も錯りが多いので、中には一本に無いものが他の異本には載せてあつたり、或は評唱の中の語が着語として混入したりした上に、前後其の置きどころを錯亂したり、同じ意味のことを語をかへて重複したり、又は圜悟禪師の見識としてはよもやと思はれるものが纔入したりして精細に調査したならば餘程妙なことになつて居るやうに思はれるけれども、これに關しては何れ訂正碧巖集として他日大方の士に批判を仰ぐつもりで、今は只世上流布の版本の內最も古いものと思はれる古版の碧巖によつて講義をすることにしたのである。

六。講義の體裁は大體を垂示、本則、頌、評唱と云ふ風に分けて、其の各に就いて先づ初めに讀み方を示し。次に難解の語句の字解を試み、最後に大體の意味を該括して講義することにした。其の間に挿んである本則及び類則の提唱は何分慶長前後の人の手になつたものであるからして、文體が餘程變つて居る、然し能く味ふて見ると中々味ひが深いやうに思はれる。それであるから、讀者諸君に於いてはどうか提唱の字解を再三再四反復玩味して充分に會得の出來るやうにつとめて戴き度い。これは吳々もお願ひ申して置く次第である。

七。此の講義を書くに就いては恩師奥村付山(諱元緝)老禪師の少なからぬ提撕に預つた。禪師は

本年六拾有五歳の高齢にわたらせられ、加ふるに法體も常々あまりすこやかにも在しまさぬ。それにもかゝはらずいやが上にも御示教を賜つて、時にはお身親しく校閲の勞をも取らせられた。拙僧はこゝに欽みて老禪師の法乳の高恩を感謝し奉る。それにつけても思ひ出すは父淨華院居士のことである。父は三年以前、即ち明治四拾四年の八月に沒しました。父は念佛の信者でありて、又禪の歸依者であつた。父は身念佛の行者でありながら、又拙僧を禪の門に導いて恩師付山老禪の室に投じて呉れた。拙僧は此の講義が出來上つたに就いても父の深き恩を感せざるを得ない。拙僧は欽みて、父淨華院釋緣靜居士の靈に對して此の一部の講義を捧げたいと思ひます。

大正元年臘月佛成道日　　正覺山妙光禪寺降魔室に於いて誌す。

碧巖集講義目次

第一則　聖諦第一義……一
第一節　垂示……一
第二節　本則……四
第三節　本則提唱……一一
第四節　本則評唱……一六
第五節　類則提唱……二五
其一　無功德……二五
其二　一句了然……二六
其三　誰欲招……二六
第六節　頌……二七
第七節　頌評唱……二三

第二則　至道無難……三九
第一節　垂示……三九
第二節　本則……四二
第三節　本則提唱……四五
第四節　本則評唱……四六
第五節　頌……四九
第六節　頌評唱……五四
第七節　類則提唱……五八
其一　枯木龍吟……五八

第三則　馬大師不安……五九
第一節　垂示……五九
第二節　本則……六二
第三節　本則提唱……六五
第四節　本則評唱……六六
第五節　類則提唱……六七
其一　帶累別人……六七
其二　養子之緣……六七
第六節　頌……六八
第七節　頌評唱……七二
第八節　類則提唱(其二)……七四
其三　三皇五帝……七四
其四　興陽剖侍者……七四

第四則　德山挾複子……七七
第一節　垂示……七七
第二節　本則……七八
第三節　本則提唱……八四

第四節　本則評唱……八九
第五節　類則提唱……九四
其一　三世不可得……九四
其二　紙燭吹滅……九五
第六節　頌……九六
第七節　頌評唱……一〇〇

第五則　雲峰盡大地……一〇三
第一節　垂示……一〇三
第二節　本則……一〇七
第三節　本則提唱……一〇九
第四節　本則評唱……一一〇
第五節　類則提唱……一一五
其一　雲峰匹上匹下……一一五
其二　雲峰飯頭……一一六
其三　鰲山成道……一一八
其四　三處相見……一二〇
第六節　頌……一二一
第七節　頌評唱……一二三

第六則　日々好日……一二五
第一節　本則……一二五
第二節　本則提唱……一二六
第三節　本則評唱……一二七
第四節　類則提唱……一三二
其一　轆轤鑽……一三二
其二　靈樹菓子……一三三
其三　雲門殺父母……一三三
其四　雲門普……一三四
其五　香林諾……一三五
第五節　頌……一三五
第六節　頌評唱……一四二

第七則　慧超問佛……一四九
第一節　垂示……一四七
第二節　本則……一五一
第三節　本則提唱……一五二
第四節　本則評唱……一五三
第五節　類則提唱……一五七
其一　丙丁童子……一五八
其二　曹源一滴……一五九
其三　法眼佛々……一五九
其四　雲門何劫悟……一六〇

第六節　頌……一六一
第七節　頌評唱……一六四

第八則　翠岩眉毛……一六七
第一節　垂示……一六七
第二節　本則……一七一
第三節　本則提唱……一七四
第四節　本則評唱……一七六
第五節　頌……一七八
第六節　頌評唱……一八三

第九則　趙州四門……一八五
第一節　垂示……一八五
第二節　本則……一八七
第三節　本則提唱……一八八
第四節　本則評唱……一八九
第五節　類則提唱……一九四
其一　末後牢關……一九四
第二　大王來也……一九五
第六節　頌……一九六
第七節　頌評唱……一九八
第八節　類則提唱(其二)……一九九
其三　外道雀兒……一九九

第十則　睦州問僧……二〇一
第一節　垂示……二〇一
第二節　本則……二〇四
第三節　本則提唱……二〇六
第四節　本則評唱……二〇七
第五節　頌……二一〇
第六節　頌評唱……二一三
第七節　類則提唱……二一六
其一　臨濟道學喝……二一六

第十一則　噇酒糟……二一九
第一節　垂示……二一九
第二節　本則……二二一
第三節　本則提唱……二二三
第四節　本則評唱……二二四
第五節　類則提唱……二二九
其一　百丈參再……二二九
其二　黃檗宗乘……二三一
第六節　頌……二三一
第七節　頌評唱……二三五

第八節　類則提唱(其二)……二三八
其三　黃檗禮拜……二三八
第十二則　洞山麻三斤……二四一
第一節　垂示……二四一
第二節　本則……二四三
第三節　本則提唱……二四四
第四節　本則評唱……二四五
第五節　頌……二四七
第六節　頌評唱……二五二
第七節　類則提唱……二五七
其一　洞山三頓……二五七
其二　陸亘參南泉……二五八
其三　道本無言……二五九
第十三則　巴陸提婆宗……二六一
第一節　垂示……二六一
第二節　本則……二六三
第三節　本則提唱……二六四
第四節　本則評唱……二六五
第五節　類則提唱……二七一
其一　僧辭大隋……二七一
第六節　頌……二七二
第七節　頌評唱……二七六
第十四則　雲門對一說……二七九
第一節　本則……二七九
第二節　本則提唱……二八〇
第三節　本則評唱……二八一
第四節　類則提唱……二八三
其一　雲門三句……二八三
第五節　頌……二八四
第六節　頌評唱……二八八
第十五則　雲門目前機……二九一
第一節　垂示……二九一
第二節　本則……二九二
第三節　本則提唱……二九四
第四節　本則評唱……二九五
第五節　頌……二九八
第六節　頌評唱……三〇一
第七節　類則提唱……三〇五
其一　伽葉剎竿……三〇五
第十六則　鏡淸草裏漢……三〇七

第一節　垂示……三〇七
第二節　本則……三一一
第三節　本則提唱……三一三
第四節　本則評唱……三一四
第五節　類則提唱……三一七
其一　母子啐啄……三一七
其二　南院示衆……三一九
第六節　頌……三二一
第七節　頌評唱……三二七
第八節　類則提唱(其二)……三三〇
其三　世尊七步……三三〇
其四　妙玄獨脚……三三一
第十七則　香林西來意……三三三
第一節　垂示……三三三
第二節　本則……三三四
第三節　本則提唱……三三五
第四節　本則評唱……三三六
第五節　類則提唱……三三九
其一　室內一盞燈……三三九
其二　臘月火燒山……三四〇
第六節　頌……三四一
第七節　頌評唱……三四四
第八節　類則提唱(其二)……三四六
其三　劉鐵磨菴……三四六
第十八則　國師塔樣……三四九
第一節　本則……三四九
第二節　本則提唱……三五五
第三節　本則評唱……三六〇
第四節　類則提唱……三六六
其一　祖師西來意……三六六
其二　拄杖子……三六八
其三　一生參學事畢……三六九
第五節　頌……三七〇
第六節　頌評唱……三七三
第十九則　俱胝指頭禪……三七五
第一節　垂示……三七五
第二節　本則……三七八
第三節　本則提唱……三七九
第四節　本則評唱……三八〇
第五節　類則提唱……三八六

其一　莫妄想……三八六
其二　如何是一處……三八七
其三　俱胝只念三行咒……三八八
其四　秘魔一扨……三八九
其五　打地命尙……三八九
第六節　頌……三九〇
第七節　頌評唱……三九三
第二十則　龍牙禪版……三八五
第一節　垂示……三九五
第二節　本則……三九六
第三節　本則提唱……四〇〇
第四節　本則評唱……四〇二
第五節　頌……四〇九
第六節　頌評唱……四一一
第七節　重頌……四一三
第八節　重頌評唱……四一六
第二十一則　知門蓮華……四一九
第一節　垂示……四一九
第二節　本則……四二〇
第三節　本則提唱……四二二
第四節　本則評唱……四二三
第五節　類則提唱……四二八
其一　佛未出世……四二八
其二　夾山蓮華……四二九
第六節　頌……四三〇
第七節　頌評唱……四三二
第二十二則　雪峰鼈鼻蛇……四三五
第一節　垂示……四三五
第二節　本則……四三八
第三節　本則提唱……四四一
第四節　本則評唱……四四三
第五節　類則提唱……四五〇
其一　虎話……四五〇
其二　喫茶去……四五三
其三　紫胡牌……四五三
其四　如何是宗……四五五
第六節　頌……四五五
第七節　頌評唱……四六二
第二十三則　最慶遊山……四六五
第一節　垂示……四六五

第二節　本則……四六六
第三節　本則提唱……四六九
第四節　本則評唱……四七〇
第五節　類則提唱……四七五
其一　趙州妙峰頂……四七五
其二　別峰相見……四七六
第七節　頌……四七六
第八節　頌評唱……四七九
第二十四則　鐵磨到潙山……四八一
第一節　垂示……四八二
第二節　本則……四八二
第三節　本則提唱……四八五
第四節　本則評唱……四八六
第五節　類則提唱……四八九
其一　水牯牛……四八九
其二　趙州水牯牛……四九〇
其三　乾峰舉一……四九一
第六節　頌……四九二
第七節　頌評唱……四九五
第八節　類則提唱(其二)……四九七
其四　風穴老牸牛……四九七
第二十五則　蓮華峰拄杖……四九九
第一節　垂示……四九九
第二節　本則……五〇一
第三節　本則提唱……五〇三
第四節　本則評唱……五〇五
第五節　類則提唱……五一一
其一　善導和尙……五一一
其二　雪峰中下根……五一二
其三　嚴陽尊者……五一三
第六節　頌……五一四
第七節　頌評唱……五一七
第二十六則　百丈大雄峰……五二三
第一節　本則……五二三
第二節　本則提唱……五二四
第三節　本則評唱……五二五
第四節　類則提唱……五二八
其一　文殊普覺……五二八
第五節　頌……五二八
第六節　頌評唱……五三二

第七節　類則提唱（其二）……五三三
其二　僧問馬祖……五三三
其三　又西來意……五三四
第二十七則　體露金風……五三五
第一節　垂示……五三五
第二節　本則……五三六
第三節　本則提唱……五三七
第四節　本則評唱……五三八
第五節　類則提唱……五四〇
其一　雲門非思量……五四〇
第六節　頌……五四一
第七節　頌評唱……五四五
第二十八則　南泉不是心佛……五四九
第一節　本則……五四九
第二節　本則提唱……五五四
第三節　本則評唱……五五六
第四節　頌……五五八
第五節　頌評唱……五六三
第六節　類則提唱……五六六
其一　元字脚……五六六
其二　一字不說……五六七
其三　妙訣……五六八
第二十九則　大隋劫火……五六九
第一節　垂示……五六九
第二節　本則……五七〇
第三節　本則提唱……五七三
第四節　本則評唱……五七五
第五節　類則提唱……五七七
其一　大隋飯頭……五七七
第六節　頌……五七八
第七節　頌評唱……五八一
第三十則　趙州大蘿蔔頭……五八三
第一節　本則……五八三
第二節　本則提唱……五八五
第四節　類則提唱……五八七
其一　九峰麥……五八七
第五節　頌……五八八
第六節　頌評唱……五九一
以上

碧巖集講義

三江紹益禪師提唱
洪嶽今津紹柱講義

第一則　聖諦第一義

第一節　垂示

垂示云。隔山見煙早知是火。隔牆見角便知是牛。擧一明三。目機銖兩。是衲僧家尋常茶飯。至於截斷衆流。東湧西沒。逆順縱橫。與奪自在。正當恁麼時。且道是什麼人行履處。看取雪竇葛藤。

【讀方】山を隔て丶煙を見て早く是れ火なることを知り、牆を隔て丶角を見て便ち是れ牛なることを知る。擧一明三、目機銖兩。是れ衲僧家尋常の茶飯。衆流を截斷するに至つて東湧西沒逆順縱橫。與奪自在。正當恁麼の時、且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。雪竇の葛藤を看取せよ。

【字義】一。隔山見煙乃至目機銖兩　學人後發の機便を擧げたもので。隔山見煙。隔牆見角の譬は其のもと。遺教經に出

て〻居る。舉一明三とは。一を擧ぐれば三を明めると云ふので。俗に云ふ一を聞ひて十を知ると云ふ程のこと。目機は。機は易にも。動の徴。善の始めて露はる〻也で。機は發動の義。俗に云ふ目分量と云ふ程のこと。錄兩とは一錄一兩で一厘一毛と云ふ程のこと。ツマリ一を聞ひて十を知り。秤にヒラリと物を掛ける端的に。早や厘毛迄も見破る。目分量で直に厘毛の微迄分ると云ふ。一寸も抜け目の無い樣子を云ふたものである。

二。衲僧家尋常茶飯。　衲の字は襤褸を綴り合せた衣服のことで。俗に云ふ破れ衣のこと。裂裝は叢掃衣とも申して。全く襤褸を綴り合せて作るのを本式とするのであるから。裂裝のことを衲衣と云ふ。それが一轉して。裂裝を掛ける僧侶のことを衲子だの。衲僧だのと云ふ。それで衲僧と云へば。總べて僧侶のことなれども。禪宗では慣習上。俊發怜悧な作用のある者を衲僧と云ふことに成て居る。尋常茶飯とは尋常一樣の茶漬飯と云ふことで、マア朝飯前の御茶の子と云ふ程のこと。

三。截斷衆流。　截斷はタチキルこと。衆流は一源に對す。敎家で云ふ眞如法性。靈妙心源。一眞法界。第一義諦など有難そうな名を付けるのが一源である。衆流はそれの反對で。衆は衆多。流は流類であるから。世の中に有りとあらゆる一切の現象。それを皆衆流と申すのである。

四。正當恁麼時　サアこうなつた時と云ふこと。

五。行履の處。　行は行狀。行跡。履は履歷と云ふことで。動作と云ふこと。

六。葛藤。　葛も藤も共に蔓の類で。松や柏に纏ひ付ひて生ひ立つもの。

【講義】　垂示に云く。これは第一則の垂示である。垂示は一に示衆とも垂語とも申して敎を垂れることであるから、これは圜悟禪師か自家の門人に示されたものである。山を隔て〻煙を見て早く是れ火なることを知る。牆を隔て〻角を見て便ち是れ牛なることを知る。これは學人の俊發な作用を申したもので、涅槃經に「遠く煙を見て名けて火を見るとするが如し」と云ひ「人の遙かに籬間の牛角を見て便ち牛を見ると言ふが如し」とあるに據つて申したものである。聞いたところ隨分俊發な機轉には相違ないが、また〳〵手ぬるい。舉一明三目機錄兩。何れも寸分拔け目のない樣子を申したもので、一を聞いて十を悟り。チョト一目見て直ちに一厘一毛の目方までも知ると云へば何に樣怜悧には相違ひないがまた〳〵十分とは申されぬ。宇宙の眞理を手の上で轉かし社界の現象を鼻の先きで弄ろうと云ふ此の位いのことは、是れ衲僧家尋常の茶飯で、別段珍らしいことでもなけらねば變つたことでもない。ゆはゆる尋常一樣の茶飯雜談で朝飯前の御茶子に過ぎないのである。世間では、須彌山に腰うちかけて世界をば、呑めと喉には障らざりけりと云へは如何にも大きな喉のやうに思ひ、須彌山に腰うちかけて世界を呑む人を、小指の先きではねどばしけりと云へば如何にも大きな小指のやうに思ふて居るが、この位いの喉や小指ならば小僧の手元にてもいくらでもある。御用とあれば何時でも御用だてやう。衆流を截斷するに至つて東湧西沒逆順縱横與奪自在。衆流は世の中のありとあらゆる一切の現象で、妻も衆流なれば子も衆流である。財產も衆流なれば名譽も衆流である。佛も衆流なれば法も衆流である。山も衆流川も衆流花も衆流月も衆流で一切悉く衆流ならざるものはない。吾々凡夫は生れてから死ぬ迄此の衆流の中に浮いたり沈んだりして居る。それであるから自由が得られないのである。そこで其の衆流を截斷と申して、絲目も殘さずクキリと斷ち切つて仕舞ふた日には東湧西沒逆順縱横與奪自在で、

思ひのまゝ欲するがまゝに行動することが出來る。世間のものはそれを鮪と名ける。アノ鮪と云ふ者は誠に面白い奴で、見れば顔には八字鬚を生やして居る。そこで鮪鬚など云ふ言葉がある。あの鮪をつかんでごらうじ、空とにぎれば有とすべり、有とつかめば空とぬける。有空とにぎれば非空有とすべる、何ともはやして見やうのない奴である。そこでどうしやうとてもつかみきれぬと云ふので鮪と申したと云ふことである。正當恁麼の時且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。サアこうなつたときには、これは抑も何人の動作であり誰人の境界であらうぞ。雪竇の葛藤を看取せよ。葛藤は即ちツルであるから松の木などにまといつくものであるが、此の葛藤のためには千年の翠をたもつべき松の木さへもかれると云ふことである。佛法にも色々の葛藤があつてそれを經と云ひ、論と云ひ、釋と云ひ、或は又坊主、など〻云ふ。さて圜悟は雪竇の葛藤を看取せよと云はれるからよく顔を洗つて目をこすつて謹んで拜見をしよと云ふのであらう。抑も雪竇の葛藤とは如何なるものであらう。

第二節　本則

【舉】梁武帝問達磨大師。啞說這不如何是聖諦第一義。是甚驚驚。磨云廓然無聖。將謂多少奇特。箭過新羅。可煞明白。帝曰。對朕者誰。滿面慚惶强僅々。果然摸索不著。磨云。不識。咄。再來不直半文錢。帝不契。可惜許。鈍人有眼。傍人有眼。帝曰。陛下還識此人否。和達磨趕出國始得。好與三十棒。達磨來也。好一時趕出國。帝後舉問志公。貧兒思舊債。達磨遂渡江至魏。懼。從西過東從東過西。帝曰不識。郤是武帝承當得達磨。公案。志公曰。此是觀音大士傳佛心印。膠不向外曲。帝悔遂遣使去請。果然住。向道不啞啞。志公曰。莫道陛下發使去取。東家人死西家人助哀。也好一時趕出國。闔國人去他亦不回。志公也好與三十棒。不知脚跟下放大光明。

【讀方】梁の武帝達磨大師に問ふ。這の不啞啞を說くの漢。如何なるか是れ聖諦第一義。是れ甚の驚驚ぞ。磨云く廓然無聖。將に謂へり多少の奇特と。箭新羅を過ぐ。可煞明白。帝曰く朕に對する者は誰ぞ。滿面の慚惶强て僅々。果然として摸索不著。磨曰く不識。咄。再來半文錢に直らず。帝契はず。可惜許。却りて些子に較れり。達磨遂に江を渡りて魏に至る。這の野狐精。一場の懼驚を免れず。西より東に過ぎ東より西に過ぐ。帝後に舉して志公に問ふ。貧兒舊債を思ふ。傍人眼有り。志公曰く、陛下還つて此人を識るや否や。達磨に和して國を趕出して始て得でん。好し三十棒を與ふるに。達磨來也。帝曰く不識。却りて是れ武帝達磨の公案を承當す。志公曰く。此れは是れ觀音大士佛心印を傳ふ。胡亂に指註す。臂膠は外に向て曲らず。帝悔いて遂に使を遣はし去つて請せんとす。果然として把不住。向に道ふ不啞啞。志公曰く。道ふこと莫れ陛下使を發し去つて取らしめんと。東家の人死すれば西家の人哀を助く。也た好し一時に國を趕ひ出すに。闔國の人去るとも他亦回らず。志公也た好し三十棒を與ふるに。知らず脚跟下に光明を放つことを。

【字解】一。舉す。　爰で本則と云ふ言葉を解釋して置かうと思ふ。本則は前の垂示や後の頌に對して之れが全く本文であるから本と云ひ則は規則とか法則とか申す則であるから卽ち萬人のノリ手本となるべき性質のものと云ふので本則と申したのである。本則を又或は公案とも古則とも名ける。公案は公府の案牘で法律案とか議案とか申すも同じことで、佛祖の一言一行は確乎不拔にして昧まし難く背きがたきこと公府の案牘の如しと云ふので公案と名け。又古人の公案一則と云ふのを略して古則と申したものである。舉すと云ふ舉は擧示の義で雪竇が自分の門下生に示されたものを記者がしるした詞である。

二。梁武帝　姓は蕭名は衍字は叔達と申して。漢の蕭何二十五世の孫である。南齊の和帝、名は寶融と申した人の宰相となつたが後梁公に封ぜられ幾くもなく梁王となり遂いに齊の讓をうけて帝位に卽いて高祖武帝と稱した。始め熱心な道敎の信者であつて、道敎に關する著書さへもせられたが、卽位第三年卽ち天監三年に道敎を捨てゝ佛敎を歸依せられるやうになつてからは、殊の外熱心な信者になられて、其の頃の名僧であり智識であつた寶誌和尙だの傅大士善慧居士などゝ深く交はり又淨土敎の曇鸞大師などをも厚く崇敬せられた。武帝の子に昭明太子と云ふ方があつて。此の人も非常な佛敎の信者で同時に學者であつたものであるから、相共に佛敎を研究して寺院を建てたり僧を度したり、或は又講經の事に日も之れたゝならざるありさまであつた。涅槃經大品經等を初め幾多の經論に注釋を書いて其の數數百卷にも及んだ。けれども惜しいことには龍を畫いて眼を點ぜぬやうなもので、武帝が斯く迄佛敎に歸依をせられたけれども、ゆはゆる衆流を截斷して逆順縱橫興奪自在と云ふ妙境には夢にだも至つたことがなかつたものであるから、初めて達磨大師に逢ふた時に、朕卽位以來寺を造り經を寫し僧を度することあげて數ふべからず何の功德があると問いかけて達磨のために無功德とあたまからやりこめられた。此の本則は其の時に起つた出來ごとであらうと思はれる。在位四十有七年。太淸三年の五月に崩去せられた。日本では欽明天皇の御卽位後十年であるから、卽ち十三年の十月に佛敎が傳はつて參るよりあしかけ四年前のことである。

三。達磨大師。　申す迄もなく震旦佛心宗の第一祖、迦葉尊者よりは第二十八人目に當るお祖師樣である。傳記に就ては色々の異說もあるが、假りに古來の說によると、南天竺香至王の第三子、姓は刹帝利種で卽ち日本で申せば皇族である。始めの名は菩提多羅と申したが、後第二十七祖の般若多羅尊者の弟子となつて名を菩提達磨と改められた。尊者の遷化後梁の普通七年九月に海路支那へやつて來られて廣州に上陸せられた。爰で廣州の刺史蕭昻の歡迎をうけて翌年の十月に梁の都金陵に入り始めて武帝に對面をせられた。此の本則は此の時の出來ごとである。かくて十一月に洛陽に入つて嵩山の少林寺に滯留をせられた。此れが魏の孝明帝の孝昌三年のことである。有名な九年面壁の話や惠可の斷臂は此の間に起つたことである。かくて魏の文帝の太統二年十月五日と云ふに化緣つきて遷化をせられた。其の後唐の代宗から圓覺大師と云ふ諡を賜つた。これが經師屋や煙草屋の看板になり或は火吹き達磨となり或は又不倒翁となつて三歲の童子にも知られてゐるお尻くさりの達磨大師である。

四。這の不唧噜を說くの漢　這は此字と同意なり。不唧噜は宋國の俗語にして不秀鈍とか。不怜悧とか云ふ義。漢はこの男あの男と云ふに同じ。宇宙の眞理は元來他人に向つて問ふべきものでなく。人々各自に反省して見るべき筈なるに。武帝の愚鈍なる。達磨大師に向ひ問を發したるを評して。圜悟老人か。何を問ふぞ不利發な和尙奴。馬鹿なことを問ふ男だと一言さしはさむ。

五。聖諦第一義　聖諦は眞諦と云ふも同じことで、第一義は第二義に對する言葉であるから、ツマリ佛法の道理の此の上もなく大切な有り難いところ。極々無上のところと云ふのと同じことである。武帝が寺を建てたり僧を度したり佛を供養したり經を讀んだりしたことは數へきれないほどですがドンな功德が御座りましやうかと問いかけた處を達磨にスゲナク無功德とはねとばされたものであるから。今度は然らば佛法の道理の至極の處はどんなもので御座りませうと問いかけたものと見へる。

六。是れ甚の繫驢橛ぞ。　甚の字何の字に同し。繫驢橛は驢馬を繫ぐ木橛のこと。何だツマラヌ物を持ち出したなと云ふ程のこと。

七。 廓然無聖　廓然はカラアとして物の無き貌。無聖は聖無し。大虚廓然と廓かにして一塵立たす。凡の聖のとては何もないぞとの義。一體に佛など〻云ふものがあるやうに思つて居るのが抑もの間違いである。

八。 將に謂へり多少の奇特と。　達磨大師南天竺より遙々御座つた程に。何か多少珍らしい奇異な答話も有らうぞと思ふたに。何のことぢやい面白くもないと云ふ。

九。 箭新羅を過ぐ。　箭は矢なり。新羅は百濟高麗と共に三韓の一。支那よりすれば東海の一國に當る。矢新羅國を通り過ぎてしまふ。ドコへ落ちることやら落處が知れぬ。廓然無聖と答へた落着はドフなることぞ。

一〇。 可煞明白　可煞は甚の字に當りハナハダ。明白は日月の如く明きらかぞ、達磨の答へは脱躰現成クモリがないぞ。

一一。 滿面の慚惶強いて惺々。　武帝は達磨の答を解し得ず。實に赤面の至り。慚愧至極身の置き處もない筈である に、強いて惺々とシラ〳〵しく慚をかくし惺をこらへて朕に對する者は誰ぞなど〻第二の問を起しなど〻は誠に氣の毒なものである。

一二。 不識。　何やら一向存じません。試におあいにくさまなことで御座りますと云ふ。

一三。 果然として摸索不着。　ソレ見たことか、どうして武帝の小刀細工ぐらいで。達磨の痒い處へ手が届くものか。

一四。 咄。　叱と云ふに似たり。呵と云ふも似たり。前漢書東方朔傳に。朔之れ笑つて咄と曰ふとありて物事を叱り付ける詞で。あ〻まづいことゝこばみふせぐ心がある。

一五。 再來半文錢に直らず。　前に廓然無聖を賣りつけやうとしたけれども武帝はそれを一錢には買うてくれなかつた。然るに又もや不識など〻ふれこんでも到底半文錢にも買ふて呉れまい。

一六。 可惜許。　ア〻惜しいことをしたと云ふことであるが、何を惜しいことをしたのであらう。

一七。 却りて些子に較れり。　元來迷もなければ悟もない凡もなければ聖もないのであるから。契ふたなど〻云へば却つて虚妄で有所得の妄想である。それ故不契とツカリ達磨に瞞着せられなかつた方が寧ろ大にましであるらしいと云ふのであるから。此れは武帝を愚弄したものであらうと思はれる。

一八。 江を渡つて魏に至る。　達磨はとう〳〵しびりをきらして武帝を後に楊子州を渡つて江北の魏の方へ往つたものと見へる。傳には達磨が武帝に見みえたのは大通元年の十月二日のことで江を渡つたのは此の月の十九日洛陽へついたのは十一月二十三日のこと〻なつて居る。

一九。 遺の野狐精。　精はバケ者と云ふ字であるから。之れは達磨を此の古狐の大怪物めがと罵つたものでこの一罵こそ眞に祖師西來の恩を謝してあまりある言葉である。若し吾々が此の古狐の路後をつけてあるくやうなことなれば忽ちばかされてしまつて未來永却浮ぶ瀬はなからう思はれる。

二〇。 免れず一場の懊惱。　懊惱は耻辱と云ふに同じ。達磨が折角南天竺からやつて來て。不首尾ダラ〳〵で魏に至つたは一場のハダカキことよ。

二一。 西より東に過ぎ東より西に過ぐ。　これは達磨がハル〳〵天竺からやつて來て衆生濟度の爲めに東奔西走せられるありさまを評したものである。

二二。 志公。　志公は卽ち寶志和尚のことで姓は朱氏。金陵の人である。深く禪定に通じて其の行實には誠に不思議なことが多かつた。梁の武帝の歸依をうけて深く尊敬せられて居つたが天監十三年の冬に疾なくして遷化せられた。謚を妙覺大師と賜はり後又普濟聖師菩薩と云ふ菩薩號までも賜つた。

二三。 貧兒舊債を思ふ。　サスガの武帝も廓然無聖だの不識だのと云ふ聞きなれない說法を聞いて何となく氣に掛つたと見へ志公に聞いたところか如何にも貧乏人が舊い借金のことを思ひ出したやうである。

二四。 傍人に眼あり。　サスガは誌公である。如何にも目のつけどころが高いと稱揚する。

二五。 達磨に和して國を趕出して始めて得てん。　趕出は逐ひ出すことである。志公が武帝に反して陛下還つて此の人を知るやなど〻云ひ出したやうすが、如何にも達磨と同じ穴の野狐精らしいに依つて、一層のこと逐ひ出して仕舞ふた方が利

益であらうと云ふ。これは志公を褒めて武帝を愚弄した言ひ分である。

二六。好し三十棒を與へんに。　兎角四の五のやかましいから。三十棒を與へてナグリ出した方が宜からう。

二七。達磨來也。　ソラ又達磨樣が出て來た。とあくまで誌公を褒めたものである。

二八。帝曰く不識。　先きの達磨の不識と聞いたところ同じやうであるが實は月とスッポンとの大違ひ頓と力のない不識である。

二九。却つて是れ武帝達磨の公案を承當す。　之れは武帝が不識と答へた處が如何にも達磨の不識の公案に承當して居るやうであると云ふので飽くまで武帝を嘲弄したものである。イヤ武帝が猿の口眞似をしよると云つたやうな按梅と見へる。

三〇。觀音大士佛心印を傳ふ。　觀音は具さに云へば觀世音菩薩とも申して勢至菩薩とともに極樂淨土の阿彌陀如來の脇侍である。大士は摩訶薩と云ふのを飜譯したもので士は大夫と云ふも同じことであるから俗に申す大人と云ふ程のことである。佛心印は卽ち佛の心印で。印は印可とか印證とか云ふから確かに證據だてることである。梁の武帝は非常に觀世音を信仰した人で自ら清觀音經に依つて圓通懺摩法と云ふものを選述して頷りに禮拜懺悔をつとめた人であるから、寶志和尙の此の言葉を聞いて實にとび上る程驚いたことであらうと思はれる。

三一。胡亂に指註す。　ドコノ馬の骨やら狗の骨やら知れぬものを。志公は觀音ぢやの佛心印ぢやの云ふが實に胡散くさい指示註釋である。

三二。臂膊は外に向つて曲らず。　ヒジや向ふズネは內にこそまがれ外に向つては曲りて居らぬ。ドの樣に方便しく言ふてきかせたからとて武帝に悟りが開けるきづかいは無いと申したものである。

三三。果然として把不住。　ソレ見たことか武帝に觀音や佛心印がわかるものではない。

三四。向に道ふ不唧溜。　其れだから先きに鈍物ぢやと云ふたのである。

三五。東家の人死すれば西家の人哀を助く。　志公がこんなことを云ふて武帝を諭すやうすが丸で隣人におくやみを云ふやうである。

三六。也た好し一時に國を趂ひ出すに。　とかく志公は達磨と同じ樣な怪物に相違ないから一所にたゝき出して仕舞ふた方がよからう。

三七。國國人去るも他は亦た回へらず。　たとへ梁の君臣士庶人が悉く擧つて迎ひに往つたところで到底あの達磨が歸つてくる氣づかいはないからそれはお止めになつた方が宜しからうと云ふ。

三八。志公也好し三十棒を與ふるに。　志公が色々のことを傍から云ふて、武帝を誑らかすから。これは一層三十棒を與へてたゝき出した方が後の爲めに宜しからう。

三九。知らず脚跟下に大光明を放つ。　何も遠く江北迄達磨大師をお迎ひに往かずとも人人各自の脚跟下に大光明を放つて立つて居られるから先づ脚下を搜して見た方がよからうと吾々に注意せられたものと見へる。

第三節　本則提唱

擧梁武帝問達磨大師下語云。雖有逆水波只是無頭角。

茲にての下語は無くとも可也。大德派は不着也。梁武帝の不契處を見かけて付た下語也。

如何是聖諦第一義下語云。向鬼窟裡作活計。

聖諦第一義と問たは。帝王の上を問た方もあり。又敎の上を隨分と思ふて。聖諦第一義と問た也。又字面は眞俗不二の處を云ふ也。敎の極意也。眞諦は非有を明かし。俗諦は非無を明かす。眞は佛法。俗は世法也。此二ッ無一物の處なり。武帝敎の窠窟に墮在して。禪と云ふても此上は

在るまいぞと思ふて問た也。武帝は大敎者也。敎學を隨分と思ふて。聖諦第一義と問たぞ。敎學計りては。生死截斷はなるまいぞ。鬼の窟に入りて活計をしたる程の事也。先師下語に。問得須ニ始得一。

麽云。廓然無聖。下語云。銀山鐵壁。

廓然無聖はほがらかにして聖なしと云ふ義にして本分なり。本分の上には凡夫もなく聖人もない程に直ちに本分を以て廓然無聖が第一義だと答へた者なり。廓然も無聖も共に本分をあらはす語にして重復の言葉なれば銀山鐵壁と重復の語をつけたるなり。先師の下語に處ニ一處一不レ知レ名。

帝云。對レ朕者誰。下語云。棺木裡瞠眼。可惜許。

無聖と云ふ答話に就いて此くは問はれたものなり。帝の心にては、聖の字はヒジリと讀む字なれば、達磨が吾がことを云はれるよと思ひて、偖ても朕に對する者は誰ぞと問はれしなり。敎意の上にては此くの如き鈍なることを問ふなり。死人が棺内から目をむき出したやうなことなり。可惜許はアッタラものよと云ふ義なり。

磨云。不識。下語云。千聖跳不出。無孔鐵鎚。

帝が達磨の眞意を心得ずして重ねて朕に對する者は誰ぞと問ふたを、左樣なことは識らざるぞと云ふので不識と答へたなり。句の心は本分の上は佛祖も窺いがたきところを千聖跳不出と云ふなり。然らば何故に跳不出だとなれば、體形のあるものにこそ出入などゝ云ふこともあれ。體形なきものに何物がありて跳り出でやうぞ。千聖は本分なり。本分は沒縱跡なれば跳不出なり。臨濟宗ならは爰にて棒喝を行すべきところなるを、達磨が不識とばかり答へられたは繞路なり。又無孔鐵鎚と云ふは、孔のなき鐵鎚と云ふことにて、穴が有らばこそ柄を入れて役には立つべけれ。穴のなき鎚は何の用にも立たず。そこを本分に用いたなり。

帝不レ契。下語云。一死不二再活一。自救不了。果然。滯レ句ニ者ハ迷。

達磨の答話を少しも心得ざる故に死人は再び活きかへるまいと評し。果して然り。豫想通りに帝は契はなかつたと云ひ。又帝が敎意に面を打ち込んで、磨の不識と本分を答へたをも心得ずして人我の見の折れざるを句に滯ふるものは迷ふと云ふなり。自救不了は帝の契はざるところをさしたものなり。

達磨逐渡レ江至レ魏。下語云。魚行水濁。步々生二淤泥一。

句の上は現成のやうに何心もないやうなれども、下心に怖ろしき毒氣あり。此の帝はとても契はれまいと見て魏の方へ向はれたものなり。是れより祖師禪如來禪と云ふことが始まるなり。魚行水濁と云ふに權實あり。水を不變のものと見る時は本分にして實なり。魚の濁すところは句中の方にて權なり。武帝は善き檀那なれども禪を會せざる處に居ては曲もないと思ふて魏に向はれ

た處は歩々荊棘を生ずると云ふ趣きなり。先師下語に歩々蹈ニ着清風一。

帝後舉問ニ志公一。下語云。貧兒愚ニ舊債一。賊過後張レ弓。

此句は帝が達磨の魏に至られた後になつて心に悔みたれども什麽の益もなきところを落してなしたる下語なり。帝がそのことを思ひ出して悔みたるは貧兒がふるき債物を思い出した程のことにて、達磨渡江の後それを志公に問はれたは賊過ぎて後になつて弓を張るほどのことにて所詮手後れなるを免れざるなり。先師下語に貪ニ着天上月一。失ニ却掌中珠一。

志公云。陛下還識ニ此人一否。下語云。落草求人。憐レ兒不レ覺レ醜。親言出ニ親口一。同坑無ニ異土一。

志公は達磨と同穴の狐なり。武帝を道に引き入れんとして、達磨と云ふ人を知りたるかと憐んで云ふなり。

帝云。不識。下語云。似則似是未レ是。欺出ニ凶人口一。弄レ物不レ知レ名。敗闕不レ少。

達磨の不識と云はれたに似ては居れどそれは言葉の上だけなり。又誌公に陛下還つて此の人を知るや否やと爲人せられたれとも眞實會せざるが故に不識と白狀したなり。本分の上は佛祖と雖も不識なり。その不識の道理を知らざる故に物を弄して名を知らずと云ふなり。

志公云。此是觀音大士傳ニ佛心印一。下語云。日出乾坤輝。雨降地上濕。月白風清。

達磨は觀音の再來で候ふと何の道理もなくマッスグに答へられた故に此の下語を用ゆるなり。根本の上には何物が何を傳へやうぞ。佛心印と云ふこともあつてこそと見るがよきなり。先師下語に日出月沒。月在ニ青天一水在レ瓶。

帝遂遣レ使去請。不語云。見レ之不レ取思レ之千里。

達磨と云ふことを識らずして後に知つて請待せうづと云ふたとこを見かけてしたる下語なり。さりながら、志公に敎へられて使を遣つて達磨を喚ひかへして再問せうと思ふたは千里萬里遠いことよ。先師下語に迷レ己逐レ物。

志公云。莫レ道陛下發レ使去取。闔國人去他亦不レ回。下語云。三生六十劫。

闔國の人去るも他は亦回らずと云ふ他は達磨を指し又本分を指す。本分は不去不來なればたとい三生六十劫を歷するとも回ることなし。又三生六十劫をふるとも達磨は回へられまじきぞと眞直に見る時は現成なり。又三生六十劫と云ふ數字に就いて見る時は色相なり。又三生六十劫を歷るとも此の本分をば識得すること能はずと見れば抑下なり。又三生六十劫を歷ると云ふこともなきをあるやうに云ふたは機關なり。之れを展べて云へば、一つには帝が三生六十劫幾度生れかはりたりとも本分に相見することは出來まいと云ふ義。二つには本分は所詮ないものなれば三生六十劫しても去りも來りもすまいと云ふ義。三つには敎意に墮在したる武帝が、如何に喚び回へさ

うとしても達磨は所詮歸るまじと云ふ義。四つには本分は本來なきものなればいかに喚べとも歸るまいと云ふ義なり。先師は呼喚不回と下語せられたり。

【請益】何啻閻國人。辨じて曰く、閻國は一國と云ふに同じ。言ふ心は一國内は申すも愚か、たとい三千大千世界が動いて喚べとも、達磨は回らずと云ふ也。此句は風穴和尚已來也。又大象不遊二免徑一とも下語す。大象と云ふたは達磨ゾ。兎徑と云ふたは武帝ゾ。大象と云ふものは、何としたりとも兎徑へは行かぬ物ゾ。又三生六十劫と云ふ句を付けて是れを辨ずるぞ。武帝は何と接して三生六十劫を歷たりとも。心得はゆくまいぞ。月白風清。三生六十劫と云ふたは。落居何の道理もないことよ。年月を經て久しいと云ふ迄なり。

(一)本分　本體とか眞如とか實相とか云ふに同じ
(二)繞路　マハリ道ぞ
(三)現成　現象とか事實とか云ふこと
(四)色相　色アヒと云ふこと

第四節　本則評唱和譯

達磨遙に此土に大乘の根機有るを觀て。遂に海に泛んで得々として來る。心印を單傳して迷塗を開示す。不立文字。直指人心。見性成佛。若恁麼に見得せば。便ち自由の分有りて。一切の語言に隨つて轉せず。脫體現成せん。便ち能く後頭に於て武帝と對譚し。並びに二祖安心の處に自然に見得して計較情塵なく。一刃に截斷して。洒洒落落たらん。何ぞ必しも更に是を分ち非を分ち得を辨し失を辨せん。然も恁麼なりと雖も。能く幾人かある。武帝嘗て袈裟を披て自ら放光般若經を講じ。天花亂墜し地黃金と變ずることを感ず。道を辨し佛に奉じ。天下に誥詔して寺を起て僧を度し敎に依つて修行す。人之れを佛心天子と謂ふ。達磨初めて武帝に見ゆるや。帝問ふ。朕寺を起て僧を度す。何の功德かある。磨云く。無功德。早く是れ惡水驀頭に澆ぐ。若し這箇の無功德の話を透得せば。爾に許す親しく達磨に見ゆることを。且らく道へ。寺を起て僧を度す。什麼の爲めか。都べて功德なし とは此の意什麼の處にか在る。帝婁約法師。傅大士。昭明太子と眞俗二諦を論持す。敎の中に說くところに據らば。眞諦は以て非有を明かし。俗諦は以て非無を明かす。眞俗不二。卽ち是れ聖諦第一義なり。此れは是れ敎家の極妙窮玄の處なり。帝便ち此の極則の處を拈して達磨に問ふ。如何か是れ聖諦第一義。磨云く廓然無聖。天下の衲僧跳不出。達磨他の爲めに一刀截斷す。如今の人。多少が錯つて會して。却りて去りて精魂を弄し眼睛を瞎つて云く。廓然無聖。且喜すらくは沒交涉。五祖先師嘗つて說く。只這の廓然無聖。若し人透得せば家に歸りて隱坐せんと。一等に是れ葛藤を打す。妨げじ他の爲に漆桶を打破することを。達磨中に就いて奇特なり。所以に道ふ一句に參得し透すれば。千句萬句一時に透ると。自然に坐得斷し把得定す。古人道はく。粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず。一句了然として百億を超ふと。達

磨劈頭に一拶を與ふ。多少か漏逗して了れる也。帝省せず。却つて人我の見を以ての故に再び問ふ。朕に對する者は誰ぞ。達磨。慈悲忒慇し、又向つて道ふ不識と。直に得たり武帝の眼目定動して落處を知らざることを。是れ何の言說ぞ。這裏に到りて有事も無事。拈し來るに卽ち堪へず。端和尙に頌あり。云く、一箭尋常一鵰を落す。更に一箭を加へて已に相饒々す。直ちに少室峯前に歸りて坐す。梁主言ふことを休めよ更に去つて招んと。復云く、誰をか招かんと欲す。帝契はず。遂ひに潛かに國を出づ。這の老漢只懊惱することを得て。江を渡りて魏に至る。時に魏の孝明帝當位なり。乃ち北人の種族姓は拓跋氏。後來方に中國と名く。達磨彼に至りて亦出で見えず。直に少林に過ぎて面壁九年。二祖を接し得たり。彼の方に號して壁觀婆羅門と爲す。梁の武帝後に志公に問ふ。公云く陛下還りて此人を識るや否や。帝曰く不識と。且く道へ達磨の道ふ底と是れ同か是れ別か。似たることは則ち也た似たり。是なることは則ち是ならず。人多く錯つて會して道ふ。前來の達磨は是れ他に禪を答ふ。後來の武帝は是れ他の志公に對す。乃ち相識の識なりと。且得沒交涉。當時志公恁麼に問ふ且らく道へ作麼生か祇對せん。何ぞ一棒に打殺して捺糊せらるゝことを免れざる。武帝却りて他に欺を供して不識と道ふ。志公機を見て作す。便ち云はく此れは是れ觀音大士佛心印を傳ふと。帝悔ひて遂に使を遣はし去りて取らしめんとす。好不唧嚕。當時他の是れ觀音大士佛心印を傳ふと道はんを等て亦好し他を擯し國を出さば猶些子に較らん。

人傳ふ志公は天鑒十三年に化し去り。達磨は普通元年に方に來る。自ら七年を隔つ。何が故に却りて道ふ同時に相見すと。此れ必ず是れ謬傳ならん。傳中に載する處に據る。如今は這の事を論せず只他の大綱を知らしめんことを要す。且らく道へ達磨も是れ觀音。志公も是れ觀音。阿那箇か是れ端的底の觀音。既に是れ觀音。什麼と爲てか却て兩箇有る。何ぞ止兩箇のみならん。群を成し隊をなす。時に後魏の光統律師。菩提流支三藏。師と論議す。師相を斥ぞけ心を指す、而れども徧局の量自ら堪任せず。競ふて害心を起して、あまたたび毒藥を加ふ。第六度に至りて化緣已に畢り。傳法人を得たり。遂に復救はず端居して逝く。熊耳山の定林寺に葬る。後ち魏の宋雲使を奉じて葱嶺に於いて師の手に隻履を携へて往くに遇ふ。武帝追憶して自ら碑文を撰して云く。嗟夫れ之れを見て見ず。之れに逢ふて逢はず。之に遇ふて遇はず。今も古も之れを怨み之れを恨むと。復讃して云く。心有なれば曠劫にも凡夫に滯り。心無ければ刹那にも好覺に登ると。且く道へ達磨卽今什麼の處にかある。蹉過すれども也た知らず。

【字解】一。達磨遙かに乃至得々として來る。　達磨は申すまでもなく西天の第二十八祖、支那佛心宗の第一祖でありて、經師屋や煙草屋の看板ではない。得々は德々て滿足の貌であるから、達磨大師が天竺から勿體らしくやつて來られたと云ふのである。

二。心印を單傳して迷塗を開示す。　印は印可決定の義で確かと證明することである。それだと申して別に變つた珍らしいことを敎へるのではない。物を聞くには耳を用い、物を見るには眼を用いよと敎へる計り。知つたことを知らしむるに過ぎ

ないのである。それが即ち佛心宗の衆生濟度の方法である。

三。 不立文字直指人心見性成佛。　世間の人は吾が宗のことを禪宗と呼んで居る。之れは禪定を宗とすると云ふので、何のことはない姿形の上だけに名けたものと見へる。けれども吾が宗は禪宗でもなければ坐禪宗でもない。即ち佛心を以て宗とするところの佛心宗である。禍僧分上爰は何より第一に心得へて置くべきことである。不立文字と申したとて何も文字を撥ふと云ふのではない。言語を忌むと云ふ譯でもない。一切森羅萬象山河大地悉く文字と共に抛却し言語と共に打ち棄てゝ仕舞ふで、借人入自己の佛心如何と返照して見る處が吾宗の面目である。見性成佛。成佛と云へばとて木佛や金佛になるのではない石像や繪像になるのでもない。只是れ元來舊時の人、飯も食へば酒も飲む。鼻もたれゝは小便もする。ブツと云ふ字は佛なりけり。一切ホツテ置いて此の身此の德なりで本來成佛舊來成佛。畢竟人人箇々圓成底である。教外別傳。腹がへつたら飯を食ふ、喉が渴いたら水を飲む。眼は横について居つて鼻は直にくつついて居る。釋迦にも賢ばず達磨にも傳へず。花が誰れに咲くことを敎へてもらうたか、紅葉か誰れに散ることを敎へてもらうたか。彼は生れながらにして君にチヤ〳〵。烏は生れながらにして親にかう〳〵。箇々本來圓成底である。これを敎外別傳の宗旨と申すのである。若し問いたければ庭前の柏樹子に聞け。

四。 說體現成。　萬物吾れと同根。天地吾々と一體。一切萬法と自己と一模に脫出して遙へす差はす。之の儘ながらにして法身の如來である。

五。 二祖。　震旦の第二祖慧可禪師と申して生れは洛陽武牢の人。姓は姬氏、初めの名は神光と申した。四十歲の時に初めて達磨大師に謁し、左臂を斬つて求道の誠を表された。遂いに達磨の法を嗣いで支那佛心宗の第二祖となつた。入滅は隋の文帝の開皇十三年三月で年は一百七歲の高齡であつた。

六。 放光般若經を講ず。　放光般若は二十卷九十品あつて西晉于闐の三藏無羅叉が譯出されたものである。佛祖統記の法運通塞志によると天監三年に童雲殿に幸して經を講じ、同じく六年大品般若經に注を作つて光宅の法雲法師に謁して百餘有司のために講ぜしめられた。中大通三年の十月に同泰寺に幸して親しく涅槃經を講じ、十一月には金字の般若經を講じ、同じく五年に再び同泰寺に幸して金字般若經の題號を講じ聽法のもの太子以下三十萬九千六百人の多きに及んだ。中大同元年に亦同泰寺に在つて金字の三懸般若經を講じ、太清元年に妙殿殿に在つて再び金字の三懸般若經を講ぜられたと云ふことであるから、恐らく此の時分にどこかで放光般若經を講ぜられたものであらう。

七。 誥詔。　誥は告なりて觸れ告げることである。一字づゝ字義を申せば、下より上に告ぐるを誥と云ひ、詔は上より下に蒙らすの語であると云ふことである。

八。 佛心天子。　武帝が昔つて願文を造られた時に、菩提心を起す此の佛心と云ふと申されたと云ふことで、遂に武帝のことを佛心天子と喚ぶやうになつた。

九。 惡水鬻頭に澆ぐ。　無功德の惡水を頭の頂上からぶつかけられたと云ふのである。

一〇。 婁約法師。　梁の慧約字は德素と申した人で姓は婁氏と云にた人である。天鑒十一年に初めて武帝に相見して十八年には武帝のために菩薩戒を授けられた。大同元年の九月に遷化をせられた。武帝はいたく師の遷化を惜んで朝を廢すること三日、服を改めて其死をいたまれたと云ふことである。

一一。 傅太士。　名は翕字は善慧と申した人で傳は即ち其の姓である。婺州と云ふ處の在家の居士で生れたのは齊の建武四年。十六の時に劉氏の妙光と云ふ婦人を娶つて普建普成の二子を生んだ。雲黃山と云ふ處に親ら二本の樹を栽へて双林と名け自ら善慧大士と稱して、非常に佛心宗の宗要に通じて居られた。遺著には傅大士語錄と殊に有名な心王銘とがある。七十三で以つてなくなられたと稱せられて居る。詳しいことは第六十七則に傅太士が金剛經を講ぜられたと云ふ公案があるから、其の下に述べることにしよう。

一二。 昭明大子。　武帝の太子であつて天鑒元年卽ち武帝が始めて都を建康に定め帝位に登られた年に生れられた。諱子統字を維摩と申して頗る英名な方であつた。武帝と同じく非常に佛敎を尊重されて著書などもせられたことであつたが大同

三年の四月に三十六歳を以つて薨去せられた。傳には天下之れを哭すること其の親を喪ふが如しと見へてあるから。惑れ多いことながら我が聖德太子の樣な方であつたと思はれるのである。近くは金剛經を三十二科に分けられたも此の太子であつて、あれは佛の三十二相に因んで法會因由分第一乃至應化非眞分第三十二と分けられたものである。

一三。天下の衲僧も跳不出。　之の達磨大師の廓然無聖には何人と雖も臂をさしほさむものはなからうと云ふのである。

一四。五祖先師。　五祖法演禪師と申した方で圜悟老人の本師であるから先師と崇められたのである。

一五。一等に是れ葛藤を打す。　千佛萬祖、千七百則の公案と云ふも何れは學人の風執を打破せられんが爲めの手段である。漆桶は漆を貯ふる桶と云ふのであるから眞黑であやめがわからぬものである。それを無明煩惱の凝りたる凡夫の迷執に喩へたものである。

一六。一句に參得透すれば。　圜悟大師が始めて昭覺寺に住せられた時の上堂に、大衆見るや一處眞なれば千處百處一時に眞なり。一句透れば千句萬句一時に透ると云ふ言葉がある。教家で申せば一即一切一切即一と云ふところで正しく華嚴の信滿成佛と云ふ法相に似て居る。

一七。古人道はく。　永嘉の眞覺大師の證道歌に出てある言葉である。爰は類則の提唱を見るが宜しい。

一八。達磨劈頭に他に一拶をあとう。　武帝の如何なるか是れ聖諦第一義と云ふ問ひに對して問に一髮の隙間もなく廓然無聖と一挨せられたか。而も丸でノツレンに壓押をして居るやうなもので何等のきゝめもなかつた。

一九。端和尙に頌あり。　端和尙は圜悟の本師五祖法演禪師の師匠に當る白雲守端禪師と申す方であるから即ち圜悟の法祖父である。此の端和尙が曾つて達磨の不識の二字に頌を作られたことがあるが、今はそれを持ち出したものである。一箭尋常一鵰を落す。鵰はクマダカのことである。之れには故事があつて、昔つて後魏の秦王幹が太祖に隨つて獵をした時に一時に二箭を射て二羽の鵰を射落したので射鵰都尉の號を賜つたと云ふことである。隋の長孫晟にも同じやうな話がある。頌の意味は、達磨は先きに放つた廓然無聖の箭先きで只一羽尋常一樣の鵰を射落したが、武帝は一向に喫いそうにもないから更に一箭ハシツと射た。けれども一向射こたへがない。そこで止むを得ず江を渡つて魏の國に行き九年面壁を始められたと云ふのである。

二〇。懷慚。　耻辱と云ふも同じことで。達磨がコソ〳〵と梁の國から夜逃げをして魏の方に向つたは如何にも耻辱の至り面目もないことであると云ふのである。

二一。魏の孝明帝。　魏の第八主で諡は廣宗名は諩と云ふた人で世宗宣武帝の第二子であるが、祖先は太祖黃帝の後裔拓跋珪である。年甫めて六歳にして位につき在位十三年にして殺されてしまつた。此の時代は支那の歷史では南北朝と稱する時代である。

二二。二祖を接し得たり。　二祖は先き申した慧可禪師で始めの名は神光と云ふた人である、斷臂の話は有名なことで誰でも知つて居るから爰ではやめいておくことにする。

二三。何ぞ一棒に打殺して捺糊せらるゝことを免れざる。　志公が四の五の都合の惡いことを併べたてゝるから一棒下に打殺して狗子にでも食はせてしまつたら。武帝は馬鹿な目にあはなくともすんだであらうにと云ふのである、捺糊は捺は塗なり糊はノリであるから俗に云ふヌリデンボカと云ふことで馬鹿にされつと云ふ程の意味である。

二四。志公機を見て作す。　志公は中々食へない男であると云ふので。其のメカリのないことを云ふたものである。

二五。好不唧溜。　武帝のヨイ阿房めと云ふのである。

二六。人傳ふ志公は天鑒十三年に化し去り等。　これは志公は天鑒十三年に遷化した人であるから、普通元年に初めて支那へ來た達磨とは其間前後七年の相違があつて、ばけものでないかぎり此の本則のやうな事實がありそうな筈がないと云ふのであるが。それは專門の歷史家にまかせて置いて何とでも自由に研究してもらう方が好い。吾が佛心宗から云へばそんなことはどうでも宜いので、達磨が居やうが居るまいが。志公が逢ふが逢ふまいが敢て彼れ此れ詮索する必要はないのである。畢竟之れは人人各自の上のこと。決して千五百年前の出來事ではないのである。

二七。 何ぞ止兩箇のみならん群を成し隊を作す。　達磨は何にも天竺生れの達磨や支那生れの志公達磨に限つたことはない。畢竟人人箇々圓成底で動物園の狸公なども時々座禪をして居る。犬も達磨猫も達磨。みゝずくも達磨、肉のお三も達磨。眼を拭つて見れば一一の學人皆是れ箇々圓成底の達磨大師であり觀音薩埵である。

二八。 相を尿ぞけ心を指す。　之れは有相の宗風を尿けて佛心宗の法幢を建てたと云ふことである。

二九。 端居して逝く。　達磨大師の遷化に就いては古來種々の異說があつて、或は(一)大通二年と云ひ、或は(二)大同二年と云ひ、或は(三)太和十九年と云ひ、或は(四)梁の大通元年と云ひ。又は(五)西魏の太統元年と云ふ風に古來まち〳〵であるが、これもどうでも宜しい。支那で遷化されたとて、或は忽嶺を越へて西天にかへられたとて。又は海を渡つて日本に來られたとてそれはどうでもよいので、只要は人人各自に不生不滅の達磨大師に相見さへすればよいのである。然らば此の達磨大師はどこに御座るであらう。圜悟老師は知らす脚跟下大光明を放つことを。お前の足元にねころんでござるがそれがわからぬかのふと云つて居られる。

三〇。 光統律師。　名は慧光と申した人で地論宗の開祖であつて又同時に四分律宗の祖師である。初め佛陀三藏に就いて出家し後道覆律師に四分律を學び又辨法師に從つて諸經論の義理を研究せられた。弟子には有名なる淨影寺の慧遠法師がある。入寂の年時は惜い哉傳はつて居らぬが恐らくは齊朝の頃に生れて後魏の宣武帝の時代に盛に活動した人であらう。

三一。 菩提流支。　南印度の人であつてもとは婆羅門教の僧侶であつたが、六十歲の時初めて佛道に入り後永淳二年に支那へ來て唐の高祖の歸依をうけ、大寶積經を始め五十三部一百十一卷の經論を翻譯せられた。玄宗の開元十五年に百四十六歲の高齡で以つてなくなられたと云ふことである。達磨大師を毒殺したと云ふことは果して事實であるかどうか充分然然せぬけれども。光統や流支の人格から考へて來るとまさかそんなこともと思はれる。然し宗門で古來傳へる處は正しくその毒殺說である。

三二。 熊耳山定林寺。　爰が達磨大師の塔所である、山は潁陽の北益陽縣の東にあつて其の山に兩峯あつて恰も熊の耳の如くであるから名けたと云ふことである。嵩山の少林寺とは支那里數で三百里程隔つて居ると云ふから約吾が國の五里の處である。

三三。 魏の宋雲。　魏の光莊帝の勅をうけて西域へ使に往つて孝明帝の正光四年に歸つて來る時に忽嶺の中で達磨大師が隻履を携へて西天に歸りたるのに逢ふたと云ふ話がある。達磨は果して西天に歸られたか、或は又少林で靜かに寢つて居らるるか、將又大和の片岡で聖德法王に逢はれたか。これは須らく參究して鉄太鼓をたゝいて搜しまはられねばならぬことである。

三四。 且く道へ達磨卽今什麼の處にか在る。　蹉過すれども也た知らず。達磨は卽今どこに居らるゝであらう。ツツかりして居ると吾々の鼻孔裏で歌でも謠つて舞つて居られることであらう。

第五節　類則提唱

其一　無功德

梁武帝問二達磨大師一朕起レ寺度レ僧有二何功德一。下語云。問得可二始得一。

磨云。無功德。下語云。截斷紅塵水一溪。

起寺度僧。供佛だにすれば眞實の功德になると思ふて隨分がらせて問ふた也。

德と云ふ事も無功德と云ふ事も。色相の上ぞ。本分の上には功德無功德と云ふ事はなひぞ。又云く。祢僧の向上の眼から本分の上より色相を截斷して無功德と云ふた方もあり。色相と見れば截

斷が備はる也。

圜悟云。早是惡水驀頭澆。下語云。斬釘截鐵。

色相を截斷して今日の上を悉く閑事と用ひて云へり。磨の無功德と云ふたに知音して我ならば惡水驀頭に澆ぐと道ふべきものをと云ふ義なり。又云く、莫レ道非々想天無レ人。圜悟の上を判しての句也。

其二　一句了然

古人道。粉骨碎身未レ足レ酬。一句了然超三百億。下語云。此恩難レ報。

一句參得の上は粉骨碎身しても未た酬ゆるに足らずとなり。一句了然すれば百億を超る程に。劈腹剜心と腹をさき心をえぐりても一則の恩には酬ひ難き也。先師勅諡定慧圓明國師南化玄興拶して云く。如何是恩。云く恩大難酬。一句參得の恩に什麼にしても酬ひ難き也。這の公案をば。一則半則參するとも。アダに思ふなと。先師參得の密語なり。秘曲の一也。

其三　誰欲招

復云。誰欲レ招。下語云。斬釘截鐵。

兩點をかけて見る。武帝の達磨を呼びかへさんと云はれた時の語也。誰か招きたりとも達磨はかへられまいとのこと。誰をか招かんとするとよむ時は。諸人へかけて云ふたぞ。誰れを招かんとすと讀む時は主にかけて云ふたぞ。何も本分の上から見下ろして截斷して云ふたぞ。本分の上からは何物を招かふぞ。招かふものがありてこそと。向上の眼から悉く打し退けて云ふた也。

第六節　頌

【頌】聖諦廓然。箭過羅。喚。新何當レ辨レ的。過也。有什麼難辨。對レ朕者誰。再來不直半文錢。又恁麼去也。還云。不レ識。三箇四箇中也。哨。因レ前暗渡レ江。穿人鼻孔不得。却被別人穿。蒼天蒼天。好不大丈夫。豈免レ生レ荊棘。深數丈。巳圜國人追不レ再來。兩重公案。用追作什麼。在道什麼。向鬼窟裏作活計。清風匝地有レ何極。果然。大小雪竇向草裏輥。師顧レ視左右云。這裏還有レ祖師麼。爾待番款那。猶作這去就。自云有。場薩阿榮。喚來與レ老僧洗脚。更興三十棒趂出也。未爲分外。作這去就猶較些子。

【讀方】頌に曰く。聖諦廓然。箭新羅を過ぐ。哨何ぞ當に的を辨ずべき。過也。什麼の辨じ難きことか有らん朕に對する者は誰ぞ。再來半文錢に直らず。又恁麼に去るや。還云く不識。三箇四箇中れり。哨茲に因て暗に江を渡る。人の鼻孔を穿ち得ず。却りて別人に穿たる。蒼天蒼天。好不大丈夫。豈荊棘を生ずることを免れんや。脚跟下巳に深きこと數丈。圜國の人追ふとも再來せじ。兩重公案。追ふことを用ひて作麼かする。

什麼の處に在る。大丈夫の志氣何くにか在る。千古萬古空しく相憶ふ。手を換へて胸を槌つ。空を望んで啓告す。相憶ふことを休めよ。什麼と道ふぞ。鬼窟裏に向つて活計を作す。清風匝地何の極か有らん。果然大小の雪寶草裡に戰す。左右を顧視して云く這裏還つて祖師有り麼。個番款を待つや。猶ほ這の去就を作すか。自ら云く有り。櫪薩阿勞。喚び來せ老僧が與に洗脚せしめん。更に三十棒を與へて趕ひ出すも也たまた分外となさず。這の去就を作す猶ほ些子に較れり。

【字解】一。嘆。　獃と同じ獃々は戯笑の貌とありて。フヽンと笑ふことである。雪竇が逢磨の公案を頌して第一句に聖諦廓然と云ふ。それを圜悟老人が評してフフンおかしいそと云ふ。何か可笑いぞ。箭新羅を過ぎて落處の知れぬが可笑い。諸人會すや否。

二。過なり。　雪竇物知り顔に言はれるかイヤ逢ふたぞ。圜悟など少しも辨じ難いことはない。縱ろも起きろも笑ふも啼くも擧足下足皆是れ廓然の端的である。

三。又怎麼にし去るや。　又武帝と同しやうなことたなさるのであるか。山僧など聞くも嫌ちやと云ふ。

四。再來半文錢に直らず。　雪竇又そんなものを賣りに來られた。買手があるまい。

五。三箭四箭中れり。　一本には三人四人とある。逢磨武帝雪竇ミナ不識々々と等しく射たか。ドウジヤ當るかな。

六。嘻。　咄は喝破の義で叱りとばすことであるから。他人ならば兎に角雪竇老人にして斯んなことを云ふとは何たる馬鹿なことであるぞと云ふのである。

七。人の鼻孔を穿ち得ず却つて別人に穿たる。　これは逢磨が武帝を濟度することが出來なかつたのみか、却つて志公の爲めに濟度せられ。其の上雪竇に迄點檢せられたるやうな無樣なことを罵つたものと見へる。

八。蒼天々々。　サテ〳〵悲しいことであると云ふのであるか、これは何にが悲しいのであらう。

九。好不大丈夫。　俗に申すヨイベラボウと云ふ程のことで、逢磨が短氣出さずに今少し踏み止まつて居たならば、武帝と近附きになつて武帝のよい御得意先きになれたであらうに。いらぬ短氣を出した許りに失敗してしまうたから。此のベラボウ奴。しつかりせろと云ふ。

一〇。脚跟下已に深きこと數丈。　ドコもカシコも荊棘だらけで一歩誤れば此の世ながらの劍樹刀山である。諸人カツカリして蹴きなさろなと注意をした。

一一。兩重の公案。　志公と雪竇と之れで二度目の制札である。モウ讀めましたかといふ。

一二。追ふことを用ひて作麼がする。　人々自己を返照すればよいものを、人の跡を追ふてあるくなどゝ、如何にも男らしくない。人の尻馬になど騎るでないぞと誡める。

一三。什麼の處にかある。　あの逢磨の古狸め。卽今どこへ逃げよつたであらう。いでや鐘鼓太鼓で搜してくれようと云ふ。

一四。大丈夫の志氣何くにかある。　如何にも勇氣のない奴どもである。逢磨を搜し出して何にするつもりであらう。人々獨立自尊。何も他人をたよりにする必要はない。

一五。手を換へ胸を槌ち空を望んで啓告す。　千古萬古相憶ふなとゝ如何にも男らしくもない。過ぎ去つて既に久しき逢磨を天にあこがれ地に求めて何にするか。天道さん聞へませんなどゝ實に女々しいわことである。

一六。什麼と道ふぞ。　雪竇何と云はれる。皆の者疾くと聽聞して置けときゝとがめる。

一七。鬼窟裡に向つて活計み作す。　合點のいかぬことである。雪竇も餓鬼仲間か。勝手の程が思ひやられた。食ふ飯はなささうな。腹はへつても餓じうないなど。大方空腹で有りながら飽いたふりをするのであらう。餓鬼仲間の食話よと。これは圜悟か空腹高心の徒を戒められたものである。

一八。果然。　イカサマ其れに違いない。

一九。大小の雪竇草裡に輥ず。　大小の二字には別段の意味はない。草裡に輥ずと云ふは大道を歩まずに道傍の草の中にコロガリ落ちると云ふことで兒を憐れんで醍を忘れる大慈大悲のところを形容したものである。

二〇、儞の番款を侍つや。　番款は翻款の音通で款と云ふは罪人が判官の前で白狀した豫審調書のことであつてそれを又翻といひかへすのであるから卽ち前の豫審を否定するを翻款と申すのである、これは雪竇が前では相憶ふことを休めよと云ひ爰では祖師ありやなど丶云ふものであるからそれを答めたものである。

二一。猶ほ這の去就を作す。　矢張りそのやうに達磨の跡を追はれるのかと云ふのである。

二二。榻蘿阿勞。　御苦勞千萬なことである。達磨が爰に居られるなど丶イカイうそつきである。

二三。更に三十棒を與へて趕ひ出すも也た未だ分外となさず。　洗脚と云ふも手ぬるい。三十棒を與へてなぐりだして仕舞へと云ふ。

二四。這の去就を作す猶ほ些子に較れり。　達磨に脚を洗はせようなど丶。如何にも面白い趣向である。大いに宜しからうと賛成する。

【講義】　これが雪竇禪師の作られたもので、門人に示さんがために達磨の公案を頌して詩に作られたものであります。頌は梵語に迦陀亦は偈陀と申しまして、詩の六躰に比賦興風雅頌と云ふた時の頌の意であつて、それを吳音で讀むから頌と云ふのであります。此の第一則の頌は初めの四句は四言。次の二句は五言。あとが七言五句で其の間に三言の一句が挿まつて都合十二の長句と短句とで出來て居ります。先づ第一句に聖諦廓然。これは武帝の問いの聖諦第一義の聖諦と、達磨の答の廓然無聖の廓然とを一句にまとめて其の儘拈し來つたものである。何ぞ的を辨すべき。的は端的で、正直と云ふと同じことであるから、明歴々露堂々一點くらます所のない有り樣を的と云ふのである。彼の弓を射る時には向ふの方にマトを置いてそれに向つて矢を向けることであるか、あのマトか卽ち的であつて、それにあたることを的中したと云ふ。若し矢を射る時に一厘一毫でもくるいがあれば、決して矢は的に當るものではない。それで矢を射るには寸分の相違いをも許さぬのであります。今武帝が達磨大師に向つて如何なるか是れ聖諦第一義。抑も佛法の極意至極の道理と云ふものは如何なるもので御座りますかと問いかけた時に達磨がそれに答へて、廓然無聖と一拶せられた。其の聖諦廓然の端的がどうして辨せられようぞ。決して辨することの出來うるものではないのである。朕に對する者は誰ぞ。これは武帝の詞をソックリ其の儘持つて來たのであつて、次に還た云ふ不識と。達磨か不識と答へられたのと一對にして見せられたのである。玆に因つて遂に江を渡る。達磨大師が先きは廓然無聖と云ひ今又不識と答へられたけれども、武帝が一向其の眞意を酌み取ることが出來なかつたものであるから。達磨は遂いに武帝を見棄て丶楊子江を渡つて魏の國へと向はれた。豈に荊棘を生することを免れんや。荊棘は卽ちイバラのことであるから道傍などに生へて居つて頗る人の迷惑となるものである。それと同じく印度に釋迦と云ふいたづらものが世に出で丶、迷ひの悟りの煩惱の菩提のと、いらぬ平地に波瀾を起し、かて丶加へて靈鷲山上にあつて、一枝の蓮華をひねつてニッコリ笑つて見せるなど丶、なぞ

のやうなことをせられるものであるから爰で始めて荊棘が生へ出して來た。若し之の時幸にも雲門大師のやうな方が居られて、此の毛唐人がオギャと生れるや否や一棒下に打殺して狗子にさへやつて呉れゝば。コンな厄介な佛法だの禪道だのと云ふ荊棘も出來なかつたであらうに、實に殘念なことには雲門大師が居られなかつた。それよりこの方此の荊棘が年々歳々はびこつて來たことであるが、それを達磨が天竺から支那へ輸入をして來て、茲で又もや無功德だの無聖だの不識だのとトッテも付かぬことを云ひ散らして、其の上に夜逃げをして嵩山少林寺などへ引込むなどゝ餘計なことをするものであるから、愈々荊棘に荊棘を生じて千七百の公案などゝいふ厄介な森が出來上つて仕舞つて。何ともハヤ今では手のつけやうもなくなつてしまつた。闔國の人追へども再來せず。これも本則その儘で、いくら梁國の君臣士庶人が皆一同に袖を連ねて御迎いに行つたとてアノ達磨は決して歸つて來るためしは御座りませぬと志公が云はれたが。成る程それに相違ない。達磨は早や尻が腐つてあるけなくなつてしまふたから。幾程喚んだところで出て來られよう筈がない。千古萬古空しく相憶ふ。幾くら思ふたところで駄目な話しである。そこで相憶ふことを休めよ。所詮仕方がないから、クヨ〳〵して神經衰弱でもしられた日には實以つて困つて仕舞ふから、マア氣でも廣くもつてクヨ〳〵せずに居つて下さいと云ふ。清風亜地何の極りかあらん。こゝでコロリと舞臺がかはつて神經衰弱の病人のために轉地療養を致せられたものと見へる。いつ迄も達磨の尻を追ひまはして居るに及ばぬ。どこに明月清風のないところがあらう。十五夜の月は、帝王の住つて居る金殿玉樓から眺めても、夜着も持たぬ貧乏人の窓からながめても其の明煌々たる點に於ては少しも變りはなく、爛漫たる櫻花は人跡不到の山の中にも咲いてくれる。尻腐つた達磨の足をかる必要もなければ、毛唐人の釋迦のお世話をうける必要もない。何のくよ〳〵川ばた柳き。天下何處として清風の吹かぬところがあらう。師左右を顧視して云く。これは記者が申したもので、雪竇が門下の大衆を集めて提唱して居られた時に、爰に至つて、ふと左右を見廻して、這裏還つて祖師ありや、ソコらに達磨が寢て居られんかな。向ふに高いびきが聞こへるがあれは達磨大師で御座らぬかなと云はれたものと見へる。自ら云ふ有り。これも記者の言葉で雪竇がフンフンあそこに居ると云はれたあんばいである。喚び來て老僧がために洗脚せしめん。老僧とは雪竇の自稱で。ソレあすこに達磨がねそべつて居るから、早く喚んで來て呉れ。拙僧の足を洗はせたいからと云ふて高座ををりられた。何のことぢや。三拜九拜してお祖師樣をおがむのであるかと思ふたら。此の罰當りめ。足をあらはせようなどゝ云ひよる。これは一躰何と云ふことでありましよう。皆なさんウツカリと祖師にもなれませんぞ。

第七節　頌評唱和譯

且らく雪竇の此公案を頌するに據らば。一へに善く太阿の劒を舞するに似て相似たり。虛空中に向つて盤礴して自然に鋒鋩を犯さず。若し是れ這般の手段なくして纔かに拈着せば便ち鋒を傷り手を犯すことを見ん。若し是れ具眼の者ならば。看よ他の一拈一掇一褒一貶。只四句を用ひて一則の公案を拈定することを。大凡そ頌古は只是れ繞路に禪を說き。拈古は大綱款に據りて案に結するのみ。雪竇他に一拶を與へて劈頭に便ち道ふ聖諦廓然何ぞ當に的を辨すべき。雪竇他の初句下に於いて這の一句を着く。妨げず奇特なることを。且らく道へ畢竟作麼生が的を辨せん。直饒鐵眼銅睛も也た摸索不着ならん。這裏に到りて情識を以て卜度し得てんや。所以に雲門道く。擊石火の如く閃電光に似たりと。這箇の些子心機識情想に落せず。儞が口を開くを待たば什麼をか作すに堪ん。計較生する時。鷄子新羅を過ぐ。雪竇道く儞天下の禪僧何んか當に的を辨すべき。朕に對する者は誰ぞ。箇の還りて云ふ不識と云ふを着く。此れは是れ雪竇忒慈老婆。重々爲人の處なり。且らく道へ廓然と不識と是れ一般か是れ兩般か。若し是れ了底の人の分上ならば。言はずして諭らん。是れ未了底の人ならば。決定打して兩橛となさん。諸方尋常皆道ふ。雪竇重ねて拈すること一徧すと。殊に知らず四句に公案を頌し盡し了ることを。後に慈悲の爲めの故に事跡を頌出す。玆に因て暗に江を渡る。豈に荊棘を生することを免れんや。達磨もと玆土に來りて人の爲めに粘を解き縛を去り釘を抽き楔を拔き荊棘を剗除す。何に因りて却つて道ふ荊棘を生ずと。止當時のみに非ず。諸人卽今脚跟下已に深きこと數丈闔國の人追へとも再來せず。千古萬古空しく相憶ふ。可慈丈夫ならず。且しく道へ達磨什麼の處にか在る。若し達磨を見ば便ち雪竇未後爲人の處を見ん。雪竇人の情見を逐はんことを恐怕る。所以に關捩子を發轉して自己の見解を出して云く。相憶ふことを休めよ。清風匝地何の極みかあらんと。既に相憶ふことを休む。儞が脚跟下の事又作麼生。雪竇道く。卽今箇裏匝地の清風天上天下何の極むる所が有んと。雪竇千古萬古の事を拈して面前に抛向す。たゞ雪竇當時何の極りかあらんと云ふのみに非ず。儞ち諸人の分上も亦何の極りかあらん。他又人の這裏に執在せんことを怕る。再ひ方便を着けて高聲に云く。這裏還りて祖師有りや。自ら云く有り。雪竇這裏に到りて妨げず人の爲めに赤心片片たることを。又た自ら云く。喚び來せ老僧が與めに洗脚せしめんと。太慈人の威光を減ず。當時也た好し本分の手脚を與ふるに。且らく道へ雪竇の意什麼の處にか在る。這裏に到りて喚んで驢と作んが則ち是か。喚んで馬と爲んか則ち是か。喚んで祖師と作んか則ち是か。如何んか名邈せん。往往に喚んで雪竇祖師を使ひ去ると作す。且喜すらくは沒交涉。且らく道へ畢竟作麼生。只老胡の知を許して老胡の會を許さず。

【字解】一。太阿の劒。龍泉、太河と併び稱して我が國で申せば草薙の劒とでも云ふべき寶劒である。
二。盤礴。字書に閑定の貌恬靜の貌とあつて、物靜かにして少しもかけざはりなく、又おち恐ることなくしてスラリ〳〵

と劍をあつこふ有り樣である。

三。這般の手段なくんば。　これしきの腕前なくばの意。

四。一拈一掇一褒一貶。　一拈は聖諦廓然と全く公案その儘を拈提したところ。一褒は何ぞ的を辨ずべきと門下生に拶しかけたところ。一掇は朕に對する者は誰そと重ぬて公案を撮り上げて明したところ。一貶は還つて云く不識とイヤが上にもイヤことを云ふ處である。

五。頌古。　頌は誦なり客なりと申して宗廟の樂歌のことである。それで儒家では盛德の形容を美しく其の成功を以つて神に告ぐるなりと注してある。吾が禪家では、頌は佛祖の盛德を歌誦して讃嘆すること。古は古則の古であるから、卽ち古人の公案を人に擧揚するために詩に作つて誦ふことの出來るやうにしたものを頌古と申すのである。だから圓語も纔路に禪を說くと言葉あやを美くしくするからとうしても持つてまはつて禪理を說くことになると申されてある。

六。拈古。　拈提とも稱して古人の語を提出して諷誦するを拈古と申すのである。それ故釋迦でも達磨でも一分の遠慮曾釋もなく是非を正して容赦するところのないのが拈古の格になつて居る。

七。鐵眼銅睛。　鐵の眼に銅のヒトミと云ふのであるから定めしよく見へることであらう。

八。鶴子新羅を過ぐ。　箭新羅を過ぐと云ふと同じく、落處かわからんと云ふことである。

九。兩橛。　二本のクイと云ふことである。

一〇。荊棘を剗除す。　妄想妄念を削り取つて除去すること。

一一。雪竇人の情見を逐げんことをおそる。　雪竇老人の如何にも慈悲深いところで、吾々が凡情を以つて江を渉つて魔の國へ往つた碧眼の胡僧はかりを戀ひ慕ふて、人人自己本來具足底の活祖を逃がしてしまふものだから、それがために一舞臺かへて更に頌を作られたと云ふのである。

一二。闞捩子。　門のカンヌキのことであるから、爰では雪竇がカンヌキをとり除けて自己の見解を公けにして、吾々を導かれたと云ふのである。

一三。妨げず人の爲めに赤心片々たることを。　雪竇が飽くまでも後學のために思はれてどこ〳〵迄も赤心を披瀝して段々に吾等を導いて吳れられると云ふことである。

一四。當時也た好し本分の手脚を與ふるに。　脚を洗脚せしめると云ふ丈けではまだ手ぬるいから、三十棒をあびせかけて達磨をたゝき出して吳れやうものを。

一五。名邈せん。　名前をつけると云ふこと。

一六。只老胡の知を許して老胡の會を許さず。　爰で知と云ふは不知の知で會と云ふも不會の會であるから、目先き口先きで知ることは兎に角腹のドン底から知ることは中々出來るものでないと云ふのである。

第二則　至道無難

第一節　垂示

垂示云。乾坤窄。日月星辰一時黑。直饒棒如雨點。喝似雷奔。也未當得向上宗乘中事。設使三世諸佛只可自知。歷代祖師全提不起。一大藏教詮注不及。明眼衲僧自救不了。到這裏作麼生請益。道箇佛字拖泥帶水。道箇禪字滿面慚惶。久參上士不待言之。後學初機直須究取。

【讀方】　乾坤窄く。日月星辰一時に黑し。直饒棒、雨點の如く。喝雷奔に似たるも也た未た向上宗乘中の事に當得せず。設使三世の諸佛も只自知すべし。歷代の祖師も全提不起。一大藏教も詮註し及ばず。明眼の衲僧も自救不了。這裏に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも拖泥帶水。箇の禪の宗を道ふも滿面の慚惶。久參の上士は之を言ふことを待たず。後學の初機は直に須らく究取すべし。

【講義】　乾坤窄く日月星辰一時に黑し。此の垂示は向上宗乘中の事と云ふ六字が眼目であつて、此の向上宗乘中の事の廣大無邊なるに比らぶれは、其の高きこと極むべからず、其の厚きこと測るべからずと云ふ宇宙乾坤の廣大もはるかに窄まくして小さく。又此の向上宗乘中の事にくらぶれ

ば、あの光明赫々たる日月も尙暗黑々で丁度日中にマッチをすつた位いのものに過きないのである。直饒棒雨點の如く喝雷奔に似たるも也た未だ向上宗乘中の事に當得せず。たとひ先賢古德かの向上宗乘中の事を文語文字を以て顯らはすことが出來ないからと云ふて、彼の德山和尙の棒のやうに理盡き、言極まれば直ちに七尺の柱杖を揮つて人を打ち、又臨濟大師の喝のやうに聲をはげましてカアーッと大喝一聲する。其の棒を下すことか大雨の點々飛下するが如く、其の喝が喝喝連喝して雷公の走るか如くであつても未だ以つて向上宗乘中の大事、宗旨向上至道の境界に當得せしむることが出來ぬ。設使い三世の諸佛も只自知すべく歷代の祖師も全提不起。佛敎の中でも天台眞言淨土日蓮なとの諸宗は敎家と申して釋尊か一代の間、說かれた處の經文を此の上もない尊い結構なものとしてあかめ、三世諸佛の說法と云へは一言一句と雖も非常にありかたい涙の出ることの樣に思ふて居る。又禪家と申して卽ち直指見性を宗とするの所の吾か禪宗では、以心傳心と稱して歷代の祖師方が心を以つて心を傳へられたと云ふ事を此上もないことの樣に思ふて居ることであるが、其の敎家で尊ふ三世の諸佛と雖も、此の向上宗乘中の事に至つては、只自知すべくして決して人に說き示すことは出來ぬ。自受法樂と云ふより外はないのである。又其の禪家で尊崇する歷代の祖師でも此の向上宗乘中の事に至つては全提不起と申してソノ儘ソックリ引き提けて立つことは決して出來ることではないのである。一大藏敎も詮註し及はず明眼の衲僧も自救不了。既に三世諸佛歷代の祖師か其の通りであつて見れば、其の諸佛か說かれた處の一代藏經。大小半滿顯密の諸敎、五千四十餘卷の中にも決して此の向上宗乘中の事は說きあらはすと云ふことは出來ぬ。又彼の明眼の衲僧と自ら稱して居るところの禪宗のお師家さんがたでも他人の濟度は愚か、自分で自分を救ふことすらも決して出來おふせるものではないのである。這裏に到つて作麼生か請益せん。請益は儒典にある言葉で禮記の曲禮に益を請ふときは則ち起つと云ふ言葉があつて、それは師を尊び道を重んずる也。起は今衣を樞げて前に請ふが若し。益は謂く說をうくれどもあきらかならず師の更に明かに之れを說かんことを欲すとなりと註してあるから師友に物を尋ねた上に更らに質問討論することを請益と申したものである。サアこうなつた上には何んと相談をしたものであらうと云つたあんばいと見へる。箇の佛の字を道ふも拖泥帶水。拖泥帶水は泥をヒキ水をカブルと云ふのであるから、誠に見苦しいと云ふ程のことである。先きにも申した通り天台淨土などの敎家の方々は何とか云へば直ぐに佛とか菩薩とか有りがたそうなことを言い出す、其れは誠に見苦しいぞ、ザマの惡るいことであるぞ。箇の禪の字を道ふも滿面の慚惶。又禪宗の人は何とか云へばすぐに禪の坐禪のと云ふことを云ふかそれはいかにも赤面の至りで實に外聞の惡い話である。久參の上士は之れを言ふことを待たず、久しく此の向上宗乘中の事を參得し來つた上智利根のものには、別段彼れ此れ云ふには及ばぬことであるけれども、後學の初機は

直ちに須らく參究すべし。初學初入のものともは眞實熱心に此の向上宗乘中の大事を參究して是非とも發明自得するところがなければならぬ。

第二節　本則

【擧】趙州示レ衆云。遺老漢作什麼。至道無難。非難非易唯嫌揀擇。喂前是什麼。三祖猶在。纔有レ語言。是揀擇是明白。兩頭三面。少賣弄。魚行水濁。鳥飛落毛。老僧不レ在二明白裏一。賊心已露。遺老向什麼處去是汝還護惜也無。一敗也。也有箇半箇時有レ僧問。既不レ在二明白裏一。護二惜箇什麼一。也好與一拶。挂舌上齶州云。我亦不レ知。拶殺遺老漢。倒退三千。僧云。和尚既不レ知。爲二什麼一却道不レ在二明白裏一。看。一向什麼處去。遂敎上樹去州云。問レ事卽得禮拜了退。輒有遺一着。遺老賊。

【讀方】趙州衆に示して云く。遺の老漢什麼をか作す。遺の葛藤を打すること莫れ。至道無難。難に非ず易に非す。唯嫌揀擇。眼前是れ什麼ぞ。三祖猶ほ在り。纔かに語言あれば是れ揀擇是れ明白。兩頭三面。小賣弄。魚行げば水濁り鳥とべば毛を落す。老僧は明白裏に在らず。賊心已に露はる。遺の老漢什麼の處に向つてか去る。是れ汝還つて護惜すや也たなしや。敗なり。也た一箇半箇あり。時に僧あり問ふ既に明白裏に在らずんば箇の什麼をか護惜せん。也た好し一拶を與ふるに。舌上の齶を挂ふ。州云く我も亦知らず。遺の老漢を拶殺す。倒退三千。僧云く和尚既に知らずんは什麼としてか却つて明白裏に在らずと道ふ。看よ走りて什麼の處に向つて去る。遂ふて樹に上り去らしむ。州云く事を問ふことは卽ち得たり禮拜し了つて退け。輒いに遺の一著あり。遺の老賊。

【字解】一。趙州。趙州の趙州城に觀音院一名東院と申した寺があつて、其處の住持に從諗禪師と申す方が在つた。生れは曹州郝鄉の人で姓は郝氏と云ふた人で。六十歳の時に始めて發心修行の途に上つて八十の年迄諸方を行脚してあるかれたが後に趙州城の觀音院に住して諸方の雲衲に接せられた。入滅は唐の昭宗星帝の乾寧四年十一月で百二十と云ふ高齡であつた。

二。遺の老漢什麼をか作す。　至道は元來言語に絕したものであるにそれを衆に示さうなんて、ハテ何を示さるゝであらう。

三。遺の葛藤を打すること莫れ。　イラヌ葛藤を持ち出して人に厄介を掛けるやうなことは止められたがよからう。

四。至道無難唯嫌揀擇。　之れは震旦佛心宗の第三祖鑑智僧璨大師の書いて置かれた信心銘の冒頭の二句であつてその句に續いだ但無二憎愛一洞然明白の二句は趙州が自分の言葉の中へふくめて纔かに語言あれは是れ揀擇是れ明白と云はれたものである。至道は至極の大道のあるから、即ち垂示で申した向上宗乘中の事である、此の至道は至つて無事であつて、ムツカシイこともなければ面倒なこともない、至極太平無事である。即ち春になれば花が咲き秋になれば果實がみのる。鳥が空中をかければ魚は水中に泳ぐ。眉毛は眼上に横はり呼吸は鼻の孔から通ふ。何も面倒なこともなければ世話のやけることもない。道は即ち往來の義であるから、此の至道が宇宙間にありとあらゆる一切萬物の往來する至極の大道でありて王者も通れば乞食も通る、百姓も通れば商人も通る。馬も通れば犬も通る。月も通れば風も通る。佛も通れば菩薩も通る。逢障も通れば澤庵も通る。一切悉く此の道を通るから此道が直ちに佛祖の大道である。唯嫌揀擇、揀擇はエラヒエラブであるから、花は美しいがイバラは厭ぢや。美人は好きぢやが梅干婆は厭ぢや、赤いは好いが黑いは厭ぢや。甘いものはほしいが不味いものは厭ぢやと云ふことであれはソレコツ大變欲しい厭ぢや憎い可愛いゝと云ふことになつて天下麻の如く亂れ此の世ながらに餓鬼道や修羅道を現出することになる。ソコで唯嫌揀擇と申して、赤いは赤い其の儘なりで黑いは黑い其の儘なり。鵜の脚の長きを厭はず鴨の脛の短きをかまばすと云ふことであつて見れば誠に天下は泰平であつて。吹く風も枝をな

らさぬと云ふ御代になる。そこが即ち佛祖の大道向上宗乘中の事と云ふものである。

五。難に非ず易に非ず。　至道は本來難易を以て論ずべきものではない、それを無難などゝは抑も何事であるぞ。

六。眼前是れ什麼ぞ。　茶碗もあれば土瓶もある。火鉢もあれば煙草もある。そこに何の揀擇があらうぞ。

七。三祖猶ほ在り。　三祖大師今に至つて猶ほ頗る健在である。諸人それ三祖大師の御說法であるぞ。聞きもらさぬように致されよ。

八。兩頭三面。　趙州大郎の冠者。纔かに語言あればと仰せられる。タノウダ御方がそう云ふ言語を發して居られる樣子であるから。あれは恐く兩頭三面の化け者でがなあらうのと云ふ。

九。魚行けば水濁り鳥とべば毛落つ。　早や至道の縱跡があらはれた。趙州老人謗法の大罪を犯されたと云ふ。

一〇。小賣弄。　趙州妙なものを並べ立てゝ見せびらかされるが買い手はあるまい。

一一。賊心已に露はる。　趙州明白裏にあらすなどゝ云はれるがどこへ遁げて往くおつもりであるか。某甲など疾に貴公の腹底を見ぬいた。

一二。這の老漢什麼の處に向つてか在る。　諸人何んと趙州の隱れ家を見たか。それ目をむいて見やれ。

一三。敗なり。　それ敗けた。趙州見苦しいと云ふ。

一四。也た一箇半箇あり。　一人や半人はないこともあるまい。

一五。也た好し一拶を與ふるに。　好い問いところ。しつかりたのむと敎唆かける。

一六。舌上の鬱を拄ふ。　サスガの趙州も此の問には閉口したであらうと冷かす。

一七。這の老漢を拶殺す。　倒頭趙州も一本參つた。

一八。倒退三千。　然し此の我亦不知の一言こそ誠に恐ろしい毒舌であるぞ。これには三世の諸佛と雖もにげ出すより外はあるまいと云ふ。又サスガの趙州も三十六計爰につきてにげ出すより外はあるまいとも見る。

一九。看〻走りて什麼の處に向つてか去る。　趙州此の僧に逐いかけられてどこへ逃げ出されるであらう。諸人能く足元を見屆けて置けと云ふ。

二〇。逐ふて樹に上り去らしむ。　趙州到頭樹の上まで走げおうせられた。此の僧最早や手がとゞくまいと冷かす。

二一。賴いに此の一著あり。　サスガは天下の老和尙である。此の一語こそ天下の衲僧は云ふも愚か佛々祖々たりとも如何ともして見やうもなからう。實に感伏の外はないと云ひ。

二二。這の老賊。　サテ〜恐ろしい老和尙であると闗悟が趙州の後容を見送つて感歎せられたものと見へる。

第三節　本則提唱

趙州示衆云。至道無難唯嫌揀擇。下語云。綠水青山。月在青天水在瓶。

至道は本分なり。本分の上には何の難易があらうぞ。揀擇は二字共にエラブなり。嫌は截斷なり。至道の上には揀擇せうものがない程に慕直に本分の下語を用ゆるなり。又至道無難と云ふを截斷に用ゐて斬釘截鐵とも見、唯嫌揀擇をも截斷に用ゐて兩彩一賽と付ける。二處に切つて付くるなり。

纔有語言是揀擇是明白。下語云。天上月明溪畔雲暗。

至道無難の上を語言で逃ぶるならば揀擇したものよ。揀擇することの有る樣に云ふたは權。溪畔の雲暗なり。是れ明白と本分に云ふたは實。天上月明なり。

老僧、不レ在二明白裏一是汝還護惜也無。下語云。一槌兩當。

是れも權實備つた程に一槌兩當なり。明白揀擇を兼ねてつけたものぞ。至道無難唯嫌揀擇と云ふたは本分を指して云ふたなり。老僧は明白裏に在らず是れ汝還た護惜すや也た無やと云ふたは句中なり。何物を惜しみ護らうぞ。

時有レ僧問。既不レ在二明白裏一護二惜箇什麼一。下語云。要レ捋二虎鬚一。

本分上から箇の什麼とか護り惜うぞと怖ろしい心で問ふたなり。

州云。我亦不レ知。下語云。千聖跳不出。

不知と云ふたは本分を示されたぞ。我々の不出なるのみならず千聖萬聖も不出ぞと云ふなり。

僧云。和尚既不レ知爲二什麼一卻道レ不レ在二明白裏一。下語云。隨レ語轉。

句中を心得ずして字面ばかりを心得へて問ふたほどに隨語轉と云ふぞ。

州云問レ事卽得禮拜了退。下語云。白雲籠二峰頂一終不レ露二崔嵬一。

僧の後語の惡しきを見て、州のいつもの手だてを以つて上をうつくしく云ふて句中を露ささるなり。又禮拜し了つて退けと云ふたは收めた方もあり。

第四節　本則評唱和譯

趙州尋常此の話頭を擧す。唯是れ唯だ揀擇を嫌ふ。此れは是れ三祖の信心銘に云く、至道無難唯嫌揀擇。たゞ憎愛なければ洞然として明白。纔かに是非あれば是れ揀擇是れ明白。纔かに恁麼に會せば蹉過了也。鉸釘膠粘せば何の用か作すに堪へん。州云く是れ揀擇是れ明白。如今の參禪問道、揀擇の中に在らざれば便ち明白裏に坐在す。老僧は明白裏に在らず。汝等還つて護惜すや也たなしやと。汝話人既に明白裏にあらずんば、且らく道へ趙州什麼の處にか在る。什麼として却つて人をして護惜せしむ。五祖先師常に說いて道く。垂手し來つて儞に似過ん。儞作麼生が會す。且らく道へ作麼生が是れ垂手の處。鈎頭の意を識取せよ。定盤星を認むること莫れ。這の僧出で來る。也た妨げす奇特なることを。趙州の空處を捉へて便ち去つて他を拶す。既に明白裏に在らずんば箇の什麼をか護惜せんと。趙州更に棒を行し喝を行せす。唯道ふ我も亦知らずと。若し這の老漢にあらずんば他に拶着せられて往々に忘前失後せん。賴いに是れ這の老漢轉身自在の處あり。所以に此くの如く他に答ふ。如今の禪和子問着すれば也た道ふ我れも亦知らず會せずと。爭奈せん途を同しうして轍を同じくせざることを。這の僧奇特の處あつて方さに始めて問ふことを會す。和尚既に知らずんば什麼としてか却つて道ふ明白裏に在らずと。更に好一拶。若し是れ別人ならば往々に分疏不下ならん。趙州は是れ作家、只他に向つて道ふ事を問ふは卽ち得たり、禮拜し了りて退けと。這の僧奮に依つて這の老漢を奈何ともすることなし。唯氣を飲み

聲を呑むことを得たり。此れは是れ大平の宗師僩がために玄を論じ妙を論じ機を論じ境を論せず。一向に本分の事を以つて人に接す。所以に道ふ相罵ることは僩に饒す、鞋を接げ。相唾することは僩に饒す水を潑けと。殊に知らず這の老漢平生棒唱を以つて人を接せず、唯平常の言語を以てするに唯是れ天下の人奈何ともせざることを。蓋し他の平生許多の計較なきがためなり。所以に横拈倒用、逆行順行大自在を得たり。如今の人理會し得ず、唯管に道ふ趙州答話せず人のために說かずと。殊に知らず當面に蹉過することを。

【字解】一。三祖の信心銘。　震旦佛心宗の第三祖鑑智僧璨大師の著はされたるもので四字一句の偈文一百四十五句からなり立つて居る。直截簡明に禪宗の奥旨を說いたもので禪書としては最も古いものの一つであらう。近ごく傳燈錄の第三十卷目に收められて居るが、別に一卷本としても行はれて居る。

二。纔かに語言あれば是れ揀擇是れ明白。　信心銘の冒頭に至道無難唯嫌揀擇。但た憎愛なければ洞然として明白なりと云ふてあるが、明白と云ふは、山は山なり水は水なり柳は綠で花は紅ゐであると云ふ即ち本分のこと、悟りのことで揀擇の迷いに相對するものであるから、そこを趙州老人が佛だとか衆生だとか悟だとか迷だとか苟くも口の端にかければ早や揀擇の迷か明白の悟かのドチラかへ墮落して居るので、迷に沈むのかツマランと同じく悟に沈むのもツマランので即ち悟りと云ふ一種の病氣にかゝつて居ると云はれたものである。

三。鉸釘膠粘せば何の用をか作すに堪へん。　釘で打ちつけたり膠でひつけたりしたやうなもので何の役にも立たぬのである。

四。汝等還つて躊躇すや。　趙州が此の老僧などは只に揀擇の迷路に流浪して居らぬのみでなく又明白の悟道の中にも彷徨して居らぬがお前さんたちも能く自ら保護して珍惜するところがあるかどうかなと云はれたものである。

五。五祖先師。　圜悟老師の本師五祖法演禪師を指したもので、禪師は法を白雲の守端禪師に嗣かれた方である。

六。定盤星を認むることなかれ。　定盤星を認めると云ふは、すべて衡で物を量るには、其の量るものの重さに應じて、一方衡の目もりを變じて行かねばならぬのであるに、それを心得ずしていつも同じ目もり計りを見て居れば、決して正當に物の重みを計ることは出來ぬ。然るに愚人は其の心得がないものであるから少しも融通がきかぬ。それを定盤星を認むと云ふのである。

七。分疏不下。　申し譯けがあるまいと事ふ俗語である。

八。事を問ふことは即ち得たり禮拜し了つて退け。　貴公は中々理窟が上手であるから物を問ふことは誠に甘い、しかしもうそれでよいから禮拜して退かれるが好いと云つたやうなあんばいと見へる。禮拜して退くのは佛敎者の通規で何か物を問ふ時には先づ始めに問ふべき人に禮拜低頭して徐々に問いを起し畢つて又禮拜して退くのが普通の禮儀である。

第五節　頌

至道無難　三重公案。滿口言端語端魚行水濁。七花八裂。探胡也。
兩般一　何堪四五六七。天際日上月下。觀面相呈。頭上漫漫脚下漫漫。切忌昂頭低頭。
更木再活。還覺毛卓竪麽。闖髏識盡喜何立。棺木裏噎喉。麽行者是佗同參。
枯木龍吟鎗未乾。咄。枯木再生花。逢磨遊東土。
難難邪法難扶。倒一說。這裏是什麽所在說難說易。
揀擇明白君自看。嗜。將謂由別人。頓値自看。不干山僧事。

【讀方】至道無難　三重の公案。滿口に霧を含む。什麽と道ふぞ　言端語端魚行けば水濁る。七花八裂。探胡なり。

一に多種あり　分開せば好し。只一般ならば什麼の了期かあらん。二に兩般無し　何ぞ四五六七に堪へん。葛藤を打して什麼をか作す。　天際日上り月下る　觀面に相呈す。頭上漫々脚下漫々。切に忌む頭を昂げ頭を低くすることを。檻前山深く水寒し　一死更らに再活せず。寒毛の卓竪することを覺ゆることなしや。髑髏識盡きて　喜何ぞ立せん　棺木裏瞠眼。盧行者是れ他の同參。　枯木龍吟銷して未だ乾かず　咄。枯木再び花を生ず。逢磨東土に遊ぶ。難々　邪法扶け難し。　鈍一說。這裏是れ何の所在ぞ難と說き易と說く。　揀擇か明白か君自ら看よ　瞎。將に謂へり別人に由ると。賴いに自ら看るに値ふ。山僧が事に干からず。

【字解】三重の公案。　之れは至道無難唯嫌揀擇と云ふ語は其の始め三祖僧璨大師が云はれた語を趙州和尚が衆に示し、今又雪竇がそれを頌に使はれたから三重の公案である。

二。滿口に霜を含む。　霜と云ふものは決して口に含んで滿たしむることの出來ないものであるが、それと同じく至極の大道は決して口の端にかけうべきものでない。

三。什麼と道ふぞ。　諸人超州が何にとか云い出されたぞ、決して聞きもらすな。

四。魚行けば水濁る。　ハヤ綻かたか付いたやうぢや。野暮なことは云はぬものよと云ふ。

五。七花八裂。　支離滅裂でメチヤクチヤになつてしまつた。

六。搽胡なり。　メチヤ〳〵になつてしまつた。

七。分開せば好し。　一に多種ありと云ふから、それは分開して見たらよからう。

八、只一般ならば什麼の了期かあらん。　たつた一つぎりのものならば何の役にも立つまい。

九。何ぞ四五六七に堪へん。　兩般さへ無いのであるから四五六七がありそうなことはない。

一〇。葛藤を打して什麼をか作す。　然し雪竇そんなくだ〳〵しいことを云ふて何になさるつもりであるか。

一一。觀面に相呈す。　ソラ眼の前にあるから眼のあるものは御覽なさい。

一二。頭上漫々脚下漫々。　至道の端的は頭上にも脚下にも漫々と充ち滿ちてあるが諸人うつかりと鼻撞くなよ。

一三。切に忌む頭を昂げ頭を低くすることを。　頭上漫々脚下漫々と云ふたからとて上を仰いだり下を向いたりしてはならぬ。全く其の儘動くなと云ふ。

一四。一死更らに再活せず。　無事甲裏の死在人。再び息を吹きかへすことはなるまい。

一五。寒毛の卓竪することを覺ゆることなしや。　コレは山深く水寒しと云ふたから、急に深山幽谷の間にある樣な心持ちになつて巴峽猿の啼く處を過ぐれば鐵作の心肝も亦た斷腸と誰やらか謠うた樣な感じはしやせぬかと云ふやうなあんばいと見へる。

一六。棺木裏の瞠眼。　何の氣息もない。此の死漢に活處のないのは如何にも氣の毒なことである。

一七。盧行者是れ他の同參。　盧行者は六祖慧能大師の在俗の時の稱である、大師の偈に「生來坐不レ臥、死去臥不レ坐。一具臭骨頭、何爲立二功果一」と云ふのがあるから、今それを圜悟が連想してこれと同參すべきものであらうと云ふたものと見へる。

一八。咄。　某甲ならばそうは云はないに。エヽはがいゝ。

一九。枯木再び花を生ず。　百花爛熳とさき亂れたが、之れなん南呵の一夢ではあるまいかの。

二〇。逢磨東土に遊ぶ。　逢磨は印度の第二十八祖であるが同時に震旦佛心宗の第一祖であり。推古天皇の廿一年に大和の片岡へ飢人になつて來たと云ふから、又我が國佛心宗の第一祖であると申してもよからうと思ふ。

二一。邪法扶け難し。　ソレはどうも贊成しかねる。無難の道場へ難々と踊りなすなどゝは。甚だ以つてけしからぬことぢやないか。

二二。倒一説。　雪竇前には無難と云ひ今度は難々など、議い出された。丁度轉倒の一説ぢやが、定めし物忘れせられたのであらうと云ふ。

二三。這裏何の所在ぞ難と説き易と説く。　雪竇これは一體どうで御座るのと當つて、諸人何と合點出來たかなと顧みる。

二四。睹。　イヤ某甲なんとそんなものを見る眼は御座らぬと兩手でめかくしする。

二五。將に謂へり別人に由る。　然し此れは某甲(それがし)に申されたのではあるまい。

二六。蝦蟆(がまは)いに自ら看るに値ふ。　ソレを見たければ雪竇自分勝手に見られたが好からう。何にも他人に相談するにも及ばないぢやないか。

二七。山僧が事に于からず。　某甲などには何の關係も御座らぬと知らぬ顔をする。

【講義】　此の一頌は長短十句あつて、四言四句に六言と七言とが二句づゝ、そこへ二言一句が加はつて結句は又七言でなりたつて居る。至道無難。これは本則の儘を其の儘第一句にしたもので、本則で趙州が拈提せられた通り至極の大道は實に無事安穩なもので何のムヅカシイこともなけらねば面倒なこともない。春になれば花が咲き秋になれば紅葉が散る。鶯が法を聞けよと鳴けば三寶鳥が佛法僧となく。烏が喝と啼けばとて必ずしも臨濟大師から敎はつたわけでもなけらねば、まさかそれを眞似したわけでもあるまい。言端語端。趙州が纔かに語言あれば是れ揀擇是れ明白と云ふたのを、反對に言端語端と云いだしたもので、言も至道の端的なれば語も至道の端的である。猫も至道の端的なれば、鼠も至道の端的である。チンとなるのも至道の端的ならばツンと響るのも至道の端的である。キャッと叫ぶのも至道の端的ならば、ハハアと笑ふも無難の端的である。一に多種あり。一と云ふは平等一味の本體であるから卽ち明白の本分のことであつて、多は千差萬樣の有り樣でゆはゆる揀擇されたる境界である。二に兩般なし。之れは既に多種ありと云ふたから、然らばと云ふので又此の言葉に取りついて幾らもあるやうに思ふて揀擇するものが出來てくるから、イヤ二に元來兩般はないぞ。柳は綠りの儘にして絶對なれば花は紅いの儘にして絶對であり。月は月にして絶對。星は星にして絶對。宇宙の萬象一一みな獨立獨尊であつて決して他人の厄介には相成りませぬと云ふ。天際日上り月下る檻前山深く水寒し。夜が明くれば日は東海に登りて月は西山に傾く。淨窓を開けば檻前山深くして猿猴彼こに啼き、幽谷水深ふして魚ふちに跳る。是れ此の端的。これは抑も揀擇であらうか或は又明白であらうか。髑髏識盡きて喜び何ぞ立せん。識盡きてと云ふ識は識神と熟してゆはゆる魂魄のことである。既に髑髏でサレコウベになつて見れば、そこに靈魂が宿つてゐさうなことはないからして、それに喜怒哀樂の情が無いことは勿論である、至道の端的も亦此の髑髏のやうなもので、そこに揀擇もなけらねば明白もないのである。枯木龍吟銷(こはくりうぎんしやう)してまた乾かず。これは枯木に風が颯々と觸れると云ふと恰も龍の吟するが如き聲が起つて丁度死んだと思ふたものがまた息を吹きかへしたやうなものであると云ふので、所謂死中に大活を得來つた有り樣を申したものである。難々。こゝは雪竇が今迄無難々々と云

つて居つたのをコロリと一轉して、イヤ難うして難いことであつて、中々容易に到りうることは出來ぬ。揀擇明白君自ら看よ。既に至極の大道であるから何も他人の足を借つてあるく迄もないことである。揀擇もよし明白もよし。畢竟人人各自に眼を開いて、揀擇之れ何者ぞ明白是れ何者ぞと、條處目をふらず言句に泥まず確かと參究して見るが好いぞと謠い收めたものである。

第六節　頌評唱和譯

雪竇他の落處を知る。所以に此くの如く頌す。至道無難便ち後に隨つて道ふ言端語端と。一隅を擧ぐるに三隅を以つて反せず。雪竇道く。一に多種あり二に兩般なしと。三隅一に反するに似たり。儻且らく道へ什麼の處が是れ言端語端の處。什麼としてか一に却つて多種ありて二に却つて兩般なき。若し眼を具せすんば什麼の處に向つてか摸索せん。若し這の兩句を透得せば、所以に古人道く、打成一片舊に依つて見れば山は是れ山水は是れ水。長は是れ長短は是れ短。天は是れ天地は是れ地。有る時は天をよんで地となし。有る時は地をよんで天となし。有る時は山をよんで是れ山にあらずとし、水をよんで是れ水にあらずとす。畢竟怎生が平穩なることを得去らん。風來れば樹動き浪起れば船高し。春は生し夏は長じ秋は收め冬は藏す。一種平懷なれば泯然として自ら盡く。則ち此の四句の頌に頓絶し了れり。雪竇に餘才あり、所以に結裏を分開して算へ來れり。只是れ頭上に頭を安んず。道く。至道無難、言端語端。一に多種あり二に兩般なしと。許多の事なしと雖も、天際に日上るとき月便ち下り、檻前山深きとき水便ち寒し。這裏に至つては言も也た端。語も也た端。頭々是れ道。物々全眞。豈に是れ心境俱に忘して打成一片の處にあらずや。雪竇頭上は太孩峻生、末後は也た遲逗少なからず。若し參得透し見得徹せば、自然に醍醐の上味の如くに相似ん。若し是れ情解未た忘せずんば、便ち見ん七花八裂して決定して此くの如きの說話を會すること能はざらんことを。髑髏識盡きて喜何んぞ立せん。枯木龍吟銷して未だ乾かず。只這れ便ち是れ交處。「這の僧恁麼に問ふ。趙州恁麼に答ふ。州の云く至道無難唯嫌揀擇、纔かに語言あれば是れ揀擇是れ明白。老僧明白裏に在らず。是れ汝還つて護惜すや也た無しや。時に僧あり便ち問ふ。既に明白裏に在らずんば又箇の什麼をか護惜せん。州云く我も亦知らず。僧云く和尙既に知らずんば什麼としてか却つて道ふ明白裏に在らずと。州云く事を問ふことは卽ち得たり禮拜し了つて退け」一本に這の僧以下禮拜し了つて退けの中全文を削る一串に穿却して用ゐて至道無難唯嫌揀擇を頌す。如今の人古人の意を會せず、只管に言を咬み句を嚼む甚の了期か有らん。若し是れ通方の作者ならば始めて能く這般の說話を辨得せん。見すや僧香嚴に問ふ如何なるか是れ道。嚴云く枯木裏の龍吟。僧云く、如何なるか是れ道中の人。嚴の云く、髑髏裏の眼睛。僧後に石霜に問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。霜云く、猶ほ喜を帶ふ

ることと在り。如何なるか是れ髑髏裏の眼睛。霜云く、猶ほ識を帶ふること在り。僧又曹山に問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。山云く血脉不斷。如何なるか是れ髑髏裏の眼睛。山云く乾不盡。什麼人か聞くことを得たる。山云く盡大地未た一個も聞かざるものあらず。僧云く未だ審かし龍吟此れ何の章句ぞ。山云く是れ何の章句と云ふことを知らざれども、聞者は皆喪す。復た頌あり云く、枯木龍吟す眞の見道。髑髏識なし眼初めて明かなり。喜識盡くる時消息盡く。當人那んぞ辨せん濁中の淸と。雪竇謂つべし大いに手脚あり。一時に儞がために交加して頌出す。然も是くの如くなりと雖も都べて兩般なし。雪竇末後爲人の處なり。更に道ふ難々と。只だ這の難々也た須らく透過して始めて得べし。何か故ぞ。百丈道く、一切の語言山河大地一一轉して自己に歸すと。雪竇凡そ是れ一拈一掇。末後に到つて須らく自己に歸すべし。且らく道へ什麼の處か是れ雪竇爲人の處。揀擇明白君自ら看よと。既に是れ葛藤を打して頌し了る。何に因つてか却つて道ふ君自ら看よと。好彩儞をして看せしむ。且らく道へ意什麼の處にか落在する。道ふこと莫れ諸人理會し得ずと。設便い山僧も這裏に到つては也た只是れ理會し得ず。

【字解】一。古人道く。　香林澄遠禪師が將に遷化せんとする時に謂んで、老僧四十年方さに打成一片と言ふて化せられたと云ふことであるが、圜悟はその語をかりてきて、此の話を參透して一念に安住しうるに至れば這の兩句を透得し得て見るもの聞くもの悉く至極の大道であらうと申されたものである。

二。結裏を分開し算へ來れり。　上來公案の要點を頌し擧つたから以下は雪竇が文才にまかせて色々に分開說明して、如何にもして此の事を參究せしめようと、つとめられたところである。

三。太孤峻生。　太生の二字は別段に意味はないので孤峻即ち甚だ孤危峻險で寄りつきやうもないと云ふ意味である。

四。七花八裂。　メチヤ〳〵と云ふこと。

五。交加のところ。　雪竇古人の答話を互ひに雜ぜへ加へて頌を作られたと云ふことで、其の答話は類則として下に出してあるから見るが宜しい。

六。香嚴。　鄧州香嚴の智閑禪師と申した方で潙仰宗の大祖潙山靈祐禪師の法を嗣いだ方である。禪林類聚によると此の因緣は仰山の慧寂禪師一僧の問に答へられたものとなりてあるが、仰山と香嚴とは同じく潙山の法嗣であるから何れにしても大差はなからうと思はれる。

七。石霜。　石霜の慶諸と云ふた人で道吾山の圓智禪師の法を嗣いだ方である。

八。曹山。　曹山の本寂禪師は法を洞山大師に嗣いだ方で而も此の方に至つて一家風を大成したものであるから曹山の曹と洞山大師の洞の字を取つて此の法系を曹洞宗と名けられてある。唐の昭宗帝の天復元年の四月に六十有二歲で以つて遷化せられ元證大師と云ふ勅號を賜つた大偉人である。

九。枯木龍吟眞の見道。　枯木龍吟は枯木に風の颯々と觸れれば龍の吟するが如き聲が起ると云ふので即ち死中に大活を得來つた有樣を申したものである。見道は敎家で談ずる初地住位の見道ではないので立地成佛、凡聖其の儘で即ち法身と見破するのを見道と申したものでこれが即ち吾が宗の眼目である。

一〇。百丈道く。　百丈山の大智禪師が夫れ讀經看敎は語言皆須らく寃轉として自己に歸就すべしと申されたと云ふことであるからそれを引き合せに出したものである。

一一。好彩儞をして自ら看せしむ。　向上至道の眞風光は諸佛列祖と雖も說くことも出來なければ傳へることも出來ぬものでありて、只冷暖自知するより外はない。

一二。道ふことなかれ諸人理會し得ず云云。　貴公は貴公。拙僧は拙僧で、只人人各自に味ふて見るより外はない。

第七節　類則提唱

其一　枯木龍吟

僧問香嚴如何是道。嚴云枯木裏龍吟。下語云。萬里一條鐵。

榮ちや枯ちやと云ふは皆色相の上のことよ。又木の中には龍は居らぬ者よ。無いことを云ふたは本分ぞ。萬里一條鐵と用ひた處こそ道よとなり。

僧云如何是道中人。嚴云髑髏裡眼睛。下語云。兩彩一賽。

髑髏はサレコウベにて色相なり。髑髏に眼睛はなきものぞ。無きことを有るやうに云ふたは本分なり。前と同し境界ぞ。道中の人とは道を受用する人と云ふ義ぞ。萬里一條の鐵と用ひたこそ道を用ひ得た人よ。着語に兩彩一賽と云ふは二つなれども一つと云ふ心なり。

第三則　馬大師不安

第一節　垂示

垂示云。一機一境。一言一句。且圖有二箇入處。好肉上剜瘡。成窠成窟。大用現前不存軌則。且圖知有向上事。蓋天蓋地。又摸索不着。恁麼也得不恁麼也得。太廉纖生。恁麼也不得不恁麼也不得。太孤危生。不涉二塗如何。卽是。請試擧看。

【讀方】　一機一境一言一句。且く箇の入處有らんことを圖るも、好肉上に瘡を剜り、窠を成し窟を成す。大用現前軌則を存せず、且く向上の事有ることを知らしめんことを圖る。蓋天蓋地、又摸索不着、恁麼も也得たり、不恁麼も也得たり、大廉纖生、恁麼も也得ず、不恁麼も也得ず、太孤危生、二途に涉らず、如何んが則ち是ならん、請ふ試みに擧す看よ。

【字解】　一。一機一境一言一句。　機は機便或は機轉と熟して心のハタラキを云ひ、境は對境と熟して形に顯はして見せるもの、六根六境など云ふ境と同し、言句は讀んで字の如し。都べて普通教化の手段を云ふたものである。

二。蓋天蓋地。　蓋は覆蓋など熟しオホフといふこと、蓋天蓋地などいふに同じ。

三。摸索不着。　トリトメのなきこと。

四。太廉纖生。　太生の二字に別意なし、廉纖は物のコマカナこと、能く行き屆くと云ふ程のこと。

五。太孤危生。　太生の二字に別意なし、孤危は孤立危險と熟し、岩石聳立して、頗る險峻を極め攀ぢ登りがたきこと。

【講義】　一機一境一言一句且らく箇の入處あることを圖るも好肉上に瘡を剜り窠を成し窟をなす。機は機轉と申して心の働き。境は色聲香味觸法の六境など申す境であるから形の上所作の上にあらはして見せるもの。言は云ふ迄もなく言葉で句は讀んで字の如く一文一句と云ふ句のことである。此の機境言句の四つこそ敎化の手段の都べてであつて、釋尊が靈山會上に在つて一會の大衆に向つて青蓮華を拈しられたと云ふのは卽ち一境で、それを見て迦葉尊者がニッコリと笑つたと云ふのは卽ち一機である。又淨土門の信者が口に南無阿彌陀佛と唱へ、法華の信者が口に南無妙法蓮華經とお題目を稱へるのは卽ち一言一句と申すものである。然しながらこれ等の都べてはゆはゆる月を指すの指。方を示すの地圖であつて、丁度一大光明のあることを示らしむるためにマッチをチラリとすつて見せる樣なものである。そこを入處あることを圖ると云ふので學人を接化誘引する手段方便と申すものである。それ故に若しも之れに沒頭して、此のお題目こそ、此のお念佛こそと云ふ風に執着をしてかぢりつくことゝなると、ソレコソ大變、無瘡の美しい肌に小刀で以つて瘡をつけたやうなもので、イッカ知らずに深穴の中へおちこんで仕舞つて居るのである。穴にも色々の種類があるが佛敎で申せば大乘小乘顯敎密敎天台ぢや眞言ぢや禪宗ぢや眞宗ぢやと色々の小穴があつて其の總名を佛敎と申す。そこへ又近來は樣々の穴堀機械が外國から輸入をせられて、耶蘇ぢや哲學ぢや科學ぢや何ぢやと種々雜多の穴が澤山に出來て參つた。其の穴の總名を理窟。屁理窟など申して此れが卽ち無間地獄へ通ずるトンネルであると云ふことである。大用現前規則を存せず。大用は宇宙の本體本性其の者の作用ハタラキであるが、其の大作用が現前とあらはれるには何も刑法ぢや民法ぢやと云ふ樣な規則にかゝつて居らぬ。日の照るのに何の規則がいらう。風の吹くのに何の法則がいらう。ヤレ大雨がふつて家の家根が漏りだしただから警察へ訴へ出さうの。やれ大風が吹いて裏の松の木が倒れたために此の大家根が破損したから檢事局へ告訴しやうのと云ふことはあるまい。それが卽ち大用現前規則を存せざるからのことである。既に何の規則もなけらねば束縛もない。それ故行きあたりばつたり、手にまかせて拈し來り拈し去つても是非もなけらねば得失もない。是非もなけらねば得失もないが然し之れも又暫らく向上の事あることを知らしむるまでのことで、卽ち自己の本分、此の父母所生の五尺の身體に此の上もない結構な珍寶を具へ、無上の妙用を具して居ることを知らしむる迄のことである、蓋天蓋地又摸索不着。蓋は物を蓋ふと云ふことであるが、滿天下天上にも地下にも摸索不着で捉らまへようもなけらねば觸れて見やうもないことである。恁麼も也た得たり不恁麼も也た得たり大廉纖生。恁麼はコレとかコノゴトクとか云ふことであるが、ドチラにしてもよろしい。これでもあれでも何んでも角でも其の儘其のなりで大光明遍照であつて內佛の阿彌陀佛も光明遍照であれば臺所

の摺木も光明遍照である。大廉纖生。大と生とには意味はないので廉纖と物のこまかなことであるが、偖々どこ迄もよく行き屆いたことであると云つた按梅である。恁麼も也た得ず不恁麼も也た得ず大孤危生。これは前と反對でドレもコレもすつぱり駄目、一つも採用相成らぬと云ふので大孤危生。大と生には意味はないので孤危と甚だ孤危峻嶮で寄りついて見ようもないと云ふのである。二途に渉らず如何が是なる。既に向上向下恁麼不恁麼すべて二途に渉ることを許さず。おまけに其のどちらへもつかぬ途中に彷徨することも許されぬとしたならば偖何としたものであらうぞ。動くな、ねぢむくな、かたよるな、じつとして居るなど云つた日にはサテ如何に此の身を持つたものであらうぞ。人人各自コヽは須らくとくと思案工夫をこらすべき處であらうと思はれる。請ふ試みに擧す看よ。然るに爰に幸い誠に面白い一場の昔話しがあるから、老僧一つお慰みに話して聞かせやう程に能く耳の穴をさらへて聞きなされと云ふので本則を引き出してくるのであるが、諸人何もお慰みどころではないぞ。人人各自三度の食を閲いてでも是非參究して見ねばならぬところであるから、必ず麁略にして後に後悔せぬようにとくと審細に研究して見なければならぬことであるぞ。

第二節　本則

擧馬大師不安。遣漢漏逗不少。帶累別人去也。院主問。和尚近日尊候如何。四百四病一時發。三日後不逢亡僧是好手。仁義道中。大師云。日面佛月面佛可煞新鮮。養子之緣

【讀方】馬大師不安　此の漢漏逗少なからず。別人を帶累し去る。院主問ふ和尚近日尊候如何ん　四百四病一時に發す。三日の後に亡僧を逢らざれば是れ好手。仁義道中。大師云く日面佛月面佛　甚だ新鮮。子を養ふの緣。

【字解】一。馬大師。　馬大師と云ふは達磨大師八世の法孫であつて江西の馬祖山に居られた處の道一禪師と申す方である。容貌奇異牛の如くに行き虎の如くに視る。舌をのぶるに鼻を過ぐ。と傳にあるから餘程風彩の變つた人であつたと見へる。唐の開元年中に衡山の傳法院に於いて南岳の懐讓禪師より法を授かつて傳燈の祖師となられた。入室の弟子一百三十有九人と云ふから餘程法流の榮へたものと見へる。唐の德宗皇帝の貞元四年の二月一日と云ふに遷化をせられたことであるが、其の前日に此の問答があつたと申すことである。

二。此の漢漏逗少なからず。　漏はモル逗はトヽコフルであるから桶などのふるくなつて水もりをして役に立たぬやうになつた有り樣であるから、サスガの馬大師も老衰をして病氣などするやうになつてはモー役には立たぬぞと云つたあんばいと見へる。

三。別人を帶累し去る。　馬大師一人なら自業自得で止むを得ぬことであるが。此の老漢の病氣のために多くの人に迄迷惑をかけるに至つては實以つて許し難いことである。

四。院主。　院主は役僧の名で寺主、監寺、院宰など色々に申すことであるが今日で云へば執事長とか寺務長とか云ふ程の役である。此の人は馬祖山の院主を勤めて居た僧と見へるが、名も傳記も傳つて居らぬから今日これを知ることは出來ぬ。

五。四百四病一時に發る。　イヤハヤ有りとあらゆる病氣が一時に發つたぞと云ふのである。昔し維磨が自分には病氣はな

いけれども一切衆生に病氣があるから自分も病氣をすると云はれたと云ふことであるが、馬祖の病氣も維摩と同症であるかも知れぬ。然しそんなことを問ふ院主こそ實に四百四病一時に起つたもので多分そのウワコトを云ふのであらうと思ふ。四百四病と云へば凡そ病には四種の病があつてそれが風寒飢の原因によつて名々一百の病を生ずる。それで四百。そこへ根本の四病を加へるから四百四病になると云ふことであるが、こんなことはどうでも宜しい。

六。三日の後に亡僧を送らざれば是れ好手。　この著語も馬大師と院主との兩方に掛けて見るが好い。此の院主氣の毒ではあるけれども、ハヤ脈が上つたから此の上到底三日とは持つまい。若しそれでもつたなら好い仕合せと申すものである。

七。仁義道中。　方語に邪に隨つて惡を逐ふと云ふのであると同しことであるから。此の院主自分の病氣のために他人迄病氣だと思つて此んなことを云ふのであらうと云ふのである。或は又仁義道中は我國の俗に御辭儀するとか御挨拶するとか云ふ風の言葉であるから、これは院主が一應の御挨拶をしたものであらうと見る說もある。

八。日面佛月面佛。　佛名經に日面佛は一千八百歲の在世なり日面佛は一日一夜にして涅槃に入ると說いてあるから。ツマリ院主か馬大師に向つて御容體は如何か御座りますかと問ふたからハイ一日一夜で死ぬる佛もあれば一千八百歲で死ぬる佛もありますぞと答へられたものと見へる。佛の壽名にもさま〳〵あつて、娑婆界の釋迦佛は八十歲で入滅せられたが極樂淨土の阿彌陀如來は無量壽であると云ふことである。さりながら法身佛には生れたり死んだりすると云ふことはない筈であるに偖入滅とは何のことであらうぞ。コヽが工夫のしどころであらう。

九。甚だ新鮮、　娑婆出現の佛でもなく運慶堪慶の作でもあるまいに、如何さま見事な新佛である。

一〇。子を養ふの緣。　圓悟も只這の日面佛月面佛極めて是れ見難し、雪竇も此點に至りて亦是れ頌し難しと云はれてあつて實に此の日面佛と云ひ月面佛と云ふ如來樣は珍らしい如來樣である。然しながら獅子は其子を千丈絕壁の巖上から蹴落して其の氣力を試みると云ふことであるから、馬大師が其の子を養ふの手段として是れ位いのこと云はれぬことはあるまいと思ふ。

第三節　本則提唱

舉馬大師不安。下語云。耳孕兩片皮。

不安は安からずと云也、煩なり、色相に用ひたものぞ。色相の上にこそ病はあれ、病にかきらずすべて色相の上を不安と云ふ也、色相の上は何も角も不安。安きことはないぞ。

院主問和尙近日尊候如何。下語云。牙齒一具骨。

尊候とは字面の如し、御朦氣は如何で御座あるぞと問ふた。色相の上を問ふた程に牙齒一具骨ぞ、先師下語に探竿影草。又、言中有響。

大師云。日面佛月面佛。下語云。一二三四五。六六三十六。雨後青山青轉青。

凡人は日月を尊べども、日月の晝夜の差別もなく、クル〳〵とめぐりて照す處を向上の眼から輪廻したるあさましきものぢやと色相に用ひて日面佛月面佛と尊候の上を答へた也、向上の眼からは壺中の天地別に日月あり。日月と云ふは本分を指して云ふ。先師下語に天上星地下水、柳綠花紅、萬里一條鐵。

第四節　本則評唱和譯

馬大師不安なり。院主問ふ、和尚近日尊候如何。大師の云く日面佛月面佛と。祖師若し本分の事を以つて相見せずんば、如何んか此の道の光輝を得ん。此箇の公案若し落處を知らば即ち丹霄に獨歩せん。若し落處を知らずんば往々に枯木巖前に差路し去ることあらん。若し是れ本分の人ならば這裏に到つて須らく是れ耕夫の牛を驅り飢人の食を奪ふ底の手脚ありて方さに馬大師爲人の處を見るべし。如今多く人ありて道ふ。馬大師院主を接すと。且喜すらくは沒交渉。如今衆中多く錯つて會して瞠眼して云ふ。這の裏に在り。左眼は是れ日面右眼は是れ月面と。什麼の交渉か有らん。驢年にも未だ夢にだも見ざると在らん。只管に古人の事を蹉過す。只馬大師此くの如く道ふが如くんば意什麼の處にか在る。有る底は云ふ。平胃散一盞を點んじ來れと。什麼の巴鼻かあらん。這の裏に到つて作麼生か平穩なることをうること在らん。所以に道ふ。向上の一路は千聖も不傳。學者形を勢すること猿の影を捉ふるが如しと。只這の日面佛月面佛極めて是れ見かたし。雪竇此に到つて亦是れ頗し難し。却つて他の見得透するがために平生の工夫を用いつくし他を指注す。諸人雲竇を見んと要するや。下文を看取せよ。

【字解】一。祖師若し等。若し馬大師の如き人傑が直ちに本分の事を以つて人に接し學人を接化して作佛成祖せしめられなかつたならば、到底今日迄我が正法の光輝が傳はつて居ることは出來なかつたであらうと云ふ。

二。丹霄に獨歩せん。若し此の公案の落處を知つたならば天地宇宙の間に獨歩することが出來やうか、若し萬が一にも透得し得ずんば深山幽谷到底再び出づることの出來ない樓なところにまよひ去るであらう。

三。瞠眼。眼を見はつて見つめる貌。

四。平胃散一盞を點し來れと什麼の巴鼻かあらん。一類の者は馬大師の答話を解して、これは大師が院主に向つて胃活でも持つて來いと云はれたのであると什麼の巴鼻かあらん。唱。實に誤解の甚しいものであつて邪解とも妄說とも評して見やうのないことである。巴鼻の巴は把なりであるから卽ち鼻を把らへると云ふので、とらへ所がないと云ふ意味になる。そこで取りどめのない證據のない妄說と云ふ程の意味と見て好からうと思ふ。

第五節　類則提唱

其一　帶累別人

圜悟小着語云。帶累別人。

帶累別人を讀むに兩點あり。別人に帶累すと讀み又別人を帶累すと讀むなり。別人と云ふは本分なり。本分に病ませて置くと云ふ道理なり。云ふこころは本分には病と云ふことはない程に畢竟無病に坐斷すると云ふ心なり。病中受用も此くの如く用いたが好いぞ。

（此の則は第二節本則の字解の下第二別人を帶累すの講義を參照すべし）。

其二　養子之緣

圜悟小着語云。養レ子之緣。

却つてつぐと云ふか定辨なり。譬へば一切のものを能く截斷して其の上で佛法を相屬するが吾宗の建立門なり。繼ぎ木などをヅンと切つて別の木を繼いで盤礴する如くなり。無いものか無い者に傳はる程になり。是れ我が宗の秘典なり。一年や半年やなどで許さざる辨なり。切つて繼ぐと云のが肝要なり。截斷をするとて何にも無いぞと許り用ゆるは聲聞獨覺の見解とて吾が宗に不要なり。今日の上は頭々物々の上を其の儘に受用して落居無いものと截斷するが此の上もなき好きことなり。

（此の則は第二節本則の解の下第九養子の緣の講義を參照すべし）。

第六節　頌

日面佛月面佛。開口見膽。如兩面鏡相照於中無影像　五帝三皇是何物大高生。莫謾他好。可貴可賤。　二十年來曾苦辛自是爾落草不干山僧事。啞子喫苦瓜　爲レ君幾下二蒼龍窟一何消恁麼。莫錯用心好。也莫道無奇特　屈愁殺人。愁人說堪レ述向阿誰說。說與明眼衲僧莫三輕忽一倒更須子細。咄。愁人愁殺人

【讀方】日面佛月面佛。口を開けば膽を見る。兩面の鏡の相對して中に於いて影像なきが如し。五帝三皇是れ何物ぞ　大高生。他を謾するなくんば好し。貴むべし賤しむべし。二十年來曾つて苦辛す　自ら是れ汝の落草。山僧が事に干からず。啞子苦瓜を喫す。君が爲めに幾たびか蒼龍屈に下る　何ぞ恁麼なることを消せん。錯まりて用心すること莫くんば好し。也た道ふこと莫れ奇特たしと。屈人を愁殺す。愁人愁人に向つて說くことなかれ。述するに堪へたり　阿誰に向つてか說く。愁人に說與すれば人を愁殺せん。明眼の衲僧輕忽すること莫れ。更に須らく仔細にすべし。咄。倒退三千。

【字解】一。口を開けば膽を見る。　此の一句で馬大師の膽玉も見えれば雪竇の膽玉も見えるぞ。

二。兩面の鏡の相對して中に於いて影像なきが如し。　これは一雙の鏡と鏡とが相對すれば互いに光と光とが映り合ふのみで双方ともに毫末ばかりも影や像は見えぬ。見えぬからと云つて何もうつらぬかと云ふに、そうではない全分映り合ふて居るのである。そこを馬大師と雪竇とが二人とも云はれれば一人とも云はれぬ有樣に比況したものである。

三。太高生。　雪竇餘りに鼻が高かすぎるやうである。エライ天狗で御坐るのふ。

四。他を謾する莫くんば好し。　餘りに天狗になりすぎで五帝や三皇を見くびりなさるな。

五。貴むべし賤しむべし。　日面佛月面佛が尊いか五帝三皇が賤しいか。サテ其處のところ如何なものであらう。

六。自ら是れ汝の落草。　それは自樂自得で貴公が自分勝手にそんな苦勞をして居るのである。誰も他人の知つたことではない。

七。山僧が事に干からず。　拙僧などはそう云ふことは少しもなかつた。

八。啞子苦瓜を喫す。　啞子が苦瓜を喫したやうなもので其の辛苦の有樣はとても口に出して云はれるものではない。只自ら經驗して知るより外に仕方はあるまい。

九。何ぞ恁麼なることを消せん。　何にもそんな苦勞をするにも及ぶまいと云ふ。

一〇。錯りて用心すること莫くんば好し。　然れども胡椒の丸呑みでは役に立たぬがそこ合點であるか。氣をつけて心得違いをしてはならぬぞ。

一一。也た道ふこと莫れ奇特なしと。　雪竇の辛勞を奇特なしとは云はれるなよ。人人各自一度は苦瓜を喫して見なければならぬ。

一二。人を愁殺す。　雪竇御尤もなこと。如何にも御同情の感に堪へませぬ。

一三。愁人愁人に向つて說くことなかれ。　同病相憐れむで能く話が合ふことでありましやうが、然しそのやうなことを話し合つては頓んだ無分別が出來まいものでもないから、先づお互いに愼しんだら宜しからうと云ふ。

一四。阿誰に向つてか說く。　雪竇それは誰れに向つて話さるゝのか、同じ道伴れでなければ其の苦勞はわかるまいと云ふ。

一五。愁人に說與すれば人を愁殺せん。　然し同じ病氣の人に說いたならば定めし泣くことであるからそれも止めたが宜しからうと云ふ。

一六。更らに須らく子細にすべし。　念に念を入れて詳細審密に參究して見なければならぬ。

一七。咄。　エ、某甲ならばそうは云はまいと咄破して。

一八。倒退三千。　然し雪竇の熱誠には誰しも倒退三千で及びもつかぬことであらう。

【講義】　此の頌は古詩體の頌であつて六字句か一句に七字句か四句次に一言二言が名々一句つゞで結句は七言で結んである。日面佛月面佛。第一句は馬大師か院主に示された句を其儘拈し來つて、馬大師は一日一夜で死ぬる佛もあれば一千八百歲で死ぬる佛もあると云はれたが、元來法身佛には生死去來の相はない筈であるに、偖これは何んとしたものであらうと云ひ、五帝三皇是れ何物ぞ。これは唐の禪月大師貫休の公子行の詩に錦衣鮮華にして手に鶻を擊ち、閑行せる氣貌輕忽多し。稼穡の艱難總に知らず。五帝三皇是れ何物ぞと云ふがある。諸侯の子息を公子と云ふから、此の詩は其の公子の行跡を諷したもので、全篇の大意は、何が仁ぢややら義ぢややら夢にも知らすに朝暮イヤ獵ぢや漁ぢやと山野田畑をふみあらして民の愁いを少しも心にかけぬことであるが、一體貴公等の祖先五帝三皇は各々仁義を行ひ萬民を撫育して世にも稀れなる名君であつたに、其の名君の子孫たる貴公等は餘りと云へば不仁なことでないかと諷したものである。此の古成句を雪竇か其の儘愛へかりて來て、馬大師か傍若無人に日面佛月面佛と云はれた勢と云ふものは實に佛祖も衆生も生死も迷悟も絕えて眼中に無い樣子。如何にも氣高い云いやうであつて恰も世に尊貴だの貴賤たのと云ふことの有ることをも知らぬ彼の禪月の詠した公子の意氣揚々たるが如くである。二十年來曾つて苦辛す。斯く申す此の雪竇も此の事については中々苦辛をしたものであつて、君がために幾たびか蒼龍屈に下る。蒼龍の頷下の寶珠を得るためには幾たびも命を的に死生の巷に出入せねばならぬことであるか、それと同しく馬大師か日面佛月面佛と無造作に云ひはなたれた境界、卽ち此の一大事を明めんかためには幾たびか死地にとびこんで艱難辛苦をなめねばならぬ。屈。げにも長い間の苦勞であつた。如何にも窮屈千萬なことであつた。述するに堪へたり。然し大いに屈するは大いに延びんかためである。長の二十年の間の其の辛苦は實に諸人のために此の五帝三皇之れ何物ぞと大いに述べんがためであつた。明眼の衲僧も輕忽すること

なかれ。よし三千世界を一時に見透しうる衲僧であつても決して輕々疎忽に看過してはなりませぬぞと雪竇か昔話を始めて學人を警醒せられたものである。

第七節　頌評唱和譯

神宗在位の時自ら此の頌國を諷すと謂へり。所以に肯へて藏に入れず。雪竇先づ拈して云く、日面佛月面佛と。一拈し了りて却つて云ふ、五帝三皇是れ何物ぞと。且らく道へ他の意作麼生。適來己に說き了れり。直下に他を注す。所以に道ふ鈎を四海に垂れて只獰龍を釣ると。只此の一句已に了す。後面に雪竇自ら他の平生心を用いて參尋する所以を頌す。二十年來曾つて苦辛す。君がために幾度か蒼龍屈に下たると。箇の什麼にか似たる。一に人の蒼龍屈裡に入りて珠を取るに似て相似たり。後來漆桶を打破す。將た謂へり多少の奇特と。元來只箇の五帝三皇是れ何物ぞと云ふを消得す。且らく道へ雪竇の語什麼の處にか落在する。須らく是れ自家に退歩して看て方さに始めて他の落處を見得すべし。豈に見すや興陽の剖侍者遠銀公の問に答ふることを。婆竭海を出て〻乾坤震ふ。覿面相呈すること若何と。剖云く、金翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰れか是れ出頭の人と。遠云く、忽ち出頭に遇はゞ又作麼生。剖云く、鶻の鳩を捉ふるに似たり。君信せずんば髑髏前に驗して始めて眞を知らん。遠云く、恁麼ならば卽ち屈節當胸退身三歩せん。剖云く、須彌座下の烏龜子、重ねて點願に遭つて回へることを待つこと莫れ。所以に三皇五帝亦是れ何物ぞ。人多く雪竇の意を見ず。只管に國を諷すと道ふ。若し恁麼に會せば只是れ情見。此れ乃ち禪月公子行に題するに云く、錦衣鮮華にして手に鶻を擎ぐ。閑行せる氣貌輕忽多し。稼穡の艱難總に知らず。五帝三皇是れ何物ぞと。雪竇道く、屈、述するに堪へたり。明眼の衲僧輕忽すること莫れ。多少の人蒼龍屈裡に向つて治計を作す。たとひ是れ頂門に眼を具し肘後に符ある明眼の衲僧、四天下を照破するも、這裏に至つて也た輕忽することなかれ。須らく是れ仔細にして始めてうべし。

【字解】一。神宗在位の時等。　神宗皇帝諱は頊と申した人で英宗の子哲宗の父に當り宋の第六主である。熙寧元年に英宗の後を襲けて帝位に登り在位十八年の長きに及んだ。帝の在位の頃圓照の本公が雪竇の頌古を大藏經の中に收められんことを請ふたことがある。其の時中書省の諸大臣が評議をして如何にも玄旨妙理に至つては感服の外はないが、文中に五帝三皇是れ何物ぞと云ふ一句がある。處で三皇五帝は卽ち王室の祖先であるからして、こう云ふことばがある以上は藏中に入れることは相成らぬと云ふので、遂に停止になつたと云ふことである。今日ならば發賣禁止と云ふところ。然しながら此の句こそ雪竇其の人に取つては實に得意の文字であらうと思はれる。

二。五帝三皇。　三皇は伏羲氏、神皇氏、黃帝氏の三人の稱であつて五帝と云へば少昊氏、顓頊氏、帝嚳氏、及び堯舜の二帝を稱したものである。

三。鈎を四海に垂れて只獰龍を釣ると。　梁山の意と一般馬祖も雪竇も格外の玄談を以つて知己を釣らうためのほかりごとであらうと云ふ。

四。興陽の剖侍者。　鄂州興陽の清剖禪師と申した人で太陽の警玄禪師の法を嗣いた方である。遠錄公は卽ち涼山の法遠圓

鑑禪師であつて、禪師は頗る世俗の事務に通じて居られたから、人喚んで遠錄公と稱したと云ふことである。

五。娑竭。　具さには娑竭羅と云ふて鹹海と翻して龍の一種である。金翅鳥は梵語に迦樓羅と云ふて翅が金色であつて兩翅相去ること三百三十六萬里。龍を以つて食として居ると云ふことである。此の下は類則を參照して見るが宜しい。

六。禪月。　諱は貫休字は德隱と云ふた人で詩及び繪畫に巧みであつた。蜀の王衍の歸向を得て紫衣及び禪月大師の號を賜つた。羅漢を畫くのは師を以つて始めとすと云ひ傳へられてある。京都東山の高臺寺には月輪大師俊芿が將來したと稱する禪月の筆十六羅漢十六幅を藏して居つて現に國寶に指定されて居るが如何にも凡筆でないとうなづかれる。

第八節　類則提唱（其二）

其三　三皇五帝

五帝三皇是何物。下語云。萬里一條鐵。

三皇五帝とこそ云へ逆に五帝三皇と云ふたは色相なり。又は五帝三皇も三界へ生れて人身をうけたほどに是れも色相なり。是れ何物ぞと云ふたは色相と見れば截斷が備はるほとに截斷してのくれば何物かあらうぞ。無きところを本分に用ゆるなり。色相と本分と兩面目備るなり。下語にも色相本分を相兼ねて萬里一條鐵と見るなり。

其四　興陽剖侍者

興陽剖侍者答遠錄公問。娑竭出海乾坤震。覿面相呈事若何下語云。

挑鈎塔索。

沙竭は龍神のことなり。龍神を見たことが有つてこそ。龍神が海を出て龍宮が震動して覿面に呈することの有るやうに云ふたか句中なり。剖を釣つて云ふなり。これは遠錄公が龍神になりきつて云はれたぞ。

剖云、金翅鳥王當宇宙。箇中誰是出頭人。下語云。得人一牛遭人一馬。

出頭の人があるやうに答へた好答話なり。これ剖か金翅鳥になりきつたものぞ。

遠云、忽過出頭又作麽生。下語云。何不行令。

又作麽生と云はうよりも何故に棒喝を行せぬぞと傍人から見かけての下語なり。

剖云。似鶻捉鳩。君不信鶻髏前驗始知眞。下語云。呈伎倆漢。

句中の方から餘りに云いたいまゝに云はれたと云ふ義。伎倆だてを云はるゝと云ふ方なり。

第四則　德山挾複子

第一節　垂示

垂示云。青天白日。不可更指東劃西。時節因緣。亦須應病與藥。且道。放行好。把定好。試擧看。

【讀方】　青天白日。更に東を指し西を劃すべからず、時節因緣。亦須らく病に應じて藥を與ふべし。且く道へ放行するが好き、放定するが好き、試みに擧す看よ。

【字解】　一。放行。　放任と云ふ程のこと。
二。把定。　取り留めて收束すること。

【講義】　青天白日東を指し西を劃す可からず、青天白日は讀んで字の如く一點の雲も霞もない景況、宗旨向上、本分の田地には、迷悟もなけねば生死もない。迷悟染淨生死を超越した人々具足の本體本性の上には、何も東を指し西を劃し、佛だの法だのと騒ぎ廻る必要はない、ないが然しこはこれ自己本分の上のこと、衆生濟度の方便としては、時節因緣亦須らく病に應じて藥を與ふべしで、隨類應期、臨機應變で、順緣逆緣因緣次第に、宜しき從つて加減し其れ相應の藥を與へねばならぬ、これが老作家の茶匙取りと云ふものである。且らく道へ放行するが好きか把定する

が好きか試みに擧す看よ。放行と青天白日の儘、自由自在に放任すべきか、あるいは把定と取りとめて應病與藥と出かけたものか。これ何れが好いであらう。試みに一則の公案を拈提して見るから、學者夫れよく參究し來れよ。と云ふので本則に結びつけた。

第二節　本則

擧德山到ル溈山ニ一擔板漢。野狐精。挾テ複子ヲ於ニ法堂上ニ一不妨令人疑。着。納敗缺從レ東過レ西從レ西過レ東ニ。可煞有作什麼顧視云ニ無無ト一便出ッ好與三十棒。可煞氣衝天。眞獅子兒善師子吼雪竇着語ノ云。勘破了也錯。果然。點。德山至ニ門首ニ一却テ云。也不レ得ニ草草ナルヲ一放去收來。頭上太高生。未後太低生。知過必改能有幾人。便具シテ威儀ヲ再入テ相見ス依前作這去就。已是第二重敗缺。噫。溈山坐ス次。冷眼看這老漢。捋虎鬚也須是這般人始得。德山提ニ起ノ坐具ヲ一云。和尚吹頭換面。無風起浪。溈山擬レ取ニ拂子ヲ一須是那漢始得。運籌帷幄之中。不妨坐斷天下人舌頭。德山便喝ノ。拂袖ヲ而出ッ野狐精見解。這一喝也有權也有實也有照也有用。一等是祭雲攫霧者就中奇特雪竇着語ノ云。勘破了也錯。果然。點。德山背ニ却ノ法堂ヲ。着ニ草鞋ヲ一便行ク風光可愛。公案未圓。纔得須上笠也。溈山至レ晚問ニ首座ニ一。適來ノ新到在ニ什麼ノ處ニ一東邊落節西邊拔本。眼觀東南意在西北。首座云。當時背ニ却ノ法堂ヲ一着ニ草鞋ヲ一出去也。靈龜曳尾。好與三十棒。這般漢膽後合喫多少。溈山云。此子已後向ニ孤峰頂上ニ一盤ニ結ノ草庵ヲ一呵レ佛ヲ罵レ祖ヲ去ル在。賊過後張弓。天下衲僧跳不出。雪竇着語ノ云、雪上加レ霜ヲ。錯。果然。點。

【講方】德山溈山に到る　擔板漢。野狐精。複子を挾さみて法堂上に於いて　妨げす人をして疑着せしむ。敗缺を納る。東より西に過ぎ西より東に過ぎて　甚た疑ありて什麼をか作らん。顧視して無無と云つて便ち出づ　好し三十棒を與ふるに。甚た氣天を衝く。眞の獅子兒よく獅子吼す。雪竇著語して云く勘破了也錯。果然。點。德山門首に至つて却つて云ふ也た草々なることを得じと　放去收來。頭上は太高生未後は大低生。過を知つて必らず改む能く幾人かある。即ち威儀を具して再び入つて相見す　依前として這の去就を作す。已に是れ第二重の敗缺。噫。溈山坐する次で　冷眼にして這の老漢を見る。虎鬚を捋ることは也た須らく是れ這般の人にして始めて得べし。德山坐具を提起して云く和尚　面を改め面を換ふ。風なきに浪を起す。溈山拂子を取らんと擬す　須らく是れ那漢にして始めて得べし。籌を帷幄の中に運す。妨げす天下人の舌頭を坐斷するを。德山便ち喝して拂袖して出づ　野狐精の見解。這の一喝また權ありまた實ありまた照ありまた用あり。一等に是れ雲を攫らひ霧をつかむ者中に就いて奇特なり。雪竇著語して云く勘破了也錯。果然。點。德山法堂を背却して草鞋を著けて便ち行く　風光愛すべし。公案未だ圓かならず。頂上の笠を竄ち得て脚下の鞋を失却す。已に是れ喪身失命了れり。溈山晚に至つて首座に問ふ。適來の新到什麼の處にかある　東邊に落節し西邊に拔本す。眼は東南を觀て意は西北に在り。首座云く當時法堂を背却して草鞋を著けて出で去れり　靈龜尾を曳く。好し三十棒を與ふるに。這般の漢膽後に多少を喫せしむべし。溈山云く此の子已後孤峰頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵り去ること在らん　賊過ぎて後弓をはる。天下の衲僧も跳不出。雪竇著語して云く雪上

に霜を加ふ　錯。果然。點。

【字解】一。德山。　郢州德山の宣鑑禪師と申した方で、此の人は廿歳で以つて出家せられたと云ふが餘程晩學の人である。それに其の專門が律藏や三論宗や法相宗であるから禪宗のことは丸きり門外漢であつた。殊に金剛般若經が得意で常に講釋をせられたものであるから、其の姓を周氏と云ふのに因んで其の當時の人からは周金剛と稱せられて甚だ尊敬をうけて居られた。處で其の時分は南の地は非常に禪宗が盛でゆはゆる直指人心見性成佛の法が頗る繁盛をして居つた。それを德山か非常に面憎く思つて、出家の兒は千劫に佛の威儀を學び萬劫に佛の細行を學べとも成佛することを得ず。然るに南方の魔子敢へて言ふ直指人心見性成佛と。我れ當さに其の窟穴をさぐりて其の種類を滅し以つて佛恩を報ずべしと云ふ考へを以つて、平生著はした處の金剛經の章疏を負ふて蜀の國を出て澧州と云ふ所へ出かけて往つた。或る日のこと途中で或る茶屋へ休むと、其の茶屋の婆が餅を賣つて居るのを見て、コレ婆さん其の餅を賣つて吳れないかと云ふた。婆々、餅を買ふて何になさる。周金剛。點心にしやうと思ふのぢや。點心は轉心とも書いて空腹の時に何か食べることである。イヤ點心と仰せられるか、それは〳〵。然らば此の婆が一つお尋ね申したいことがありますで、それをお答へ下されば餅を御供養申しましやう。一體貴僧を背負ふて御座るものはソレは何でござりまするか。周金剛。これか、これは金剛經の講釋でこの拙僧が書いたものぢや、お前さんはそれを問ふて何にするつもりか。婆子。イヤ其の金剛經の中にどうも合點の往かぬことがありますからそれをお尋ね申すのです。周金剛。ハアそうかそれはお安いこと何なりともお尋れなされ。然らばお尋ね申しますが、金剛經の中に過去心も不可得なり現存心も不可得なり來來心も不可得なりと說いてありますが、貴僧が仰せらるゝ點心とはどの心に點ぜらるゝのでありますか。爰に至つて天下無敵と稱して居つた周金剛も默つてうつむいて居るより仕方がなかつた。婆子はこれを見て、餅はあげますまい餘所で買ふならお買いなさいとセヽラ笑つて居る。斯樣にして德山は此の婆子の敎へに依つて龍潭の崇信禪師の處へ往いて熱心に此の事を究めて遂に大悟徹底をせられた。其の時背負ふて居つた金剛經の講義は後に法堂の前で火をつけて燒きすてゝ仕舞はれたと云ふことである。此の公案は丁度此の時分に潙山の靈祐禪師の處へ往かれた時の出來事である。潙山は法を百丈の大智禪師に嗣かれた人で其の弟子に仰山の慧寂と云ふ大德があつたから遂ひに潙仰宗と云ふ一家風が出來て、師は卽ち此の宗の高祖となられた方である。德山は師尋常僧の到り參るにあへば多く柱杖を以つて打つと云ふ人で卽ち非常に機鋒が峻嶮であつて學人に接することが如何にも惡辣に過ぎたものであるから、臨濟大師の喝と共に德山の棒臨濟の喝と唱へて實に有名なものとなつて居る。唐の咸通六年十二月に八十六と云ふ高齡を以て遷化せられた。門下には次の公案に出てくる有名な雪峯山の義存禪師かある。

二。擔板漢。　只一邊を見ると云ふ方語であつて、ツマリ板を擔ふた男と云ふのであるから、後をふりむいて見ることも出來ず、左右を顧りみることもならず、只一方向きに行く云はゞ馬車馬と云つた樣な風である。德山が潙山の處へ出かけてゆく意氣軒昂たる樣子を評したものであらう。

三。野狐精。　此の古狐奴。中々食えない奴ぞ。

四。覆子。　行脚僧の荷物のことで裂裝文庫や毛布などをひつくるめて申したものである。

五。妨げず人をして疑着せしむ。　德山の擧動が如何にも傍若無人であるからして、何人と雖も彼れの行爲に就いて疑念を懷くであらう。

六。敗缺を入る。　德山脚元を見て取られた。大失策よ。

七。甚だ禪ありて什麼をか作さん。　德山は頗りに悟りを誇つて居られるやうであるが、別に珍らしくもないこと。河邊へ水を賣りに行つたやうなもので誰一人買ひ手はあるまい。

八。好し三十棒を與ふるに。　御褒美に思ふ存分ブン擲ぐつて吳れよう。

九。甚だ氣天を衝く。　實に意氣衝天の概があつてスサマジイ勢いである。

一〇。眞の獅子兒は善く獅子吼す。　さすがは德山である。天地も六種に震動するであらう。

一一。錯。　ソラ間違つた。諸人どこか錯つた。こゝ須らく參究すべきところ。

一二。果然。　果して思ふた通り。　如何にも其の通りである。圜悟老人の呑氣さ加減實にあきれる計りである。先きには錯ノウ〳〵と云ふかと思へば、今亦果然。ヒヤ〳〵と云ふ。何かノウ〳〵であつて、何がヒヤ〳〵であるか。爰等は心を

止めて工夫せずばなるまい。

一三。點。　點には點破。點定。頭點の三通りあつて、點破と云へば事物を放露して一切悉く空散することであるから卽ち跡かたを止めぬところ。點定ならば事物を把り留めて動かさぬことであるから卽ち森羅萬象各々其の自位に住する位。點頭と云へば成る程フン〳〵とうなづくことであるから卽ち物事を肯定することである。今の點はこのうちどの點に當るであらう。

一四。也た草々なることを得じ。　これは德山が潙山の門の處迄出て往つて更に考へ直したものと見へる。草々は匆々と云ふも同じことで、是れはどうもだゝくさに通つてはなるまい。今少し丁寧に勘檢して見やうと思ひ直した。

一五。放去收來。　放去は無々と云ふて出て往つた有樣。收來は今少し丁寧にと考へ直した處である。

一六。頭上は太高生。末後の太低生。　太と生には格別意味はないから頭上は高く末後は低しと云ふも同じことで、始めは如何にも大膽で氣宇宙を呑むの概があつたが、今度は頗る綿密になつて出られたと云ふので、云はゞ龍頭蛇尾と笑かしたものと見へる。

一七。過を知つて必ず改む能く幾人かある。　サスがは德山能く氣がつきましたと野次る。

一八。相見。　師家に拜謁することで卽ちお目にかゝると云ふほどのことである。

一九。依然として道の去就を作す。　相も變らぬ平々凡々たる德山の振り舞。見るも厭ちやと云ふ。

二〇。已に是れ第二重の敗缺。　前も失策今も失策。そんなことでは到底潙山を勘檢することは出來ぬ。

二一。喰。　アゝあぶないこと。今に取つて投げられるであらうとあやぶむ。

二二。冷眼にして道の漢を見る。　潙山和尙スマシタ顏をして坐つて御座る。德山はどんな面つきをして居つたであらう。定めて鬼の樣な目付をしてにらみつけたことゝ思ふ。

二三。虎鬚を捋ることは也た須らく是れ道般の人にして始めて得べし。　サテ〳〵冒險な仕事である。今にも呑みこまれるであらう。

二四。坐具。　僧用六物の一であつて僧の禮拜するときに敷くものである。梵語では尼師壇と云ひ、それを譯して坐具又は隨座衣と云ふ。長さは四尺廣さは三尺で、身のため衣のため臥具のためにこれを蓄へて尋常の用となす。行くときは褶袋に下に在らしめ宿するときは離るゝことを得ずと云ふのが佛制である。

二五。面を改め頭を換ふ。　前には無々と云ひ今度は和尙と掛する。德山面をあらはれた樣な。目がさめましたかと云ふ。

二六。風無きに浪を起す。　德山何をすることやら。いらぬ風波を起される。

二七。須からく是れ那漢にして始めて得べし。　サスがは潙山老人である。答へるでもなく、さりとてポンヤリとして居るでも無くソロリと拂子を取りに掛つた。

二八。鬱々雌雄の中に運らす。　太刀も拔かず矢も引かぬ中に强敵なくだく手段がある。

二九。妨げず天下人の舌頭を坐斷す。　イカナ德山も舌が廻はるまい。滿天下言ひ得るものはなからう。

三〇。野狐精の見解。　此の古狐めと云つたやうなあんばい。中々一筋縄ではゆかぬ奴である。

三一。道の一喝また權ありまた實ありまた照ありまた用あり。　道の一喝こそ四德を具へた萬德圓滿の一喝である。

三二。一等に是れ雲を拏らひ霧をつかむもの中に就いて奇特なり。　達磨大師よりこのかた歷代の祖師たち何れ劣らぬ名僧であり智識であるが、その中でも此の德山和尙は又格別であると飽く迄德山の活機を稱揚したものである。雲を拏らひ霧をつかむと云ふは龍の空中をかけろ形容である。

三三。錯。　果然。點。前にも出た通りでノウ〳〵ヒヤ〳〵フン〳〵と一人合點をするところ。

三四。風光愛すべし。　見事見事。如何にも絕好の風景である。

三五。公案未だ圓かならず。　悟邊の働きまた充分とは云へぬと師家の十成を許さざるところ。

三六。頂上の笠を贏ち得て脚下の鞋を失却す。　德山氣がのぼせて脚元には氣がつかぬそうなと評したもので、ツマリ德山

が一喝を下して拂袖して出掛けた活機は笠を拾ふて草鞋をなくしたやうなもので、其の實は潙山が拂子を取らうとした時にハヤ德山の首は打ち落とされたのよと云ふのである。

三七。 已に是れ喪身失命し了れり。　德山能く働かれたが某甲から見れば活き人形ぢやと評する。

三八。 東邊に落節し西邊に拔本す。　落節は商買の掛引に損耗をすることで拔本は商買の資本を無くすることであるから。ツマリあそこでも此處でも損をすると云ふので、潙山か前には德山を接せやうとして却つて彼れに一喝して遁げられ、今又首座を接しやうとして暖簾と壓押しをして居るやうな有樣であることを評したものである。

三九。 眼は東南を觀て意は西北にあり。　これは口と心とが違ふぞと云ふことで潙山が首座に德山のことを問はるゝのは實は首座を勘檢せんがためであるから、云はゞ敵は本能寺に在りと云ふところである。

四〇。 鱉龜尾を曳く。　これは方語に跡を拂つて跡生すと云ふ意味で首座の答に力のないことを謗つたものである。

四一。 好し三十棒を與ふるに。　首座眠つて居るらしい。棒でも食はしてチト痛い目にあはせてやるがよいと云ふ。

四二。 這般の漢腦後に多少を喫せしむべし。　コレも同じことでドシ〳〵ブン擲つて眼を醒まさしてやるが好いと云ふことである。

四三。 賊過ぎて後弓を張る。　遲かりし由良之助。今更そんな繰り言を云ふても何の役にも立たぬぞと云ふ。

四四。 天下の衲僧も跳不出。　然しさすがは潙山老人である。如何にも目の高いこと〻稱揚する。

四五。 錯。　果然。　點。　コレは既に二度も出たことで云はゞノウ〳〵ヒヤ〳〵チヤンと云ふ處。　雪竇の着語を褒めたのやら冷かしたのやら何か何やら一人合點で少しもはからぬ。

第三節　本則提唱

舉。德山到ル潙山ニ。下語云。魚行水濁。疑ヲ殺ス天下人ヲ。

德山何の道理もなく、潙山へ行かれたれども、衲僧なる故に自然に句中に備つた程に、魚行水濁と下語したものよ。又作家相見の參會なる程にコハ何事が有らんと天下の人の疑殺したぞ。

挾ンテ複子ヲ於ニ法堂上ニ。從レリ東過レギ西。從レリ西過レク東。顧視シテ云フニ無無トチ便出ヅ。下語云。減ズ人威光。一場狼籍。這狼籍。傍者無人。

德山東西を過ぎて然るべき人も有らば一問せんと思はるれども、誰もなき間無々と云ふて出られたぞ、人の威光を減じたるものよ。又無々と云ふて過ぎたは如何にも傍若無人の振舞ぞ。先師下語に歩々踏ニ着清風ヲ。風行草偃ス。

雪竇着語云。勘破了也。下語云。知音知後更誰カ知。

德山の智音して潙山へ行かれた處を、雪竇勘破せられものぞ。又、德山潙山を雪竇の知音して勘破了也云ふ說もあり、いづれも知音の方也。先師下語に獨掌不ニ浪鳴ラ。若不レ登ニ望樓ニ焉知ン滄海ノ深キヲ。

德山至リテ門ニ首ヲ却テ云フ。也不レ得ニ草草ナルヿ。下語云。龍頭蛇尾。

初めは頭ばちに云ふて爰で草々にてはかなふまじ。威儀を具して潙山に相見せんと云ふたは龍。無々と云ふて出たものが、却つて草々なることを得ずと云ふたは龍頭蛇尾なり。尾だれぞ。

先師下語に不レ入二虎穴一爭見二虎子一。路逢二劍客一須レ呈レ劍。
　便具二威儀一再入相見。下語云。再將レ捋二虎鬚一。千兵易レ得一將難レ得。

再び入つて相見せんとしたは、虎鬚をなでんと欲したものよ。

　　潙山坐次。下語云。老々大々。

主位に理運に座したは老々大々よ。

　　德山提二起座具一云。和尚。下語云。青天怒雷走。

座具を提起して和尚と一拶を試みたは怨ろしき手段也。

　　潙山擬レ取二拂子一。下語云。俊狗咬レ人不レ露レ牙。風光可レ愛。

言句に渉たらず恐ろしく押だるんた振舞也、拂子を取らんと擬せられた勢は、打たうと思ふた機もあり、言句に渉たらざる處本分なり。潙山答話をせず打物を取られたは勝つたはたらき也、一先師以來の批判に、俊狗不レ露レ牙とばかり云ふて、咬人の二字削つて除てよからんと也、又風光可レ愛は、潙山の拂子を擬取せられた此威風を愛すべしとなり。

　　德山便喝拂レ袖而出。下語云。擊二碎驪龍一領下珠。

喝して拂袖したは截斷して喝したる也、拂袖した處を截斷に見かけたぞ。這の喝は截斷に用ふる也、潙山の拂子を取らんと擬せられた處が驪龍領下珠也、擊碎の二字は德山の喝せられた處を指したものぞ。先師の下語は實劍光寒。

　　雪竇着語云。勘破了也。下語云。蝦跳不レ出レ斗。

何を勘破したぞなれば、潙山德山の兩人の胸を勘破したものぞ。德山潙山の胸は雪竇ならでは勘破せられまじきぞ。去りながら今日學者の上から見る時は、よくは勘破せられたれども、前に勘破了也と云ふて、又爰でも勘破了也と云ふたは蝦跳つて斗を出てざるものよ。此蝦跳不出斗と云ふ句は、禪通寺開山然可翁の渡唐の時、明州を御通りありて、漁人の蝦を升に入れて賣るを御覽するに、此蝦が生て跳べども斗を出でざるより、サテハ此事ぢやと思ふて歸朝して御物語りありたとの先師の沙汰ぞ。

　　德山背却法堂着草鞋便行。下語云。毒龍行處草不レ生。步々生二荊棘一。

句中の恐ろしいと云ふ義なり。法堂を背却して行くところに截斷、句中の兩境界備つてあるぞ。毒龍の行く處とは衲僧の機、句中也、草生すとは截斷なり。又步々荊棘を生ずとは荊棘が句中ぞ、衲僧は、かりそめにも截斷句中を肝要と用ゆるぞ。

　　潙山至レ晚問二首座一適來新到在二什麼處一。下語云。指二槐樹一罵二柳樹一。

果して新到を問はずに首座の働きを見んと云ふた也、槐樹を指すと云ふたは、適來の新到を問ふた方ぞ。柳樹を罵るとは首座を試みた方ぞ。譬へば人の子を叱からうとて、我子をしかる程の

ことぞ。首座を試みやうとて新到の事を問ふ也。先師下語に、探竿影草。

首座云、當時背二却法堂一着二草鞋一出去也。下語云。腦後欠二一錐一。

德山の上を問ふと心得、句中を見はづして、一方向きぞ。眞直に心得へて實頭なぞ。惱後に針を立てゝやりたらば好からふぞと潙山の上を傍人から付けた下語ぞ。

潙山云。此子已後向二孤峰頂上一盤結草庵一呵レ佛罵レ祖去在。下語云。知音自在相風和。知音知後更誰知。普州人送レ賊。

德山を褒美して此の僧こそ以後然るべき僧であらんと云はれたものぞ。普州人送レ賊とは、盗人が盗人を送ると云ふ義也、潙山の賊の上から、佛を呵し祖を罵り去ることあらんと云ふたは恐ろしい心ぞ。普州は盗人のある國也。普州の人が又賊を送るほどの事なり。德山の賊を心得すまいて潙山の賊を云はれたほどに、此句を用ふる也。先師下語に若不二同床睡一焉知レ被二底穿一。作家禪客天然自在。

雪竇着語云。雪上加レ霜下語云。兩々三々舊路行。

前に勘破了也と兩處にて云ふて、又爰に雪上加霜と云ふたは、兩々三々舊路を行くものぞ。又云く。德山の見機をば潙山も不知、潙山の見機をば德山も不知、又德山潙山の見機をば雪竇も不レ識ぞ、是れも兩々三々舊路を行つた物ぞ、雪上加霜の句は、色相なれども爰では句中ぞと仰せられたぞ。前の蝦跳不出斗と同意也とのこと不審なり。再返の時きはむべきなり。

此古則は德山複子の話とて一段好き古則也と先師以來の沙汰なり。先師下語に錦上添花。三重公案。

第四節　本則評唱和譯

夾山三箇の點の字を下す、諸人還つて會すや、有る時は一莖草をもつて丈六の金身となして用い。有る時は丈六の金身を將つて一莖草と作して用ゆ。德山は本是れ講僧西蜀に在つて金剛經を講ず。敎中に道ふに因らば、金剛喩定後得智の中に千劫に佛の威儀を學し萬劫に佛の細行を學して然る後に成佛す。他の南方の魔子便ち卽心是佛と說くと。遂に發憤して疏鈔を擔つて行脚す。直ちに南方に住つて這の魔子輩を破せんとす。看よ他の恁麼に發憤することを。也た是れ箇の猛利底の漢、初め澧州に到る、路上に一婆子の油糟を賣るを見て遂ひに疏鈔を放下し且らく點心を買つて喫せんとす。婆云く載する所は是れ什麼ぞ。德山云く、金剛經の疏鈔、婆云く我れに一問あり儞若し答へ得ば油糟を布施して點心と作さん。若し答へ得すんば別處に買ひ去れと。德山云く但た問へ。婆云く、金剛經に云く過去心も不可得現在心も不可得未來心も不可得と。上座那箇の心にか點せんと欲する。山無語。婆遂ひに指して去つて龍潭に參せしむ。纔かに門に跨つて便

ち問ふ。久しく龍潭と響く到來するに及んで潭又見へず龍も又現せず。龍潭和尚屏風の後に於いて身を引いて云く、子親しく龍潭に到れりと。師乃ち禮を設けて退く。夜間に至つて入室侍立して更深けぬ、潭云く何ぞ下り去らざる。山遂いに珍重して簾をかゝげて出づ、外面の黑きを見て却回して云く、門外黑からんと。潭遂ひに紙燭を點じて山に度與す。山接するに方つて潭便ち吹滅す。山豁然として大悟し便ち禮拜す。潭云く、子箇の什麼をか見て便ち禮拜する。山云く某甲今より後更らに天下の老和尚の舌頭を疑着せず。來日に至つて潭上堂して云く、このうち箇の漢あり牙劒樹の如く口血盆に似たり。一棒に打てども頭を回らさず。他時異日孤峯頂上に向つて吾が道を立し去ること在らんと。山遂ひに疏鈔を取つて法堂前に於いて火炬を將つて擧起して云く、諸の多辨を窮むるも一毫を大虛に置くが如く、世の樞機を竭すも一滴を巨壑に投ずるに似たりとて遂ひに之れを燒く。後溈山の化を盛にすと聞いて直ちに溈山に造つて便ち作家相見す。包も亦とかず直ちに法堂に上つて東より西に過ぎ西より東に過ぐ。顧視して無々と云つて便ち出づ。且らく道へ意作麽生。是れ顚ずることなしや。人多く錯つて會して用いて建立となす。直ちに是れ交渉なし。看よ他恁麽に妨げず奇特なることを。所以に道ふ群を出づることは須らく是れ英靈の漢なるべし。勝に敵することは他の獅子兒に還へす。選佛若し是くの如きの眼なくんばたとひ千載も又奚にか爲さんと。這裏に到つて須らく是れ通方の作者にして始めて見得すべし。何が故ぞ、佛法に許多の事なく。那裏にか情見を着得し來らん。是れ他の心機那裏にか如許多の阿勞あらん。所以に玄沙道く、直ちに秋潭の月影靜夜の鐘聲扣擊に隨つて以つて虧くることなく波瀾にふれて而して散せざるに似るとも、猶是れ生死岸頭の事、這裏に到つて亦得失是非なく亦奇特玄妙なし。既に是れ奇特玄妙なし、作麽生が他の東より西に過ぎ西より東に過ぐることを會す。且らく道へ意作麽生。溈山老漢也た他を管せず若し是れ溈山にあらずんば也た他に打挫一上せられん。看よ他の溈山老作家の相見只管坐ながら成敗を觀ることを。若し深く來風を辨せずんば爭てか能く此くの如くならん。雪竇着語して云く、勘破了也と。一とへに鐵槨に似て相似たり。衆中之れを着語と謂ふ。然も兩邊に在りと雖も却つて兩邊に住在せず、作麽生が他の勘破了也と道ふことを會せん。什麽の處か是れ勘破のところ且らく道へ德山を勘破するか溈山を勘破するか。德山遂ひに出でゝ門首に到つて自ら云く、也た草々なることを得ざれ。溈山のために五臟心肝を掀出して法戰一場せんことを要して再び威儀を具して却回して相見す。溈山坐する次で、德山坐具を提起して云く和尚と。溈山拂子を取らんと擬す。德山便ち喝して拂袖して出づ、可愍た奇特なり。衆中多く道ふ、溈山他を怕ると。甚の交渉かあらん。溈山亦忙しからず。所以に道ふ、智禽に過ぎて禽を獲得し智獸に過ぎて獸を獲得し智人に過ぎて人を獲得すと。這般の禪に參得せば盡大地森羅萬像天堂地獄草芥人畜一時に一喝を作し來るも他亦管せず。禪床を掀倒し木杓を喝散すとも他亦

顧みず天の高きが如く地の厚きに似たり。溈山若し天下人の舌頭を坐斷する底の手脚なくんば時に他を驗すること大いに難からん。若し是れ他の一千五百人の善知識にあらずんば這裏に到つて也た分疎不下ならん。溈山は是れ籌を帷幄に運らし勝を千里の外に決す。德山法堂を背却して草鞋をつけて便ち出で去る。且らく道へ他の意作麽生。爾ち道へ德山是れ勝か是れ負か、溈山恁麽に是れ勝か是れ負か。雪竇着語して云く勘破了也と。是れ他工夫を下して古人の葛藤極則の處を見透して方さに能く恁麽に妨げず奇特なることを。訥堂云く。雪竇兩箇の勘破を着て三段の判を作して方さに此の公案を顯す。傍人の二人を斷はるに似て相似たり。從來這の老漢綏々地に晩に至つて方さに首座に問ふ。適來の新到什麽の處にか在る。首座云く當時法堂を背却して草鞋を着て出で去れりと。僞山云く、此の子已後孤峰頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵り去ること在らんと。且らく道へ他の意旨如何。僞山老漢是れ好心にあらず、德山後來佛を呵し祖を罵り風を打し雨を打す。舊に依つて他の窠窟を出でず。這の老漢に平生の伎倆を見透せらる。這裏に到つて喚んで僞山他に受記を與ふるとなし得てんや。喚んで澤廣うして山を藏し理能く豹を伏すとなし得んや。若し恁麽ならば且喜すらくば沒交渉。雪竇此の公案の落處を知つて敢へて他のために斷じて更に道ふ、雪上に霜を加ふと。又重ねて拈起し來つて人をして見せしむ。若し見得去らしば爾に許す溈山德山雪竇と同參なることを。若し也た見ずんば切に忌む妄に情解を生ずることを。

【字解】一。夾山三箇の點の字を下す。　夾山は圜悟の自稱で當時圜悟は夾山に住して居られたから拙僧がと云ふところを夾山と云はれたものである。三箇の點の字とは、錯、果然、點と云ふ點と云ふ著語を此の本則には三箇處まで雪竇の著語の下に加へてある。それを指したもので、有る時は一莖草をもつて丈六の金身となして等。丈六の金佛は卽ち佛のことであるから、或時は佛陀世尊を一本の艸として使ふこともあり。又ある時は草一本を佛陀世尊として禮拜供養することもあるぞと云ふのであるから、兎に角に佛陀と一莖の草とは同じ價値であつて、つるべに纏いついて居る朝顏の蔓一本と壽命無量光明無量の尊特報身とか同じ相場とあると云ふのである。爰は一番工夫を要する處であらう。

二。教中に道ふに因らば。　コレは教家で三僧祇百大劫の間威儀を學し細行を習つて而る後に金剛喩定にはいつて一念相應する時に正體智卽ち根本智を發得すると云ふのである。金剛喩定と云ふは金剛は極めて堅い鋭いものであるから能く物を碎破する力がある。それを禪定力を以つて一切の煩惱妄想を餘さず碎き盡すと云ふにたとへて名を立てたものである。後得智は諸智の根本たる無分別智卽ち根本智に對したもので諸の差別の相を知る一切智を指し云ふたものである。

三。油糕。　糯米の生粉で以つて餅を作つてそこへ砂糖や小豆を入れそれを油で揚げたものであるそうな。

四。龍潭。　崇信禪師と申した人で生れは餅家の息であつたと云ふことである。法を荊州天皇寺の道悟禪師に嗣いで澧州の龍潭に住して居られた。德山は卽ち此の人から法を嗣いだ人である。

五。更に天下の老和尙の舌頭を疑着せず。　卽心卽佛の義を疑いませぬと云ふたものと見へる。

六。是れ顚することなしや。　德山が旅支度のまゝで荷物を引提げたまゝソヨ〳〵と法堂へ飛びこんで東から西へ西から東へと歩き廻つて偖何を云ふかと思ふと顧視して曰く無々といかにも傍若無人な振舞で人間並で云へば實に不敬とも無禮とも何とも云ふて見やうのないやり方であるから、そこで圜悟か德山か禪病にかゝつたそうな。氣がのぼせたらしいと評したものである。

七。跨に敵することに他の獅子兒にかへず。　吾れより勝れたものに敵するには餘程の力量がなければならぬ。選佛若し是くの如きの眼なくんばたとひ千載も乎なにかなさん。選佛場中で此の眼を具へぬものはたとい千載萬載座禪をしたところで何の所詮もないことである。

八。佛法に許多の事なし。　佛法と云へば如何にも尊いもの有り難いものむつかしいものであつて、之れを悟るには三僧祇百大劫と長の修行を經ればならぬことのやうに思はれるが。何のことはない朝には起き夕には寢れ、腹がへつたら飯を食い喉がかわいたら水をのむ迄のこと。鼻で物を食はぬ樣、頭で地面をあるかぬやうにするのか卽ち佛道修行である。德山和尙を眺めて見よ。何の修行もせず何の工夫も積まず卽地に悟つて立地に成佛せられたではないか。苦勞もへちまもあつたものでない。これ看よ山僧は日々こうやつて鼻汁を垂れてはそれをぬぐい。水を飲んでは小便を垂れて居る。此れを遠磨は不立文字と仰せられたぞ。

九。玄沙遺く。　玄沙和尙の上堂の語である。玄沙は卽ち雪峰の法を嗣いだ玄沙の師備禪師であるから、德山から見れば正しく孫に當る人である。

一〇。訥堂。　訥堂は名を梵志と云ふた人で圜悟禪師の法を嗣ぎ天寧寺に住して居られた。或る說に愛に訥堂と云ふは圜悟の自稱であると云ふてあるが。そんなことはどうでも宜しからうと思ふ。

一一。此の子已後孤峯頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖の罵り去ること在らん。　此の子は德山を指したもので、孤峯は多くの山々の中で一段と秀でたる峯のことであるから其の又頂上と云へば絕對高尙此の上もないところで、ソコへ德山が草庵を結んで佛を呵し祖を罵ることであらうと潙山の稱揚されたものである。

第五節　類則提唱

其一　三世不可得

過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。下語云。恰是。

三世不可得と云ふが是なり。不可得は過去未來現在三世共に無心なものぞと云ふ義なり。故に恰是と現成に眞直に用ゐて下語するなり。此の古則は別に參見せざるなり。

其二　紙燭吹滅

德山參龍潭。纔跨門便問。久響龍潭。及乎到來。潭又不見。龍又不現

下語云。問得可始得。

德山の末悟の時で龍潭の境界を知りたさに問ふたぞ。句中のやうなる問いやうなれども、未徹の時ぞ。下語で知られたなり。

龍潭和尙於屏風後引身云。子親到龍潭。下語云。因風吹火。

問頭によつて子親しく龍潭に到ると云ふたぞ。句中の方ぞ。

師乃設禮而退。至夜間入室侍立。更深。潭云。何不下去。山遂珍重揭簾而出。見外面黑却回云。門外黑。潭遂點紙燭度與山。山方接潭便吹滅。下語云。山河大地黑漫々。

吹滅して黑いところを本分に用ゐたなり。德山に本分の道理を知らしめんために爲人して吹き

消されたものぞ。

山豁然大悟下語云。瓦解氷消。

吹滅のところで本分の道理を悟了したなり。

第六節　頌

一勘破言猶在耳。過。二勘破兩重公案。雪上加レ霜曾嶮墮三段不同。在什麼處。飛騎將軍入二虜庭一嶮。敗軍之將無勞再斬。喪身失命。再得二完全一能幾箇死中得活急走過傍若無人。三十六策不二放過一伏豹。穿却鼻孔孤峰頂上草裏坐果然。穿過鼻孔也未爲奇特。爲什麼却在草裏座咄會麼。兩刄相傷。兩兩三三舊路行。唱拍相隨。便打。

【讀方】一勘破言猶ほ耳に在り。過なり。二勘破兩重の公案。雪上に霜を加ふ曾つて嶮墮す三段不同。什麼の處にか在る。飛騎將軍虜庭に入る嶮。敗軍の將は再斬を勞するなし。喪身失命す。再び完全を得る能く幾箇かある死中に活を得たり。急に走過す傍若無人。三十六策汝か神通を靈すも何の用をか作すに堪へん。放過せず理能く豹を伏す。鼻孔を穿却す。孤峰頂上草裏に坐す果然。鼻孔を穿却するも也た未た奇特となさず。什麼としてか却つて草裡に在つて座する。咄會するや。兩刄相傷。兩々三々舊路に行く。唱拍相隨ふ。便ち打つ。

【字解】一。言猶ほ耳に在り。先き程本則で承りました。

二。過なり。ソレハもう疾うの昔に滑んでしまいましたと云つたあんばいと見へる。

三。兩重の公案。早や此れで二度目であるか、皆の者もう讀めてか。

四。三段不同。雪竇の著語せられた一勘破と二勘破と雪上加霜との三段何れも其の調子に差別がある。

五。什麼の處にか在る。嶮墮と云はれるか。其のアブナイところはどこに在るのふと門下に拶する。

六。嶮。德山あぶないところであつた。

七。敗軍の將は再斬を勞するなし。これは潙山老人に建議したやうな語で、もはや德山のやうな敗軍の將に懲々きるにも及びますまいと云つた風である。

八。喪身失命す。疾くの昔に脉が上つたやうだと云ふて先刻の無々で大敗をした上にソレに懲りずに復た一喝してにげだしたことを評する。

九。死中に活を得たり。德山危い命を助かつたと稱揚する。

一〇。傍若無人。德山の一喝して拂袖し去つた勢いを褒めたもので如何にも傍らに人なきが如き振舞であると云ふ。

一一。三十六策汝が神通を靈すも何の用をか作すに堪へん。三十六計遁ぐるに如かずと云ふが兵法の極意であると云ふことちやが、サスがは德山甘く遁げ逐ふぜたと云ふ、褒めるのやらけなすのやら頓んと判斷をつけて見やうのない著語である。

一二。理能く豹を伏す。コレは潙山が柳に風と甘く德山の機鋒をうけなかしたことを稱揚したものである。

一三。鼻孔を穿却せよ。鼻の孔へ綱を透せと云ふのであるから荒れまはる牛を生捕りにしたやうな景況である。潙山甘く德山をねぢふせられた。德山身動きもなるまい。

一四。果然。テツキリそうあらうと思ふたと贊成する。

一五。鼻孔を穿却するも也た未だ奇特となさず。潙山の働き珍らしくもない。圓悟なと一向感心仕らぬと云つたあんばいと見へる。

一六。什麼としてか却つて草裏に在つて座する。　德山何のために草裏などに座せらるゝかとも取れゝば、又溈山にかけて見ても宜しい。

一七。會すや。　どうぢや。合點が往つたかなと門下に注意をする。

一八。兩刄相傷。　德山と溈山。英雄と英雄との鉢合せであるから双方の刄にきづがつくことであらうと云ふ。

一九。兩々三三舊路に行く。　溈山に德山に雪竇丁度好い道伴れであるが、どうぢやな。道中珍らしいこともあつたかなと云ふ。

二〇。唱拍相隨ふ。　德山が謠へば溈山が踊る。そこへ雪竇が囃しを入れる。イヤ早や何れ劣らぬ名人揃いである。

二一。便ち打つ。　そこで圜悟が然らば某甲も仲間入り致さうと云ふので七尺の拄杖をおつ取りてヒシツと一棒くらわせた。此れか溈山德山雪竇圜悟名人揃ろいの一座である。

【講義】　此の一頌は長短六句の古詩體であつて、三三七七七三三七と云ふ次第になつて居る。一勘破二勘破。これは雪竇が本則を擧揚したときに勘破了也と云ふことを二度迄云ふたから、それをその儘また頌にしたもので、雪竇は一度ならず兩度までも勘破したと云はれるか、これは誰れか何人を勘破したと云ふたものであらう。溈山か德山を勘破したと云ふのか、德山が溈山を勘破したと云ふのか或は又雪竇が溈山德山の兩人を勘破したと云ふのか。一體何か何をどう勘破したと云ふのであらう。雪上に霜を加ふ曾つて嶮墮す。此の雪上に霜を加ふと云ふたのも雪竇が本則に溈山老人の此の子已後孤峰頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵り去ること在らん。と云はれたのを評した言葉で、溈山老人も餘計なことを云ふたものであると云ふのを其の儘爰へ持つて來て頌にしたものである。嶮墮（けんだ）と云ふはアブナイことで有つたぞ。今にも喪身失命するところであつたと云つたやうなあんばいである。飛騎將軍虜庭に入る。飛騎將軍は李廣と云ふた人で漢の武帝に仕へて頗る武名の高かつた人であるか、殊に馬に乘ることが巧みであつたから、武帝から飛騎將軍の號を賜つたと云ふことである。然しこの名は敵の匈奴（きょうど）等が將軍を怖れて名けたものであると云ふ說もある。史記の列傳の李廣の傳によると、或る時のこと將軍が匈奴と戰つた時に、運わるくも單宇（せんう）と云ふ虜の爲めに擒にせられた其の時虜等は李廣を馬と馬との間に寢かして曾長の前へ引き出さうと云ふので十有餘里の間李廣をつれて旅行をした。李廣は其の身に少々怪我をして居つたのを幸いに、死んだもの丶樣な風をして敵に油斷を與へて居つたが、折しも好し一人の虜か非常に善い馬に騎つて居るのを見付けたから、李廣はスカサズ飛び起きて其の虜をつき落して自分が其の馬に騎り、其の上虜が持つて居つた弓矢を奪つて、馬に鞭つてトウ〳〵漢の本陣へ遁げもどつたと云ふことである。それを德山が溈山老人の虎の鬚をチョイと引張つて見て今にも一口に咬まれやうと云ふ危い處をカツと一喝して飛び出した樣子によく似て居ると云ふので、爰へもち出して德山の如何にも大膽な振舞を謠うたものである。再び完全を得る能く幾箇かある。溈山の樣な猛虎に出遇ふて然もその鬚を引張るなど云ふ冒險なことをなしながら、安全にそこを遁れ出てくるものはマア多くはあるまいことぢやに、サスガは德山偉いものであると稱揚する。

急に走過す。こゝが德山が敵馬に騎つて遁げ出した樣子。放過せず。これは潙山老人を褒めたものので。潙山もさるもの中々德山位いには誤着せられる氣附いはないと云ふ。孤峯頂上草裏に坐す。本則に潙山が德山の後來を見ぬいて、此れ他日孤峰頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵しり去ることあらんと云ふた語を持ち出したものであるが、意味合は潙山老人自らを云ふたものとも、又德山の將來を豫言したるものとも兩樣に取ることが出來る。爰等は須らく參究して見るべき處であらう。咄。これは潙山を咄却したものか。德山を咄却したものか。何れにせよ前の草裏に坐するのを咄却して叱りつけたものである。

第七節　頌評唱和譯

雪竇一百則の公案を頌するに一則則に香を焚いて拈出す。所以に大いに世に行はる。他更に文章を會し公案を透得し盤礴して熟することを得て方さに筆を下すべきなり。何が故ぞ此くの如くなる。龍蛇は辨じ易く衲子は瞞しがたし。雪竇這の公案に參透して節角砕訛の處に於いて三句の語を着けて撮し來つて頌出す。雪上に霜を加ふ幾んど嶮墮す。只德山の如きは什麽にか似たる。ひとへに李廣が天性射を善くするに似たり。天子封して飛騎將軍となす。深く虜庭に入つて單宇に生獲せらる。廣時に傷病す。廣を兩馬の間に於いて絡つて盛り臥せしむ。廣遂いに詐つて死す。其傍を睨るにひとりの胡兒の善馬に騎るあり。廣身を騰して馬に上り胡兒を推墮して其の弓矢を奪ひ馬に鞭ち南に馳せて弓を彎いて追騎を射退く。故を以つて脫を得たり。這の漢這般の手段ありて死中に活を得たり。雪竇引いて頌中において用いて德山再び入つて相見し舊に依つて跳得出し去るに比す。看よ他の古人見到說到行到用到妨けず英靈なることを。人を殺すに眼を眨せざる底の手脚あつて方さに立地に成佛すべし。立地に成佛する底の人あつて自然に人を殺すに眼を眨せず。方さに自由自在の分あらん。如今の人有る底は問着すれば頭上はひとへに衲僧の氣槩に似たり。輕々に拶着すれば便ち腰段と做り股截と做つて七支八離して渾べて些子相續の處なし。所以に古人道く、相續する也た大いに難しと。看よ他の德山潙山の此くの如くなることを。豈に是れ滅滅挈挈底の見解ならんや。再び完全を得る能く幾箇ぞ。急に走過す。德山喝して便ち出て去る。ひとへに李廣が捉はれて後ち計を設けて一箭に一箇の番將を射殺して虜庭を出づることを得るに似て相似たり。雪竇頌して此に到つて大いに工夫あり。德山法堂を背却して草鞋を着けて出で去る。便宜を得たりと道ふ。殊に知らず這の老漢舊に依つて他の出頭を放さゞること在ることを。雪竇道く放過せずと。潙山晩間に至つて首座に問ふ。適來の新到什麽の處にか在る。首座云く、當時法堂を背却して草鞋を著けて出て去れりと。潙山云く、此子他日孤峰頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵り去ること在らん。幾くばくぞ曾つて是れ放過し來らん。妨げず奇特

なることを。這裏に到つて雪竇什麼としてか道ふ、孤峰頂上草裡に坐すと。又一喝を下す。且らく道へ什麼の處にか落在する。更らに參せよ三十年。

【字解】一。龍蛇は辨し易すく衲子は瞞し難し。龍蛇は猛きものではあるけれども、てだてを以てすれば如何樣にもすることが出來るけれども、衲子分上に至つては何とも角ともして見やうもない。

二。三句の語をつけて。一勘破。二勘破。雪竇加霜の三句となしたもの。

三。天子。漢の武帝かさす。

四。妨げず英雄なることを。英は千人に勝るゝを英と云ふと申して拔群絕倫の人のこと。靈は靈妙不思議の靈であるから人間普通の智識でなく神か佛かと思ふ程の靈活なはたらきのあることであるから。實に驚くべき怜悧なことであると云ふ。

五。腰段と做し股截となつて等。腰が段々とキレ〳〵になり股の關節が離れて仕舞ふて七支八離とちり〳〵ばら〳〵になることである。

六。相續也た大に難し。曹洞宗の開祖洞山良介禪師の申された言葉である。

七。滅々挈々底。支離滅裂と云ふ程のことで、古人も好からざるかたち節目多きなりと釋せられてある。

八。更に參せよ三十年。今一と苦勞しなければ容易に會得は出來まいぞとなり。

第五則　雪峰盡大地

第一節　垂示

垂示云。大凡扶竪宗教。須是英靈底漢。有殺人不貶眼底手脚。方可立地成佛。所以照用同時卷舒齊唱。理事不二權實並行。放過一著。建立第二義門。直下截斷葛藤。後學初機難爲湊泊。昨日恁麼。事不獲已。今日又恁麼。罪過彌天。若是明眼漢。一點謾他不得。其或未然。虎口裏橫身不免喪身失命。試舉看。

【讀方】大凡そ宗教を扶竪せんには須らく是れ英靈底の漢なるべし。人を殺すに眼を貶せさる底の手脚あつて方さに立地に成佛すべし。所以に照用同時卷舒齊く唱へ。理事不二權實並べ行す。一著を放過して第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷すれば後學初機湊泊を爲し難し。昨日も恁麼事已むことを獲ず。今日も又恁麼罪過彌天。若し是れ明眼の漢ならば一點も他を謾することを得ず。其れ或は未だ然らずんば虎口裏に身を橫ふ。喪身失命を免れず。試みに擧す看よ。

【講義】太凡そ宗教を扶竪せんには須らく是れ英靈底の漢なるべし。太凡佛心宗の宗教を扶竪と扶持竪立せむには、千萬人に勝る底の作家でなければならず、亦師家となりて學人を接得せんに

は、殺人不貶眼底の大人物でなければならぬ。宗教を扶竪せんには、とは卽ち人の師匠となるにはと云ふ程のことで、人の師匠となるは中々並大抵のことではない。人は人々各自夫れ〳〵立派に宗教を具へて居る、教家に悉有佛性と申すのかそれであつて。佛になる性質、成佛すべき要素、吾は既成の佛、汝は當成の佛と云ふ、その佛になる素質を具へて居る、それが卽ち佛性である。草木國土悉皆成佛と云ふから猫も杓子も皆佛になる。猫の佛はニャン佛。杓子の佛は杓子佛、杓子に眼鼻を畫いて御覽うじ。其儘おサン殿のお内佛であり。盡十方の無得光佛である。然して其の佛になる要素性質は、是くの如く人人各自事々物々本來本有と具へて居るけれども、單に具へて居る丈けでは何の役にも立たぬ。開覺佛性と申して先覺者の扶助を待てそれを竪立せなければならぬ。先覺者は卽ち宗匠であり大佛師である。運慶とか堪慶とか云はれる大佛師になるは容易なことではない。物言はね佛ですら然り。物言ふ佛、天上天下唯我獨尊と父母所生の此の在りの儘を佛にするには、中々並大抵の手腕ではいかぬ、義理人情を容れぬ底の大宗匠、拔群絕倫の英靈漢でなければならぬ、義理人情は浮世の物である、大宗匠が學人を接得するには、義理人情は容れらぬ。人間普通の智識ではいかぬ、それでは普通の人間、尋常一樣の鈍佛しか出來ぬ。鐵や鉛の鈍佛ではいかぬ、閻浮檀金の傑佛でなければならぬ。サアそれには靈妙不思議と千萬人に勝るゝならぬ底の大人物、九年十年ナンノソノ妾シャ十年浮き沈みと云ふ底の大釋迦、大達磨でなければならぬ。そこで殺人不貶眼底の手脚ありて方に立地に成佛すべしと云ふのである。今佛祖の大道を擧揚して、人天の大道師と仰かれ三界の大導師と許される人は、中々並大抵の人ではない、法の爲め道の爲めに爲法不爲身と毫髮ほども人情を加へず露計りも我見を雜へぬ底の大人物、古今獨步の大宗匠でなければならぬ、一刀兩斷と手に白刀を握りて將に殺人の大業を犯さんとする時を思へ、餘程の馬鹿か大惡人か將た亦眞の大豪傑で無ければ、殺人不貶眼底の大勇氣はないぞ、眼がチラツキ、幽靈が出るやうではそれは鐵佛であり鉛佛である。殺人不貶眼底と一人二人乃至千萬人、所有る法界の有情を兩頭俱截斷一劍倚天人寒と活殺し盡して見よ三世諸佛一時成佛と、眞劍手裡、大法門か獅子吼せらるゝ。斯くてこそ天妙華を爾らし地六種に震動して此の佛の降誕を祝するであらう。然らば這般殺人不貶眼底の大英靈何くにかある。禪門の宗匠となりて學人に接せんものは正に這の大手脚を具へねばならぬ。かくてこそ方に立地に成佛せしむべしで、始めて衆生濟度が出來るのである。可愛き子には旅をさせよ、苦勞をせねば物にならぬ。義理人情をまぢへぬ一見無慈悲なやうな手段があつてこそ眞の大慈悲と申すものである。凡夫の慈悲では末が危險い。見込みがない。照用同時卷舒齊しく唱へ、事理不二權實並べ行ふ。其の機を鑑みるを照と云ひ、其機に應ずるを用と申して活照活用。心に考へ身に行ふ、其れに先後がありてはならぬ。先づ考へてそれから實行する。それでは役にたゝぬ。遲い。ノロマである。受け難き人身を

受け遭ひ難き佛法に遭ひ、然も生死交謝と萬仞の岩頭に望んで見よ。そんなノロマが何になる。照用同時で考へると行ふとか一時同時でなけらねばならぬ。卷舒齊唱は、卷は折伏舒は攝受であるから、或時は奪て折伏し或時は攝受して與ふるではいかぬ。其れは敎家のこと。我が禪門の大宗匠は卷舒齊唱と卷とも舒とも痕迹をつけず一念同時、理事不二權實並べ行ふて、理論と實行、權と實、手段と目的、それが同時俱時でなけらねばならぬ。佛なく生なく迷なく悟なく、生佛不二迷悟同時の、謂ゆる向上の一著であるから、更に其一著を放過して第二義門を建立して直下に葛藤を截斷すで、多くの學者が、權と實、迷と悟、生と佛と、いらぬ閑葛藤に纏綿されて宗門向上の大事、向上の一著に到着することが出來ぬから、茲に已むことを得ず方便を設け第二義門を開いて、單刀直入、直下に葛藤を截斷して、四の五の云はせず一切ことゝ〳〵掃蕩するのである。松は千年の翠を保つと云へと葛藤の爲めには枯れる、そこで截斷が必要である。後學初機は湊泊をなし難し。後學初期と申して並大抵な人、初心の者は湊泊と云ふて中々錨を却ろして寄り附くことは出來ぬ。ソコで昨日も此通り今日も此通りと連日連夜、種々の方便を廻らし手段を設けて參禪辨道の手引をすることであるが、元來宇宙の眞理と云ふものは口にかけて彼れの此れのと辨論したり、口に所作にあらはしてドウぢやコウぢやと形容しうべきものではないのであるにそれに第二義門ぢや手段ぢや方便ぢやとは何のことである。汚らはしい、實に罪過彌天で、五逆十惡にも勝つた佛祖の罪人、正法を誹謗するの罪は免れることは出來ぬ。昨日も恁麼事已むことを獲ず。今日も又恁麼罪過彌天。天地の間身の置き所もないほどの大罪であるとの圓悟の垂示である。されば人ありて此道に參せむ者、若し是れ明眼の漢ならば一點も他を謾することを得ず、無涯の大慈悲ゆへ萬止むを得ざるの提撕であるから、盲目漢でない限りは此の間に毫末の我漫邪漫增上漫を起すわけにはゆかん、眞實至誠に參究せねばならん。然うしてヒョット其れが反對であつたならば、そは虎口裡に身を横たふ。猛虎の口の中へとびこんだやうなもの、獄吏の褌子を盗まんとするやうなもの、危ふし〳〵、どうせ命はないものであり、無間地獄の正客樣であるぞ。それに就いて爰に幸ひ雪峰老漢の示しがあるから試みに擧す看よと本則をよび出す。

第二節　本則

擧雪峰示衆云、盡大地撮來如粟米粒大、拋向面前、只恐拋不下。漆桶不會

【讀方】雪峯衆に示して云く、一盲衆盲を引く。分外となさず。盡大地撮し來るに粟粒米の大の如し。是れ什麼の手段ぞ。山僧從來鬼眼睛を弄せず。面前に拋向す　只恐らくは拋不下ならん。什麼の伎倆か有る。漆桶不會

一盲引衆盲。不爲分外。盡大地撮來如粟米粒大。是什麼手段。山僧從來不弄鬼眼睛。拋向面前。只恐拋不下。什麼技倆。漆桶不會。倚勢欺人。自領出去。莫謾大衆好。打鼓普請看。峰。打鼓爲三軍

勢いに倚つて人を欺むく。自領出去。大衆を謾するなくんば好し。鼓を打して普請して看よ　瞎。鼓を打つことは三軍のためなり。

【字解】一。雪峯。福州雪峯山の義存禪師は第四則の處で出た德山の宣鑒大師の法を嗣いだ人であつて、雲門大師のためには師匠に當る方である。平生學人を接するには極めて機鋒の嶮峻な人で或時のこと、雲門大師が如何なるか是れ佛と問ふたところが、禪師は一言下に寢語することなかれネゴトを言ふなとやりつけられたと云ふことである。後梁の太祖皇帝の開平二年五月に八十七の高齢を以つて示寂せられた。

二。一盲衆盲を引く。雪峯衆に示すと云はれるが、元來一法の人に示すべきはないものを、それを人に示すなどゝは盲人ドチ〳〵で誠に足元があぶないことである。溝の中へでもおちこむことであらうと云ふ。

三。分外となさず。けれども說法示衆は師家分上あるべきこと。萬止むを得ざるの御說法であらう。

四。靈大地撮し來るに粟粒米の大の如し。粟はまだ殼を除かない米卽ちモミのことであるから、靈大地、三千大千世界と云へば如何にも大きいもの丶樣に思ふて居るが其れを指先きでツマンで見ると粟粒米程の大さである。

五。是れ什麼の手段ぞ。靈大地は靈大地である。それを何もつまんで見て粟粒米程の大さであるなとゝ手品を使つて見なくともよさそうなものである。

六。山僧從來鬼眼睛を弄せず。鬼眼睛は鬼の樣に眼をむいて眼玉をくる〳〵させることであるから、某甲などは其んな子供だましに鬼の樣な顏をすることは嫌で御坐ると野次る。

七。只恐らくは拋不下ならん。面前に拋向すなとゝ云はれるが、それは目先きだけのことであらう。

八。什麼の伎倆がある。雪峯そんなことをして見せて其れが何の役に立つのふ。ツマらん藝當である。

九。漆桶不會。漆桶はまつくろなと云ふ喩への俗語で不會は合點が行かぬと云ふ程のことであるから、靈大地か此處にも其處にもゴロ〳〵して居るのに其れが少しも見へぬとは何のことぢや。鼻つくなよけづまづくなよと云ふ。

一〇。勢いに倚つて人を欺く。雪峯餘りつけこんで人を馬鹿にしやるな。春になれば花が咲き十五夜になれば月が丸くなる。山僧もそれ位いのことは心得へて居りまするわと云ふ。

一一。自領出去。其れは雪峯御自分のことであらう。見へないとあれば圓悟か此の眼鏡を御貸し申さう。

一二。大衆を謾する莫くんばよし。大衆が幼稚であるからとて餘り人を馬鹿になさるな。何んなものが居るとも限りませぬぞと注意する。

一三。鼓を叩いて普請して看よ。禪宗寺で寺中の大掃除などをするには普請鼓と申してドン〳〵〳〵と太鼓を打つ。其の聲を聞いて澤山の大衆が出掛けて掃除をしたり割木をわつたりする其れを普請をすると云ふのである、そこでアマネクコフと書いて普請と讀むことになつて居る。然るに今日では一般に家を建てるとか何とかすること丈けを普請すると云ふて居るが、本來は大勢の人を喚び集めると云ふことが普請と云ふ言葉の意味である。ソコで今は大鼓でも叩いて大勢喚びよせて總がゝりて此の靈大地を探して見るがよいと云ふことである。

一四。瞎。某甲などそんなものを見る眼は持ちませぬと兩手で眼をおさへる。

一五。鼓を打つことは三軍のためなり。雪峯太鼓を打いてなど云はれるが、太鼓を叩いて人を集めるのは戰爭の時のことであつて祖師門下は元來泰平ぢや。鼓などうつ用は御坐らぬと云ふ。

第三節　本則提唱

雪峯示衆云。靈大地撮來如粟米粒大。下語云。展則彌綸法界。收則不立絲髮。大地無寸土。充塞六合。

本分を指して靈大地撮し來るに粟米粒の大さの如しと云ふぞ。本分を自由自在に用いよと示さ

れたものよ。

拋向面前　下語云。明如日。明歷々。

拋向すとは面前にあると云ふ義なり。

漆桶不會　下語云。黑漫々。千眼看不見。黑如漆。

面前に拋向すとは用ゆれども其の形の辨し難き處を漆桶不會と云ふ。本分を指したものなり。

打鼓普請看　下語云。無孔鐵鎚當面擲。

始より色々本分を云いたて丶爰に衆に爲人せられたものよ。普請は人の集まるものなり。是の讀方に雨點あり。看よと讀む時は本分の方ばかりにて看せしめよと讀むときは本分と爲人したものぞ。

第四節　本則評唱和譯

長慶雲門に問ふ。雪峯與麼に道ふ。還つて出頭不得の處ありや。門云くあり。慶云く作麼生。門云く總に野狐精の見解を作すべからず。雪峯云く、匹上足らす匹下餘りあり。我れ更に爾かために葛藤を打せんと。拄杖を拈して云く、還つて雪峰を見るや。咄。王令や丶嚴なり。行市を攙奪することを許さず。大潙喆云く、我れ更に爾諸人のために土上に泥を加ふ。柱杖を拈して云く、見よ見よ。雪峯諸人の面前に向つて放阿することを。咄、什麼としてか尿臭も也た知らざる。雪峯衆に示して云く、盡大地撮し來るに粟米粒の大さの如し。古人の接物利生。奇特の處あり。只是れ妨げず辛勤なることを。三たび投子に上り九たび洞山に到る。漆桶木杓を置いて到るところに飯頭となる。也た只此の事を透脫せんがためなり。洞山に至つて飯頭となるに及んで、一日洞山雪峯に問ふ。什麼をか作す。峯云く米を淘る。山云く沙を淘つて米を去るか米を淘つて沙を去るか。峯云く沙米一齊に去る。山云く、大衆箇の什麼をか喫せん。峯便ち盆をくつがへす。山云く、子が緣德山に在りと云つて指して之に見みるしむ。纔かに到つて便ち問ふ。從上宗乘中の事、學人還つて分ありや也た無しや。德山打つこと一棒して云く、什麼と道ふぞと。これに因つて省あり。後鰲山に在つて雪に阻てらる。嵩頭に謂つて云く、我れ當時德山の棒下に在つて桶底の脫するが如くに相似たり。嵩頭喝して云く、儞道ふことを見すや、門より入るものは是れ家珍にあらずと。須らく是れ自己の胸中より流出して蓋天蓋地にして方さに少分の相應あるべし。雪峯忽然として大悟す。禮拜して云く、師兄今日始めて是れ鰲山成道と、如今の人只管に道ふ、古人特地に做作して後人をして規矩に依らしむと。若恁麼ならば正さに是れ他の古人を誘ふるなり。それを出佛身血と謂ふ。古人は如今の人の苟旦なるには似ず。豈に一言半句を以つて平生に當んや。若くは宗敎を扶竪し佛の壽命を續んとす。所以に一言半句を吐くに自然に天下の人の舌頭を座斷

す。儞が意路を着け情解をなし道理に渉るところなし。看よ他の此箇の衆に示すことを。蓋し他曾つて作家に見みる來るがためなり。所以に作家の鉗鎚あり。凡そ一言半句を出すも是れ心機意識思量して鬼屈裏に活計をなすに直ちに是れ群を超へ華を拔く。古今を座して擬議を容れず。他家の用處盡く是れ此くの如し。一日衆に示して云く、南山に一條の鱉鼻蛇あり。汝等諸人切に須らく好く看取すべし。時に稜道者衆を出でゝ云く、恁麼ならば則ち今日堂中大いに人あつて喪身失命し去ること在らんと。又云く、盡大地是れ沙門の一隻眼。汝等諸人什麼の處に向つて阿せん。又云く、望州亭に汝と相見し了れり。烏石嶺に汝と相見し了れり。僧堂前に汝と相見し了れり。時に保福鵝湖に問ふ。僧堂前は即ち且らく置く。如何なるが是れ望州亭烏石嶺相見の處。鵝湖驟歩して方丈に歸る。他常に這般の話を擧して衆に示す。只盡大地撮し來れるに粟米粒の大さの如しと。這箇の時節且らく道へ、情識を以つてト度し得んや。須らく是れ羅籠を打破して得失是非一時に放下して洒洒落々たらば自然に他の圈纒を透得して方さに他の用處を見るべし。且らく道へ雪峯の意什麼の處にか在る。人多く情解をなして道ふ。心は是れ萬法の主、盡大地一時に我が手裡に在りと。且喜すらくは沒交渉。這裏に到つて須らく是れ箇の眞實の漢にして聊か擧着するを聞いて徹骨徹髓して見得透すべし。且つ情思意想に落ちず。若し是れ箇の本色の行脚の衲子ならば他の什麼に己に是れ郎當して人のためにし了ることを見ん。看よ他の雪竇の頌に云く。

【字解】一。長慶　雲門に問ふ。　これは長慶が雲門の雪峯の賦意を會するか會せざるかを試みんために問はれたものと見へる。長慶は即ち雲門と同參の福州長慶院の慧稜禪師のことである。雲門の本錄や禪林類聚などには西院雲門に問ふと云ふことになつて居るが之れは慧稜禪師が閩州の大守の請を受けて長樂府の西院に住して居られたことがあるからそこで西院と申したものである。

二。匹上足らず匹下餘りあり。　匹は配なり合なりと申して、上に配して見れば不足であるけれども下にあはせて見れば餘りがあると云ふのであるから、即ち雪峯の活手段、上にも下にも取り合はず、此れ何か不足、是れ何か餘りあるぞと揑つて看よと云ふのである。

三。王命稽や嚴なり行市を攜奪することを許さず。　雪峯の這の裏は王令が嚴重であるに依つて追ひはぎ劫盜などを堅く禁じてあるからウカ〳〵と手を出されるなと云ふ。

四。大潙喆。　潭州大潙の眞如喆禪師と申した方で法を翠巖の可眞禪師に嗣いで居られるから即ち臨濟大師から八世の法孫に當る人である。

五。雪峯諺人の面前に向つて放阿することを、　咄什麼としてか屎臭も也た知らざる。　ソレ雪峯が目の前で屎糞垂れて居るでないか。エヽ此の臭さがわからぬのか、山僧など屁臭ふて鼻持ちかならぬと云ふ。これが即ち味噌の味噌臭きは上味噌に非ず、雪峯今日の手段佛法くさくて鼻持ちがならぬと云ふところである。

六。三たび投子に登り九たび洞山に到る。　コレは雪峯の因位に此の事を究めんがために諸方を遍歴して或る時は投子山に登りて大同禪師の提撕をうけ、或る時は洞山に登つて參禪辨道に餘念のなかつたことを申したものである。

七。沙を淘つて米を去るか米を淘つて沙を去るか。　一説に沙を煩惱とし米を菩提として見るやうであるが、煩惱と菩提でも生死と涅槃でもそんなことはどうでも好い。只それ米沙其の者の上で參して見よ。

八。盆をくつがへす。　之れ大地に寸土なしで、天下の禪僧に飽食せしめらるゝところである。

九。嵩頭。　鄂州巖頭の全豁大師と申した人で、法を德山和尚に嗣いた人であるからして、卽ち雪峯の法兄に當る方である。唐の僖宗皇帝の光啓三年に六十歳で以つて遷化せられた。丁度雪峯大師の遷化より二十二年前に當つて居る。

一〇。古人特地に做作して後人をして規矩に依らしむと。　コレハ歴史家とか何とか云ふ連中どもの好く言ふことであつて、古人が事實にありもせぬことを假想して後人を戒めたものであらうなど云ふ。之れが卽ち針の穴から天をのぞくと云ふ譬である。之れを出佛身血の大罪と云ふ。

一一。苟且。　草率なりと注して、かりそめのことゝ云ふことであるそうな。

一二。南山に一條の鱉鼻蛇あり。　鱉の頭は丁度蛇の頭ソックリと云ふ形であるから鱉のことを鱉鼻蛇と云ふたものである。サテ此の南山と云ふは何處のどんな山であらう。又鱉龜蛇と云ふは何んな鱉でああらう。角が生へて居るであらうか、尾毛が出來て居るであらうか。爰參究して見ればならぬところであらう。

一三。稜道者。　先きに出た懸稜禪師のことである。

一四。望州亭。　これは雪峯山二十三景中の一つであつて、義存禪師が替つて雪峯山に居られた時に此の亭に登つて福州の城山を望見せられたと云ふので望州亭と名けたものであるそうな。

一五。烏石嶺。　福州城の西南一里計りの處に烏石山と云ふ山があつて其の山は恰も龜の樣な形をして居ると云ふことである。一名を閩山とも云ふて居る。雪峯を去ること三十里と云ふから日本里數にすれば五里位の距離であると見へる。

一六。鵝湖。　德山鶖湖の紹禪大師と云つた人で矢張り德山の法を嗣いた人であるから、嵩頭や雪峯とは卽ち法兄弟の間柄である。

一七。期當。　長袖の貌と云ふからヘタの長談義で四の五のといらぬ言説を弄されたことを云ふたものである。是れ卽ち雪峯の老婆心の致すところ。ありがたく思はねばならぬ。

第五節　類則提唱

其一　雪峯匹上匹下

雪峯云。匹上不足。匹下有餘。我更與爾打葛藤。拈柱杖云。還見雪峯麼。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

柱杖を本分に用いて雪峯を見るやと云ふたは本分を見たかと云ふ心ぞ。

咄。王令稍嚴不許攙奪行市。下語云。脚踏實地漢。

大唐の王の推し買り狼藉をするなと成敗のあるやうに、學者の中に閑な者があつて色々に義理をつけて邪路に引き入るゝ故に邪路に入るなと云ふ義なり。市中にて推し買り狼藉するなと國主からの法度の如く邪路に入るなとのことぞ。

大潙喆云。我更與爾諸人土上如泥。拈柱杖云。看看雪峯向諸人面前放阿咄。爲什麼屎臭也不知。下語云。弄精魂漢。同坑無異土。

雪峯を罵つて色々に云はれたれども上手の眼から見おろして見れば同穴の狐よ。又。雪峯の云はれたことを重ねて云ふたは徒らに精魂を弄するものよとなり。

其二　雪峰飯頭

雪峰到洞山作飯頭。一日洞山問雪峰作什麼。下語云。舌頭有骨。

洞山は曹洞宗の高祖悟本禪師なり。良价と云ふ人ぞ。洞下ゆへに機關なし。雲門下の洞山には機あり。此の問ひ平々に問ふたやうなれども句中なり。

峰云。淘米下語云。有問有答。

問ふた上をまつすぐに答へたものぞ。

山云。淘沙去米淘米去沙下語云。彩穿肘露。

前は什麼をか作すと云ふたが、爰では句中を云ひ露したほとに衫穿肘露ぞ。

峰云。沙米一齋去。下語云。斬釘截鐵。

沙米共に去ると云ふたほどに截斷に用いたぞ。

山云。大衆喫箇什麼。下語云。提襟見肘

かう云つて見屆けやうとしたぞ。

峰便覆盆下語云。虛空跩跳。

盆を覆へされたは道理に涉らざる活手段の振舞いぞ。虛空も跳る如くなど云ふ心ぞ。好き働きなり。又云く、雪峯の機用を顯はかいて盆を覆かへしたぞ。機用とは大機大用ぞ。卽ち活所ぞ。活所、活句、活手段は皆同じことなり。轉處と云ふも同じことなり。轉所にも深い轉處、淺い轉處、何の境界の轉處などゝ云ふて少しつゝ心持ちがかはるぞ。又大用現前規則を存せずと云ひ黃檗六十棒なんとゝ云ふが皆活所ぞ。大機と云ふは機關ぞ。大用と云ふは鑊湯に冷處なしと用ゐて道理に涉らず自由自在に用ゆる處を云ふたぞ。此れ則ち大用現前の境界にして則ち活所なり。其れを略して機用と云ふなり。

山云。子緣在德山指令見之。纔到便問從上宗乘中事。學人還有分也無。下語云。好問。

宗乘中の事とは佛法と云ふ心ぞ。有りや無しやとは心得られやうかどうであらうと云ふ義なり。言ふ心は七佛以來的々相承したる宗門の佛法を我等如き者も學せばならうことかと云ふたぞ。此くの如く問ふてこそ德山の境界も知れやうするほどに好問と語をつけたぞ。

德山打一棒云道什麼。下語云。不識爲德山。

此れも德山の活處に趣いて道理に涉らず打つたぞ。さすがは德山、好くは打たれたぞ。

因之有省。下語云。瓦解冰消。

雪峯の盆を覆がへしたも手段なり。德山の一棒打たれたも活手段なり。偖ては我が見地も德山

の見地も同じものぢやと悟つたものなり。元來心得へた事なれとも愈こゝで釘の根をかへいたぞ。清カンナをかけたぞ。私に云く省ありとは小悟を云ふなり。爰は悟つた上を猶々悟つたほどに大悟すとあらふことぢやが、それを省ありとあるは記者の誤りなるべし。此の古則見分けがたし。參せすんば則ち雪峯の深淺心得がたし。元來明眼かと見れば奥に省ありと云ふ。又初問答の處に活手段の働きあり。見分けがたき古則なり。元來は明眼なれども更に德山のところでキョカンナをかけたと云ふことは參せざれば知るまじき也。

其三　鰲山成道

雪峯後在鰲山阻雪。謂巖頭云。我當時在德山棒下如桶底脫相似。

下語云。蓋天蓋地。

蓋天蓋地は本分なり。又全備したる方なり。雪峯の德山の棒下にて了脫して全備したぞと語られた處は蓋天蓋地ぞ。

岩頭喝云從門入者下語云。耳朶兩片皮。不是家珍。下語云。和盤推出夜光。

殊。須是自己胸中流出蓋天蓋地方有少分相應。下語云。平生心膽向人傾。

雪峯の參禪參學して德山の棒下で悟つたことを隨分そうに云はるゝほどに參禪參學と云ふも皆色相上の閑事よ。たゞ本分こそ殊勝なれと云はれたは、則ち爲人なり。須らく是れ自己の胸中より流出してと云ふは門より入るものは是れ家珍にあらずの境界を我れと自悟自得せよや。又蓋天蓋地して萬境界備ふと云ふも本分の眼から云ふたことぞ。少分相應と云ふは上を畢竟してそれさへまだ十分ではない少分よと也。

雪峯忽然大悟下語云。聽雨寒更盡開門落葉多。

德山の下で悟つて隨分と思ふたれば、又師兄巖頭に逢ふて門より入るものは是れ家珍にあらずの境界を悟つたとなり。

禮拜云師兄今日始是鰲山成道下語云。蝦蟆不出斗。吽々。

根本の上には悟らうずることもないを隨分そうに成道したと云ふは習氣の煩惱を離れ得ぬ者よ。少分の相應よと今日の上から見かけてした下語ぞ。根本の上は本分ぞ、家珍ぞ。是れは萬境界を拂いのけて本分を肝要としたぞ。此れは先師からの辨ぞ。私に云く本分を肝要とするもまだ斗を出でぬものよ。本分と云ふ沙汰も衲僧分上には有つてこそ。又吽々は根本の上に何事を悟らうぞ。悟つたらば好いことよ、させることは有るまいぞと云ふて鼻にのせてうけがはぬぞ。

從上來雪峯淘米の古則は師學共に句中なし。洞山は本より曹洞宗の洞山大師で句中を識らざる

なり。其の會下の人なれば雪峰も又句中を識らざるなり。盆をくつがへすところも前の沙米一齊去の境界で截斷の用をふるまうてみせたまでぞ。然るを活所と用ゐ師學共に機關と用ゐたは今日の學者の上から見かけて機關の下語をしたぞ。是れを轉語の機關と云ふぞ。雪峰は德山の棒下で始めて句中を悟られたぞ。

其四　三處相見

望州亭與レ汝相見了也。烏石嶺與レ爾相見了也。僧堂前與レ汝相見了也　下語云。充ヨ塞ス六合ニ

本分をあらはして僧堂前にもどこにもあると云ふたなり。相見了也と云ふは充ち滿ちてあると云ふ也。

時有レ僧出問。僧堂前卽且置。如何是望洲亭烏石嶺相見處。下語云。隨レ語轉。隨レ機轉。

本分に相見の道理を知らずして隨分だでゝ云ふたぞ。

雪峰驟步歸ニ方丈ニ下語云。千峯向レ岳ニ百川歸レ海ニ

本分をことわらず、收めて方丈に歸つたぞ。驕步はシバ〳〵歩みにて行くなり。私に云く、僧の短處を何とも云はずして歸つたは何事ぞ。こゝは何ぞ命を行せざると云ふ下語をしたいところぞ。

第六節　頌

牛頭沒　閃電相似。蹉過了也。馬頭回　如擊石火。曹溪鏡裏絕ニ塵埃一　打破鏡來與爾相見。須是打破始得　打レ鼓看來君不レ見　刺破儞眼睛。莫輕易好。百花春至爲レ誰開　法不相饒。一場狼籍。葛藤窟裏出頭來。

【讀方】　牛頭沒し　閃電相似たり。蹉過了也。馬頭回へる　擊石火の如し。曹溪鏡裏塵埃を絕す。鏡を打破し來れ汝と相見せん。須らく是れ打破して始めて得べし。鼓を打して看せしめ來るに君見へず　汝が眼睛を刺破す。輕易にすること莫くんば好し。漆桶什麼の見難きところかあらん。百花春到りて誰がために開く　法相饒さず。一場の狼籍。葛藤窟裡より出頭し來る。

【字解】　一。閃電相似たり。　チラリとしたやうであるが諸人それ認めたかと雪峯が面前に拋向したことを評する。

二。蹉過了也。　餘程確かりせぬとすれちがつても見失ふて仕舞ふぞと云ふ。

三。擊石火の如し。　それピカリと光つた諸人見屆けたか。

四。鏡を打破し來れ汝と相見せん。　曹溪鏡裏塵埃を絕すと云ふたからその鏡や絕塵に取り附くものかあらうかと心配して著けた語と見へる。

五、須らく是れ打破して始めて得べし。　これも前と同じ意味でなくもがなと思はれる。

六。汝が眼睛を刺破す。　諸人動くな。ねぢ向くな。目を開いて見よ。それ貴樣たちの目の先きにと注意する。

七。輕易にすること莫くんば好し。　諸人相かまへて輕忽にするなよ。と注意し。
八。淥桶什麼の見難き所か有らん。　雪竇は君見へすなと云はれるか何も見かたいことはない。ソレ此の眼鏡をあけようと云ふ。
九。法相饒さず。　山は高く水は長し一切諸法一物として餘計なものはない。
一〇。一場の狼籍。　雪竇餘り取り亂された。眉毛が落ちようぞと云ふ。
一一。葛藤窟裡より出頭し來る。　之れは雪竇の頌文を賞揚したもので實に宗眼圓明にして而も輪林の才ある、何とも感服の外はないと云ふのである。

【講義】　此の頌古一章は三言二句に始まつて次の三句は皆七言の調になつてある。牛頭沒し馬頭回へる。牛頭と馬頭。沒すると回へると兩端に渉つて謠つてあるのは盡大地と粟米粒、撮し來ると拋問す。生死と涅槃、空と有と云ふ風にトカク兩端に渉りたがるが人情であるから、そこを擬議すれば則ち失すと云ふ方語の牛頭沒し馬頭かへると云ふ語を以つて巧みに文を飾つて本則の面前に拋問すと云ふに合せて謠つたものと見へる。ソレ拋け出されたぞグヅ〳〵すると蹉過了也。分別に渉るいとまはないぞと云ふあんばいである。曹溪鏡裏塵埃を絶す。六祖の菩提本と樹なし明鏡も亦た臺に非ず本來一物なし何れの處にか塵埃を惹かんと云ふが卽ち明煌々たる曹溪の大圓鏡であつて、此の鏡は本來塵埃を絶して居るから牛頭も馬頭も盡大地も粟米粒も月も花も一切餘すところなく分明に寫し出すことが出來る。鼓を打つて看せしめ來るに君見えず。曹溪鏡裏には馬頭も牛頭も一切明かに見へるけれども悲しい哉、それすら能く見ることが出來ないものがあるからして雪峰和尙か鼓を打ちて普請して看よ、大勢よびよせて總かゝりて搜して見るがよいと親切を盡されたけれども矢張り見へぬものは見へぬ、如何にも殘念なことではないかと雪竇の嘆息である。百花春到つて誰れがために開く。そこで雪竇の慈悲の深き。これ程まで雪峯が骨折られてもそれでも尙ほ見へぬものがあるとは、誠に氣の毒なことであるから、ドウレ雪竇が一つ見せてあげやう程に能く眼を開いて御覽なされと云ふので誰れが爲めにか開くと謠い收められたのである。

第七節　頌評唱和譯

雪竇自然に他の古人を見て只他の命脈上に去つて一割して他のために頌出することを消す。牛頭沒し馬頭回へる。且らく道へ箇の什麼をか說く。見得透する底は早朝に粥を喫し齋時に飯を喫するが如くに相似たり。只是れ尋常なり。雪竇慈悲當頭に一鎚に擊碎し一句に截斷す。只是れ妨けず孤峻なることを。擊石火の如く閃電光に似たり。鋒鋩を露さず爾が湊泊の處なし。且らく道へ意根下に向つて摸索し得てんや。此の兩句一時に道ひ盡くし了れり。雪竇第三句に却つて一線道を通じて略ぼ些の風規をあらはす。早く是れ落草。若し言上に向つて言を生し句上に句を生じ

意上に意を生じ解を作し會を作さば唯老僧を帶累するのみにあらず亦乃ち雪竇に辜負せん。古人句は此くの如しと雖も意は此くの如くならず。終ひに道理を作して人を繫縛せず。曹溪鏡裏塵埃を絕す。多少の人は道ふ。靜心便ち是れ鏡と。且喜すらくは沒交涉。只管に計較道理を作さば什麼の了期かあらん。這箇は是れ本分の說活山僧敢へて本分に依らざるにあらず。牛頭沒し馬頭回へる。雪竇分明に說き了れり。自ら是れ人見へず。所以に雪竇此くの如く朗當して頌して道ふ。鼓を打つて看せしめ來るに君見へず。痴人還つて見るや。更に儞に向つて道ふ。百花春到つて誰れか爲めにか開く。謂つべし戶牖を豁開して儞がために一時に八字に打開し了れりと。春の至るに及んで幽谷野澗乃至人なきの處に百花きそい開く。且らく道へ更に誰れかためにか開く。

【字解】一。他の古人。　雪峯を指す。
二。帶累。ヒキヅラウと讀む。

第六則　日々好日

第一節　本則

舉雲門垂語云。十五日已前不問汝。半河南半河北。這裏不敢舊曆且。十五日已後道將一句來。不免從朝至暮。切忌道着。自代云。日日是好日。收。鰕跳不出斗。誰家無明月清風。還知麼。海神知貴不知價。

【讀方】雲門垂語して云く、十五日已前は汝に問はず。半は河南にして半は河北。這裏舊曆日を敢めず。十五日已後一句を道將ち來れ。免れず朝より暮に至るを。切に忌む道着することを。來日は是れ十六。日月は流るゝが如し。自ら代つて云く日日是れ好日。收。鰕跳れども斗を出でず。誰か家にか明月清風なからん。還つて知るや。海神の貴きを知つて價を知らず。

【字解】一。雲門。　雲門大師は諱を文偃と申して雪峰山の義存禪師の法を嗣いで韶州雲門山の光泰院に居られたから、雲門大師と處の名を喚んで居る。門下には洞山の守初、德山の緣密、香林の澄遠など云ふ大德があつて、遂いに一家の規模を立てたに依つて禪宗の五家と云ふ中の雲門宗の高僧と仰がれた方である。後漢の隱帝の乾祐二年四月に遷化せられた。後十有餘年を經て宋の大祖の乾德三年に大師の遺體を宮中に迎へて供養して大悲雲匡眞弘明禪師の勅號を賜つたと云ふことである。
二。半は河南にして半は河北。　河と云ふは黃河のことで其の南北と云ふのであるから、雲門の語に十五日已前とか已後とかあるのを評したもので、雲門何處つかずの言いやうをせらるゝ。どちらかのふと云ふて、言中に響きあり、中々味いのある申され方と稱揚する。
三。這裏舊曆日を敢めず。　這裏は圜悟の手本であるから、私の處には一昨年や去來の曆本は貯へてないから、十五日以前

だの已後だのと云ふ暦の御相談は御免蒙りたいと云ふて、諸人日勘定など必ずするなよと垂示する。

四。免れず朝より暮に至るを。十五日已後と雖も矢張り日輪は東に出でゝ西に沒する。朝から晩までを一日とは云ふ。

五。切に忌む道着することを。　十五日以前だの以後だの云ふことにかゝはつて、カツカリと。

六。來日は十六日。　雲門の口車に乘せられて明日は十六日で候ふなどゝ云いやるなよ。

七。日月は流るが如し。　月日は水の流れるが如くで少しも壅滯はないから以前だの以後だの十四日だの十五日だのと云ふ何處に癸と云ふ隔ては無い筈のものよ。

八。收。　雲門能くは收められた。　日日是れ好日の一句に無始刼來未來永刼を收め盡して遺す所はない。

九。鰕跳れども斗を出でず。　誰が何と云つても日日是れ好日の外に出ることは出來まい。

一〇。誰れが家にか明月清風なからん。　人人自家の風光。雲門の申さる迄もないことである。

一一。還つて知るや。　皆の者此の清風明月がわかるかな。盲目の見へざるは日月の咎に非ずと云ふことがあるぞ。

一二。海神の貴きを知つて價を知らず。　海中には珊瑚珠などの色々の貴い物があると云ふことを知つて居つても、そのなりにして置いては何の所詮もない如く、人人各自立派な本地の風光に接しながら、充分それを樂しむことが出來ぬでは實に何の所詮もないことである。況して此の公案などに就いても、雲門の垂示は格別であるとか、日日是れ好日とは實に一句に三句の體を備へた妙句であるとかと言句上に附き纏ふて居ては、到底雲門の眞意が分るものでないと圜悟が老婆心を加へられたところである。

第二節　本則提唱

舉雲門垂語云。十五日已前不問汝。數片白雲籠古寺。雲開月色白十五日已後道將一句來。魚行水濁。鳥飛毛落。

何の道理もなく云はれたれども、禿僧の物を云へば、自然に句中が備はるぞ。鳥も魚も無心なれども鳥とべば毛を落し魚行けば水が濁るぞ。

自代云。日々是好日。下語云。月白風清。

前に句中を云ふたをかまはず。日々に是れ好日と云ふたは何の道理もなきゆへに月白風清と下語したものぞ。先師は此の古則は安すそうにして實は甚た見にくいと仰せられたぞ。

第三節　本則評唱和譯

雲門初め睦州に參す、州旋機電轉直ちに是れ湊泊し難し。尋常人を接するに纔に門を跨れば便ち趨住して云く道へ道へと。擬議不來なれば便ち推出して云く、秦時の轆轤鑽と。雲門凡そ去つて見みゆ。第三回に至つて纔に門を敲く。州云く誰ぞ。門云く文偃。纔に門を開けば便ち跳り入る。州趨住して云く道へ道へと。門擬議す。便ち門を推し出されて一足門閫の內に在り。州に急に門を合せられて雲門の脚を拶折す。門忍痛して聲を作し。忽然大悟す。後來語脈人を接するに一摸に睦州を脫出す。後陳操尙書が宅に於いて住すること三年、睦州指して雪峯の處に往つて去らしむ。彼に至りて衆を出てゝ便ち問ふ。如何なるか是れ佛。峰云く寐語すること莫れ。雲門便ち禮拜す。一住三年。雪峰一日問ふ。子が見處如何、門云く某甲が見處從上の諸聖と一絲毫許り

も移易せずと。靈樹二十年首座を請せず、常に云く我首座生せり。又云く。我が首座牧牛せり。復云く、我が首座行脚せり。忽ち一日鐘を撞かしめて三門前に首座を接す。衆皆之れを訝かる。雲門果して至る。便ち請して首座察に入つて包を解かしむ。靈樹を人號して知聖禪師と曰ふ。過去未來の事皆預め知る。一日廣主劉王將に兵を興さんとす。躬ら院に入つて師を請して臧否を決す。靈樹已に先づ知つて恰然として坐化す。廣王怒つて曰く和尚何の時か疾を得たる。侍者對へて曰く師曾つて疾有らず、適きに一合子を封して王の來るを俟つて之れを呈せしむ。廣主合を開くに一帖子を得たり。云く、人天の眼目堂中の首座と。廣主旨を悟つて遂いに兵を寢む。雲門を清して出世して靈樹に住せしむ。後來方さに雲門に住す。師開堂說法す。鞠常侍と云ふものあり、問を致す。靈樹の果子熟すや也た未だしや。門云く什麼の年中にか生と道ふことを信ずるを得たる。復劉王の昔賣香の客となる等の因緣を引く。劉王後靈樹に諗して知聖禪師となす。靈樹は生々通を失せず、雲門は凡そ三生王となる。所以に通を失す。一日劉王師を詔して內に入つてを夏を過さしむ。數人の尊宿と共に皆內人の問訊を受けて說法す。唯師一人言はず、亦人の親近するなし。一の直殿使あり、一偈を書して碧玉殿の上に貼在して云く、大智の修行始めて是れ禪、禪門は默に宜うして喧に宜しかしからず。萬般の巧說爭でか實に如かん。雲門の總に言はざるに輸却す。雲門尋常愛して三字の禪を說く。顧。鑑。咦。又一字の禪を說く。僧問ふ父を殺し母を殺しては佛前に懺悔す。佛を殺し祖を殺しては什麼の處に向つてか懺悔せん。門云く露。又問ふ如何なるか是れ正法眼藏。門云く普。直ちに是れ擬議を容れず。平鋪の處に到つて又却つて人を罵る。若し一句語を下せば鐵橛子の如くに相似たり。後四哲を出す。乃ち洞山の初。智門の寬。德山の密。香林の遠。皆大宗師たり。香林十八年侍者となる。凡そ他を接するに只遠侍者と叫ぶ。遠云く喏。門云く是れ什麼ぞ。此くの如くすること十八年、一日方さに悟る。門云く我今より後更に汝を叫ばず。雲門尋常人を接するに多く睦州の手段を用ふ。只是れ湊泊をなし難し。釘を抽き楔を拔く底の鉗鎚あり。雪竇道く我は愛す韶陽新定の機。一生人のために釘をぬき楔を拔く。箇の問頭を垂れて衆に示して云く、十五日已前は汝に問はず、十五日已後は一句を道いもち來れ。千差を坐斷して凡聖を通せず。自ら代つて云く、日日是れ好日と。十五日已前這の語已に千差を坐斷す。十五日已後這の話也た千差を坐斷す。是れ他明日は是れ十六と道はず、後人只管に語に隨つて解を生ず、什麼の交涉か有らん。他の雲門箇の宗風を立つ、須らく是れ箇の爲人の處あるべし。垂語し了りて却つて目代して云く、日日是れ好日と、此の語古今を通貫し從前至後一時に坐斷す。山僧此の如く說話するも也た是れ語に隨つて解を生ず。他殺さんよりは自殺せんには如かず。纔かに道理を作さば坑に墮ち塹に落つ。雲門一句の中に三句俱に備はる。蓋し是れ他家の宗旨此くの如く一句語を垂る。須らく宗に歸せんことを要すべし。若し此くの如くならずば只是れ杜撰。

此の事許多の論説なし。而も未透のものは却つて此くの如くなることを要す。若し透得せば便ち古人の意旨を見ん。雪竇の葛藤を打するを看取せよ。

【字解】一。睦州。　道蹤禪師と申して黄檗大師の法を嗣いだ方である。黄檗が人一倍の悪辣な人であるから其の弟子たる睦州も中々孤危険峻な師家で、誰れでも叅禪の人さへ来れば直ちにヒッ捉へてサー一言言つて見ろとイキナリに突掛る。ソコデ狼狽すれば直に室外へ推し出して秦時の鞍轢鐵と言つて罵しる。秦時の鞍轢鐵といふのは秦の始皇が阿房宮を建てた時の道具のことで今の用に立たない奴ぢやと云ふことである。雲門も叅禪に往く度び毎に例の如く推し出されたが三度目に往つた時に門の戸をコツ〳〵と叩くと睦州が内から誰だと云ふから文堰でありますと云ふ。睦州が少し門の戸をあける。雲門がとび込む。睦州はイキナリ雲門を捉へてサー云つて見ろと責める。狼狽して居る中に例の通り雲門をつき出して門の戸をピシヤリ閉めたが、雲門の片足がまだ室内に在つたものだから堪らない。雲門は痛い〳〵と叫びながら始めて大悟徹底したと云ふことである。

二。陳操尚書。　睦州の長官をして居つた人であるが後には尚書の位に迄登られたと見へる。黄檗の法を嗣いだ龍興寺の陳尊福の法を嗣いで俗人ではあるけれども、中々の傑物であつた。

三。靈樹。　韶州靈樹の如敏禪師と申した方で長慶院の大安禪師の法を嗣いだ方であるが南岳大師より四世目の法孫で臨済大師とは法姪の間柄である。

四。廣主劉王。　劉王譚は隱と云ふた人であるが父は封州の刺史謙と云ふた人である。唐の末年に南海王に封ぜられ都を廣州に定めた。それで廣王と稱するのである、國を保つこと五十年遂いに宋の太祖の爲めに亡ぼされてしまつた。

五。臧否。　善惡と云ふに同じく怡然は安心の貌である。

六。一合子。　合子は奩子のことであるが奩子は藏香の器又は鏡匣なりと云ふから何でも箱のやうなものと見へる。一帖子を得たりとあるは多分靈樹禪師の遺言狀のことであらう。

七。雲門を請じて出世して靈樹に住せしむ。　釋氏稽古略によると後唐明宗皇帝の長興元年に開堂説法と云ふことであるから、如敏禪師も定めて此の年に示寂せられたのであらう。

八。碧王殿。　劉王の住つて居られた殿の名である。

九。三字の禪。　雲門大師は僧を見る毎に鑒咦と云ふことを申されたと云ふことであるが之れを筆録したものが顧鑒咦と三字にした。それを大師の弟子に當る德山の緣密禪師が顧の一字を削つてたゝ鑒咦と曰はれた。それを叢林では抽顧頌と名けたと云ふ話である。智門の光祚禪師の頌に。雲門の顧鑒笑ひ嘻々、擬議すれば渠が顧鑑咦に遭ふ。任い是れ張良智巧多きも、到頭に是に於いて也た施こし難からんと云ふがある。

一〇。露。　徧界曾つて藏さず。明歴々露堂々と云ふところ。

一一。普。　盡大地正法眼。諸人蹈みはずすなよと云ふ。

一二。四哲を出す。　一、襄州洞山の守初宗慧禪師。二、隋州雙泉山の師寛明教禪師。三、昇州德山の緣密圓明禪師。四、益州青城香林院澄遠禪師。之の四人を雲門下の四哲と云ふのである。

一三。我は愛す韶陽新定の機。　古人の舊轍をふまざる斬新決定の機鋒あるを愛すると云ふことゝ見へる。義堂周信の空華日工集に、余碧岩集の新定の機を以つて中岩に問ふ。岩答へて曰く、古より老宿の傳に云く、雲門の説法毎々の語新奇を以つて格となす、是れ乃ち新たに自ら定むる格なりと見へてある。中岩は中岩圓月禪師即ち中正子と號した人で法を東陽德輝に嗣いだ人である。

一四。十五日已前は汝に問はず等。　大慧禪師は古本の雲門の語録に依つて是の垂示は四月八日の灌佛會に雲門が上堂して此の垂示をせられたのであると云ふて居られる。そこで有説に四月八日は勿論十五日已前と云ふ中に入つて居ると云ふてあるがそんなことはどうでも宜い。十五日でも十日でも乃至は三十日でも、父未生以前でも出生以後でも天地未分以前でも成立以後でも更々かまふことはないのである。

一五。自ら代つて云く。　之れは代語と云ふので雲門以後には幾らでもあるが、垂示と云ひ代語と云ひ共に雲門大師から始まつたと云ふことである。

一六。雲門一句中に三句俱に備はる。　三句は衆流截斷の句と函蓋乾坤の句及び隨波逐浪の句で、此の三句體調して日々是れ好日の一句に具足して居ると云ふ。

第四節　類則提唱

其一　韝轢鑽

雲門初參睦州。州纔見來便閉却門。雲門乃扣門。州云誰。門云某甲。州云作甚麼。門云已事未明。乞師指示。下語云。問得可始得。州開門一見便閉却。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

根本の上には何を指示せうぞ。門を閉却したこそ指示爲人したものよ。

門如是連三日扣門。至第三日。州開門。門乃拶入。州擒住曰。道道。下語云。捉襟見肘。

門擬議。下語云。蹉過了也。

州便推出云。秦時韝轢鑽。下語云。痛處下針錐。

韝轢鑽は昔の咸陽宮の廻錐なり。後代に受用せさるものよと云ふ義なり。不受用底のものこそ本分よ。

逐掩門損門。一足門從此悟入。

下語も辨もなし。

其二　靈樹菓子

請雲門出世住靈樹。後來方住雲門。師開堂說法。有鞠常侍致問。靈樹果子熟也未。門云什麼年中得信道生。下語云、因風吹火。因苗辨地。

靈樹は雲門の以前に住せられたところなり。樹の字に因つて菓子を取り出したなり。言ふこゝろは、雲門の工夫用心は熟して候ふかと云ふて犯いて見たぞ。させることは候ふまいと云ふ心ぞ。答話の心はさてはなまじいと云ふ音信は何處から候いしぞと云ふぞ。熟すや未だしやと云ふ語に因んで生いの語を取り出したは怜悧なる答へぞ。信ずるとにごるはあしゝ。信するとすんで讀むべし。音は信なり。先師は從苗辨地と仰せられたぞ。

其三　雲門殺父母

僧問二雲門一殺レ父殺レ母佛前懺悔。殺レ佛殺レ祖向二什麼處一懺悔。

下語なし。截斷の境界ぞ。殺すと云ふた處を截斷に用ゆるぞ。殺レ佛殺レ祖と云ふことがありてこそ。それをあるやうに問ふたが賊なり。

雲門云露。下語云。平出

云いあらはしたと云ふときは賊なり。又あらはれたと云ふ時は本分なり。兩面目備りたぞ。平出は鋸の兩方へわたりて對樣にある如く露と云われたは賊と本分とをかけて云ひしものぞ。平出の二字をナラビイッとよむ也。其の鋸の　の如く兩方へ渉りてあるやうに兩面目備はりたと云へり。大事の句辨なり。

其四　雲門普

僧問二雲門一如何是正法眼下語云。黑如レ漆明如レ日。

正法眼は本分を指して問ふたぞ。

門云普。下語云。充二塞六合一。徧界不二曾藏一。

普は本分ぞ。普はあまねしと讀むなり。普と云ふは乾坤に逼塞してあると云ふ境界なり。

其五　香林諾

香林十八年爲二侍者一。雲門凡接レ他叫二遠侍者一。遠云諾。門云是レ什麼。下語云。無孔鐵鎚當面擲。和盤推出夜光珠。

如レ此十八年遠一日方悟。下語云。瓦解氷消。

門云我自レ今後更不レ叫レ汝。下語云。憐レ兒不レ覺レ醜。

第五節　頌

去二却一。七穿八穴。向什麼處去。放過一着。拈二得七一。拈不出。却上下四維無二等匹一。何似生。上是天下是地。東南西北與四維有什麼等匹。爭奈柱杖在我手裏。徐行踏斷流水聲。莫問脚跟下。雖爲體究。縱觀寫出飛禽跡。眼打入葛藤窟裏去了也。亦無此消息。野狐精見解。依前只在舊窟窠裏。草茸茸。腦後拔箭。是什麼消息。墮在平實處。煙冪冪。未出這窠窟。足下雲生。空生巖畔花。狼籍在什麼處。不唧留漢。勘破了也。彈指堪悲舜若多。四方八面靈法界。向舜若多孔裏道將一句來。在什麼處。鼻莫三動着一。前言何在。動着時如何。自領出去。便打。

【講方】一を去却し七穿八穴。什麼の處にか向つて去る。一着を放過す。七を拈得す。拈不出。却つて放過せず。上下四維等匹無し何似生。上は是れ天下は是れ地。東西南北と四維什麼の等匹かあらん。爭奈せん柱杖我が手裡に在り。

徐ろに行いて踏斷す流水の聲　脚跟下を問ふこと莫れ。體究を爲し難し。葛藤窟裡に打入し去り了れり。縱に觀て寫し出す飛禽の跡　眼裏に亦た此の消息なし。野狐精の見解。依然として只舊窟窠裏に在り。草茸々　腦後に箭を拔く。是れ什麼の消息ぞ。平實の處に墮在す。煙暮々　未だ這の窠窟を出でず。足下雲生す。空生岩畔花猥籍　什麼の處にか在る。不唧溜の漢。勘破了也。彈指して悲しむに堪へたり舜若多。四方八面靈法界。舜若多の鼻孔裏に向つて一句を道ひ將ち來れ。什麼の處にか在る。動著することなかれ　前言何くにか在る。動著する時如何。動著せは三十棒　自領出去。便ち打す。

【字解】一。七穿八穴。七つも八つも穴が開いてあるが。雪竇何をとりのけられたのふ。

二。什麼の處にか向つて去る。一を去つたと云はれるか何處へ其の一を持つて往つたか。去り場もあるまいにと門下への注意と見へる。此の一の行き先きこそ見物であらう。

三。一着を放過す。ウツカリと雪竇の口車に乘せられるなよ。此の一手臭い處があるぞと注意する。此の語ば碁を打つ時に相手に油斷させる爲めにチヨイと一手ゆるめることであるそうな。

四。拈不出。七を拈得すと云はれるけれども七つどころでない一つも拈し出すことは出來まいと云ふのであるか這箇は元來拈得せるべきものでないのである。

五。却つて放過せず。前には一を去却すなどと云いながら今又七を拈得すなど云ふ。丸るで小兒の戯語のやうな言い分である。

六。何似生。等匹が無いと云ふならば然らば何に似て居るぞ。山は是れ山、水は是れ水。山僧は人間に似て居ると人が云ふて居つたそうな。

七。上は是れ天下は是れ地。東四南北と四維什麼の等匹があらん。是れで合せて十方であるか上は是れ上下は是れ下。東西南北各々獨立であつて何の等匹もないから面白い。

八。爭奈せん柱杖　我が手裡に在り。柱杖は長さ七尺ある。マゴ〳〵するヒヒシツと擲ぐるためにチヤンと圓語の手に持つて居る。そこで此の柱杖と雲門の日々是れ好日とは等匹するかせぬであらうかと云ふ。

九。脚跟下を問ふこと莫れ。行くと云ひ踏斷すと云ふたからとて何も脚跟下計りに眼をつけまいぞ。圓悟なと頭でも行けば鼻先きでも踏む。

一〇。體究をなし難し。然し此の働きは中中のことでないぞ。一皮むいてからでなけられれば働かれぬ作用である。

一一。葛藤窟裡に打入し去り了れり。雪竇餘計の文才を弄して葛藤窟裡に落ちこんで仕舞はれた。

一二。眼裏に亦た此の消息なし。縱に觀るとは云ふもの〻眼裏に於いては觀るの觀ないのと云ふ消息はない。

一三。野狐精の見解。是れは畢竟雪竇と云ふ古る狐の手品であるから、諸人うつかりと釣り込まる〻なよ。

一四。依然として只舊窟窠裡に在り。雪相もかはらず無事界中に死在して居らる〻。餘程老耄られたと見へる。

一五。腦後に箭を拔く。雪竇能くも蘇生られた。イヤ之れで必死の病も助かつたと云ふものと稱揚する。コレは支那の五代の世に王殿と云ふ人が杜重威と戰つた時に、敵の矢が腦後に中つて其の矢鏃が口から突き出したのを、少しもひるまず直ちに其の矢を取つて敵を射かへしたと云ふ故事を取つたもので日本ならば鎌倉源五郎景正と云ふところ。

一六。是れ什麼の消息ぞ。案外なことを云ひ出された。何事であらうと云ふ。

一七。平實の處に墮在す。諸人驚かなくとも好い。これが雪竇の平生の持ち前である。替つたこともない。

一八。未だ這の窠窟を出でず。又煙暮々の處へ踏みこまれた。出頭はなるまい。

一九。足下雲生す。雪竇雲に乘つて出かけられたそうな。どこへも彼處へも實に自由自在な人であると稱揚する。

二〇。什麼の處にか在る。其の空生と云ふものは何處に何をして居らる〻の。空生の在家な諸人は知つてか。

二一。不唧溜の漢。空生とも云はれるものが花猥籍の供養に預るとはイヤハヤ諸天に侮辱せられたものぢやと抑へる。

二二。勘破了也。腹の底まで見拔かれたものと見へる。と空生の偏空に滯ふるな彈呵する。

二三。四方八面靈法界。　之れは舜若多の有り樣を云ふたもので、舜若多は虛空神のことである。

二四。舜若多の鼻孔裏に向つて一句を道ひ持ち來れ。　彈指したり悲んだりして居らうよりも活きた一句を言いあてゝ見よと大衆に拶しかけた。

二五。什麼の處にか在る。　その舜若多と云ふものは一體どこと居るのであるか。人人自己の鼻孔を揑つて見よ。二つはあるまいと云ふ。

二六。前言何くにか在る。　雪竇二枚舌使はれるな。お前こそ動著しぬいて居るでないかと咎める。

二七。動著する時如何。　サー動著したと何としたものであらう。諸人鼻孔が横になつたやうぢやないかと突きこむ。

二八。自領出去。　雪竇三十棒ならお前さんが受けられるがよいぞ。

二九。便ち打す。　ヒシッと一分の躊躇もなき圖悟の大手腕。雪竇になり代つて白日青天眼を開いて眠つて居るやからをブンなぐつたものと見へる。

【講義】　一を去却し七を拈得す。初めの二句は三言で。雲門が十五日以前と十五日以後と云ふ風に兩端に掛けて云はれたものであるから、雪竇も又兩端に掛つたやうなことを云ふて、そして其の兩端をスッカリと拂いのけられたもので卽ち橛を以つて橛を拔くと云ふ筆法。一を拂いのけたかと思へば直ぐに七が飛び出てくる。日が西山に傾いたと思へば月が東山に上る。此の間に以前以後の論量はいらぬ。只日々是れ好日で、此の日々是れ好日に十五日已前もなけらねば十五日已後もない。已前も已後も只是れ好日。雪竇の家には一冊も舊い曆本は貯へてないのである。上下四維等匹なく、コレは七言の句で、上下四維に東西南北を加へて之れで十方。此の十方法界涯何處尋ねても之れに等匹するものはない。天上天下唯我獨尊。何人が何物がありてか之れに等匹するものぞ。そこで寒山詩には、我が心秋月に似たり、碧潭澄んで皎潔たり。物の比倫に堪へたるなし。吾をして如何か說かしめんと謠つてある。只日日是れ好日であつて、之れに比倫すべきものがあらう道理がない。十五日も好日なれば十六日も又是れ好日、一年三百六十五日乃至千萬無量刼、只日々是れ好日の風光。何とも角とも說いて見やうもないのである。本則は從上の三句で飽く迄頌し畢つたからこれよりは例の雪竇が文才を弄せらるゝ處である。碧巖百則の頌古何れ劣りはないことであるが。就中此の則の頌の如きは實に天籟の妙句であつて、雪竇の宗眼明徹なる、又其の文才の縱橫なる實に感嘆の外はないのである。一體頌古なんとは何の角のといらぬ駄辯を費やそうより明窓淨机の下、聲も朗らかに頌すべきものでありて、眞の妙味は却つて其の中に味はれるのである。由來古德の頌古名文は所謂ゆる詩人とか文人とか稱する人等ちの詩文とは違つて一體に垢ぬけがして居る。いや味がない。之れが不立文字の土臺に建立した立文字の特色であらうと思ふ。餘談はさて置き、徐ろに行いて踏斷す流水の聲。此の下の二句一對は蹤跡の無い處に縱跡を示す景況を謠つたものであつて、初句は圜悟も徐々として行動する時浩々たる流水の聲も也た應さに踏斷すべしと釋されてあるか、卽ちどのやうに脚の達者な人であつても水の流れる聲を踏み斷つと云ふことは出來ないことであるが、今雲門大師は日々是れ好日と云つて是れと

別段に脚に力を入れられたと云ふことはないれども浩々たる流れの聲を踏み斷つて仕舞れた。縱ま丶に觀て寫し出す飛禽の跡。圜悟は目を縱ま丶にして一觀するにたとひ是れ飛禽の跡も亦寫し出すが如くに相似たりと註を下されてあるが、コレハ如何ほど畫を巧みにかく人でも禽の飛ぶ跡を寫し出すことは到底出來うるものでないか、今雲門大師は、日々是れ好日と一句言つた計りで其の禽の飛ぶあとを見ぬいて分明に寫し出されたことであると飽くまで雲門の妙手腕を讃嘆したものである。草茸々煙暴々。爰はかく申さば又一類の人ありて雲門の日日是れ好日と云はれた一言を金科玉條の樣に考へてそれに取りついて仕舞い、或は又一類の人が、それは雲門大師のことであつて吾々の關り知ることでないと云ふ老へを懷くかも知れぬから、雪竇が婆心を以つてカラリと目先きをかへて見せられた處である。茸々は草の生ずる貌と云ふから草が茫々と茂ひ繁つて蛇でも出ようと云ふ處、暴々は以つて物を覆ふべしとか或は閑なる貌と註してあるから煙がボウと一面に立ちこめて幕でも張つた樣に向ふが見へぬことを云ふたものであるから、ツマリ一切一時に蓋ひかくして沒縱跡。人の在り家も知らぬと一切悉く掃蕩したものである。空生巖畔狼藉。空生は卽ち釋尊の十大弟子の中では解空第一と謠はれて彼の金剛般若經の對告衆となつた須菩提尊者のことである。或る時尊者が巖中に坐禪をして空無相三昧に入つて居られた所が、諸天が出かけて來て花を雨ふらして讃嘆をした。尊者曰く、空中花を雨ふらして讃嘆するは復た是れ何人ぞ。天云く我れは是れ梵天。尊者云く、汝何んぞ讃嘆する。天云く我れ尊者の善く般若波羅密多を說くを重んず。尊者曰く、我れ般若に於いて未だ曾つて一字をも說かず汝云何か讃嘆する。天云く、尊者無說、我れ乃ち無聞、無聞無說是れ眞の般若。かくして諸天は盛に花を雨ふらせたと云ふ故事があつて圜悟の評唱にも此の因緣が見へてある。其れを引いて來て謠ふたもので、須菩提は解空第一と云ふから誠に偉い人である。偉い人ではあるけれども其の空がゆはゆる偏空で妙有と云ふことを知らんから卽ち單空であつて眞の空ではない。それで諸天などから腹底をうかがはれて花を雨ふらすなんと云ふ大冷かしをされたものである。彈指して悲むに堪へたり舜若多。彈指は中指と母指とを合せてパチリと彈くことで人を驚かしたり或はゆはゆる氣を付けと云ふ警覺のために彈指をすることであるが、爰は不淨彈指と申して汚ない穢はしい物を見たり聞いたりした時にそれを拂ひのけるためにパチリと彈指をする。マア唾汁でもはくと云つた風と見へる。悲しむに堪へたり舜若多。舜若多は主空神なりと申して虛空を司る神であつて虛空を以つて身體として居るから虛空の外には身體のない神であるそうな。そこで今はサテ〳〵偏空に落ちこんで居る悲しさよ。實に天に訴へ地に伏して慟哭すべきことであると雪竇が十五日以前と云へば以前と云ふに已後と云へば已後と云ふに或は空或は有と、とかく一方に偏するのを悲しんで老婆心切のあまりに斯く謠はれたものと見へる。動著することと莫れ動著すれば三十棒、動著は心をハラ

〳〵させることであるから、右へ左へ色々と働かせることであるか、そんなことをしてはゐけないと云ふのであるから、然らば死灰枯木の如くなるのかと云ふにそうでもない。要とする處は大死一番と卽今無念無想の境界に入つて更に其の無想無念の處から絶後に蘇生し來りて大活現前と大活用をうるときんば、動著するの動著せんのと云ふ淪量を一切超絶して自由無碍の妙境界に出入することの出來ることを示されたものである。

第六節　頌評唱和譯

雪竇の頌古偏へに能く此くの如し。當頭に金剛王寶劒を以つて揮ふこと一下し了りて然る後略ぼ些の風規を露す。然も此くの如くなりと雖も畢竟二解あることなし、一を去却し七を拈得す。人多く算數の會をなして道ふ、一を去却するは是れ十五日已前の事と。雪竇驀頭に兩句の言語を下して印破し了りて却つて露出して人をして見せしむ。一を去却し七を拈得すと。切に忌む言句中に向つて活計をなすことを。何が故ぞ胡餅に什麼の汁かあらん。人多く意識の中に落在す。須らく是れ語句未生已前に向つて會取して始めて得べし。大用現前自然に見得せん。所以に釋迦老子成道の後摩竭提國に於いて三七日中是くの如きの事を思惟す。諸法は寂滅の相なり、言を以つて宣ふべからず。我寧ろ說法せずして疾に涅槃に入らんと。這裏に到つて箇の開口の處を覺むるに得ず。方便力を以ての故に五比丘のために說き已る。三百六十會に至つて一代時敎を說く。只是れ方便なり。所以に珍御の服を脫し弊垢の衣を着けて已むことを得ずして第二義門中淺近の處に向つて諸子を誘引す。若し他をして向上に全提せしめば盡大地一箇半箇なし。且らく道へ作麼生が是れ第一句。這裏に到つて雪竇些の意をあらはして人をして見せしむ。爾但だ上諸佛あることを見ず、下衆生あることを見ず、外山河大地あることを見ず、內見聞覺知あることを見ず、大死底の人の却つて活するが如くに相似て長短好惡打成一片一一拈し來るに更に異見なし。然して後應用其の宜きを失せず方に他の一を去却して七を拈得し上下四維等匹なしと道ふことを見ん。森羅萬象草芥人畜、着々として全く自己の家風を彰はす。所以に道ふ萬象の中獨露身、惟人自ら肯つて乃ち方に親し。昔日謬つて途中に向つて覓む。今日看來れば火裏の冰と。天上天下惟我獨尊。人多く末を逐ふて其の本を求めず、先本たゞしきことを得れば自然に風行けば草偃し水到れば渠なる。徐ろに行つて踏斷す流水の聲、徐々として行動するとき浩々たる流れの聲も也た應さに踏斷すべし。縱に覩て寫し出す飛禽の跡。目を縱にして一觀するにたとい是れ飛禽の跡も亦寫出すが如くに相似たり。這の裏に到つて鑊湯爐炭も吹いて滅せしむ。劒樹刀山も喝して便ち摧くを難事となさず。雪竇此に到つて慈悲の故に人の無事界中に坐在せんことを恐れて復道ふ。草茸々煙冪々。所以に蓋覆却す。直ちに得たり草茸々煙冪々たることを。且らく道へ是れ什麼人の境界

ぞ。喚んで日日是れ好日となし得てんや。且喜すらくは沒交渉。直ちに得たり徐かに行つて踏斷す。流水の聲も也た不是。縱に觀て寫し出す飛禽の跡も也た不是。草茸々も也た不是。煙暴々も也た不是。たとひ總に不恁麼なるも正さに是れ空生巖畔花狼藉。也た須らく是れ那邊を轉過して始めて得べし。豈に見すや須菩提巖中に宴坐す。諸天花を雨ふらして讃嘆す。尊者曰く、空中に花を雨ふらして讃嘆するは復た是れ何人ぞ。天曰く我れは是れ天帝釋。尊者曰く、汝何をか讃嘆する。天曰く我は尊者の善く般若波羅密多を說くことを重んず。尊者曰く、我れ般若に於いて未だ曾つて一字を說かず、汝云何か讃嘆する。天曰く、尊者無說、我れ乃ち無聞、無說無聞是れ眞の般若と云ふて又たまた地を動して華を雨ふらす。雪竇亦曾て頌あり云く、雨すぎ雲こつて曉牢は開く。數峰畫くが如し碧崔嵬。空生は解せず巖中に坐することを。天花動地をひき來る。天帝既に地を動して華を雨ふらす。這裏に到つて更に那裏にか藏し去らん。雪竇又道く、我れ恐くは之れを逃るとも逃るゝことを得ず。大方の外皆充塞す。忙々擾々知つて何ぞ窮めん。八面の清風衣裓を惹く。直ちに淨躶々赤洒々として都べて纖毫の過患なきことを得るも、也た未た極則となさず、且らく畢竟如何してか卽ち是ならん。下文を看取せよ。云く、彈指して悲しむに堪へたり舜若多と。梵語に舜若多此に虛空神と云ふ。虛空を以つて體となす。身無くして觸を覺ゆ。佛光の照すを得て方さに身を現得す。譬若し舜若多神に似ることを得る時、雪竇正さに好し彈指して悲嘆するに。又云く動着すること莫れと。動着する時如何。白日青天眼を開いて瞌睡す。

【字解】一。人多く算數の會をなして。之れは大慈の說の如く十五日已前と云ふ中には灌佛會の八日も入つて居るとか或は釋迦誕生以前以後のことであるとか色々計度分別して己れが我情を以つて此の頌を見るものであるから、一を去却すを以ては十五日以前にかゝり、七を拈得すと云へば十五日已後にかゝるなどゝ配當して講ずることであるか、此れ等は皆妄分別手理窟と云ふものであつて、畢竟言語文字に釣られて居るから、餘計な詮索をしたものであると誡める。

二。所以に道ふ萬象の中云云。福州長慶寺の惠稜禪師の頌である。長慶は雲峰の嗣。

三。舜若多。卽ち梵語のシューヌヤターで空性と翻譯をする。楞嚴經に舜若多神は身なくして觸を覺すと申してあつて、此の神は虛空を以つて身體として居るから虛空の外には身體はないけれども佛の光明に照らされると直ぐに其の身體が顯はれると云ふことである。

第七則　慧超問佛

第一節　垂示

垂示云。聲前一句千聖不傳。未曾親近如隔大千。設使向聲前辨得截斷天下人舌頭。亦未是性燥漢。所以道天不能蓋。地不能載。虛空不能容。日月不能照。無佛處獨稱尊。始較些子。其或未然。於一毫頭上透得放大光明。七縱八橫。於法自在自由。信手拈來無有不是。且道。得箇什麼。如此奇特。

復云。大衆會麼。從前汗馬無人識。只要重論蓋代功。卽今事且致。雪竇公案又作麼生。看取下文。

【讀方】聲前の一句千聖も傳へず、未だ曾つて親近せざれば大千を隔つるが如し、設使聲前に向つて辨得して天下の人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらず、所以に道ふ天も蓋ふこと能はず、地も載することも能はず、虛空も容るゝこと能はず、日月も照すこと能はず、無佛の處獨り尊と稱して始めて些子に較れり、其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に於て透得して大光明を放つ七縱八橫法に於ひて自在自由ならば手に信せて拈し來りて不是あること無し、且く道へ

箇の什麼をか得て此の如く奇特なる。

復云く、大衆會すや麼。從前の汗馬人の識し無し、只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。卽今の事は且らく致く、雪竇の公案又作麼生。下文を看取せよ。

【字解】一。聲前の一句。　音聲の未だあらざりし前の一句、三世諸佛未出世已前の一句のこと、那一句と云ふに同じ。

二。千聖不傳。　聖はヒジリで諸佛も說かず列祖も傳へず。山僧も又習はずと云ふ。

三。性燥の漢。　性質の鋭敏な男のこと、怜悧な人と云ふに同し。

四。些子に較れり。　些は些少で、少しは許せるそと云ふ。

五。七縱八橫。　タテザマヨコザマ自由自在と云ふ。

六。蓋代の功。　蓋はチホフ、一世を蓋ふ許りの大功を云ふ。

【講義】聲前の一句千聖不傳。禪宗には聲前の一句と云ふことがある。凡そ言句と云ふものは、名句文と云ふて、先づ音聲にあらはれて次に文字に寫すのであるが、今は其の音聲と云ふものがまだない其の前の一句があると云ふのである。八萬の法藏と云ひ、一代佛敎と云ふも何も釋迦世尊の此土出現を待つて初めてあるのではない、釋迦の迦耶成佛は愚か、またホギヤアと生れられぬ其さき。過去七佛の出世已前、諸佛も末出世の其前から八萬の法藏があり一代佛敎がある。其れを聲前の一句とも、又那一句と云ふのである。敎家で申せば華嚴では恒本と申して過去際を極め盡くし、橫に縱に法爾恒說の經がある。それを古人は十方虛空法界及び一々微塵毛端の刹土に遍くして因陀羅微細世界を盡し、前後際一切劫海を窮め、一々の念に無邊劫を具して常說普說休息あることなしと申されてある。眞言では是れを法爾常恒本と云ふて、諸佛法曼陀羅是也で大日法身の法爾常恒無有休息の御說法である。これも中々有り難い。有り難いが禪宗の那一句はモウ一つ有り難い。那一句て毛唐人でも云ひそふなことであるが、其の那一句は千聖不傳で、三世の諸佛も歷代の祖師も中々傳授することは出來ぬ、松吹く風岸打つ波、それがわかつてたまるものか、辛い甘いは冷暖自知よ、諸佛も說かず、列祖も傳へず。そこで未だ曾つて親覲せざれば大千を隔つるが如しと云ふ。覲は諸侯が天子に朝拜すること、相見することであるから、未だ曾つて自家の獨尊佛に相見せざれば猶ほ大千を隔つるが如しで、三千世界を隔つる如く、遠くして遠いことよ、十萬億佛土とはこのことである、然し親しく自家の獨尊佛に相見して見よ、觀無量壽經に所謂る阿彌陀佛去此不遠で脚下も頭上も皆佛土、七寶莊嚴の極樂世界である。然らば其の那一句を聲前に向つて辨得して天下人の舌頭を截斷すると、諸佛未說法の那一句を辨明し、天下人の總てに口をも開かせぬと云ふ力があつたらどうであらう。未たし〳〵。亦未だ是れ性燥の漢ならず。利發者とは許せぬぞ、己れ自らは辨得底の衲僧と許しても、其の辨得ぢやの不辨得ぢやの云ふのが既に第二第三である。聲前と云へば聲前に附き廻つて居るが。味噌の味噌くさきは上味噌に非ず。臭みがあるぞ、鼻持ちがならぬ、所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず地も載ることは能は

ず虚空も容るゝこと能はず日月も照すこと能はず、人々本具の本分はそも〳〵どんなものであらう。法性法身の如來さまは、天地日月は愚かなこと、十方法界と雖もまた法身佛の鼻の穴の片すみに過ぎぬ、サー此に至りて其の法身佛も亦ない處が即ち無佛の處である。無佛の處は無衆生の處、佛なく衆生なく尊なく卑なし、何を相手に尊卑を論せむ、そこで獨り尊と稱すで、自己即ち獨尊佛である。玆に來りて始めて些子に較れり。初めて少分の相應を得て少しは許せるぞ、各自宜しく參究せよや。が然し其れ或は未だ然らずで、前の段では實に一毫を立つるの餘地もないが、爰で少し緩めて、慧超が法眼の文益禪師に如何なるか是れ佛と問ふた上は、サテ一毫頭上に透得して大光明を放たねばならぬ。光明は智慧の相也で、大光明は大智慧のこと、如何なるか是れ佛との問ひに汝は是れ慧超との一言の下に忽ち大光明を放つたぞ、七縱八横、法に於て自在自由ならば手に信せ拈し來りる不是あることなし、タテザマヨコザマ如何なる事に出合ふてドンナこと仕やふとも、如何なる時に臨みてドンナことを言はふとも一切諸法に於て自在自由ならば御勝手次第よ。且く道へ箇の什麼を得るが此くの如く奇特なる、ハテサテこれは如何なるわけでこうなのであるか、一會の諸人、此れ何を透得してかくの如く一切惣べて奇特であるか。

復云く、これは記者の辭で、此處で一應の垂示を畢りて、更に口を改めて言ひ出されたものである。大衆會すや麽、ドウヂヤ一同にはかるか會得が出來たかと拶着して、從前の汗馬人の識る無し只要す重ねて蓋代の功を論ずることを、これは佛祖の修證に骨折られたことを武將の軍功に譬へて示されたので、汗馬とは馬に汗をかゝせること、千軍萬馬修羅の巷に出入して一世を蓋ふの大功を立てた乃木將軍や東郷大將の苦勞を思ふて見よ、疊の上では中々解るものではないぞ。三世の諸佛や歷代の祖師が皆命かけて煩惱の魔軍を退治せられたことは、實地を蹈んだ事のないものがはかることではないぞ、能く思ふて見よ、人事と思ふてはならぬぞ脚下に氣を注けて見よと佛祖の事を示して、即命の事は且らく致く雪竇の公案また作麽生、ソレハ偖オキ雪竇和尚幸ひに法眼蓋代の大功を頌出せられた程に、看取せよと公案に結歸したものである。

第二節　本則

舉僧問法眼道什麽。橋柳過狀慧超咨和尚如何是佛道什麽。眼晴突出法眼云。汝是慧超依模脫出。銕餃韶。就身打却

【讀方】僧法眼に問ふ　什麽と道ふぞ。橋柳過狀。超慧和尚に咨す、如何なるか是れ佛　什麽と道ふぞ。眼晴突出。法眼云く汝は是れ慧超　模に依つて脫出す。銕餃韶。就身打却。

【字解】一。法眼。　全陵の清涼文益禪師は法を琛灌桂琛禪師に嗣いだ人で五百人の善知識と申して師が清涼山に住して居られた頃は常に五百有餘人の學徒が其の會下に連なつて居つたと云ふことである。門下には清涼の泰欽禪師天台の德

謂禪師など云ふ偉傑が雲の如くあつたものであるから、遂に一家をなして法眼宗の高祖と仰がられた大德であつて、周の顯德五年に七十四で以つて遷化せられた。大法眼禪師と云ふ勅號を賜つた。

二。慧超。　法眼禪門の會下の一人で後には廬山の歸宗寺の住持になられた策眞法施禪師の幼名である。

三。什麼と道ふぞ。　ソレ何か問ひ出したやうである。諸人聞いて見やれと云ふ。

四。檀枷過狀。　枷は手かせ足かせなど云ふて罪人を束縛する責め道具。過は罪過と熟するから過狀と云へば罪狀と云ふも同じことで卽ち自ら責め道具を擔つて來て罪狀を白狀すると云ふので所謂言ふに落ちず語るに落ちると云ふ程のことゝ見へる。

五。什麼と道ふぞ。　問ふことにことを缺いて佛を問ふとは何事であるぞと笞めた。

六。眼睛突出。　眼が飛び出した貌であるから蛇が鷄でも丸呑みにしたやうなと愚弄したもの。

七。摸に依つて脫出す。　法眼のお定まりの文句である。珍らしくもないと評する。

八。鐵餡餬。　鐵でこしらへた饅頭のことであるから、諸人齒が立つまい。丸る呑みにするなよと云ふ。

九。就身打劫。　打劫は强取なり奪去なり剽掠なりと註して俗に云ふチボとか金着切とか云ふことであるから法眼の答話の間に一髮を容れざる隙のないところを讃嘆したものである。

第三節　本則提唱

舉僧問法眼慧超咨和尙如何是佛。下語云。問得可始得。法眼云。汝是慧超。下語云。平蕪盡處是青山。滴水滴凍。

汝は是れ慧超と云ふたは直指爲人して云へり。句の心は盡處是青山と云ふたが直指也。僧は慧超也。惠超が佛と云ふは別にあるまじ、我が佛であらんと喘して問ふたを、法眼のやがて心得、汝は惠超よと答へられたぞ。佛と云ふも色想の上のことよ。汝は惠超よと云ふたは、截斷備りたぞ。平蕪とは色相也、盡の字掃絕也、青山は現成也、色相を截斷して落居現成の備はりたる句也、又佛と云ふて無い處を現成にも用ひたぞ。滴水滴凍。慧超は佛も我も二ツならぬと心得へて問ふた程に、汝は慧超でこそあれ佛ではないぞ、本分上には何の道理もないぞと直指して、慧超は惠慧、佛は佛までよと答へた也。盡之字截斷也、青山は現成也、悉く切斷して落居道理もなきこそ佛よ。慧超も截斷の道理を知りたらば佛で有りたゾ。

【請益】　汝は是れ慧超と云ふた。滴水滴凍は現成ゾ。滴水は問頭の佛にかゝり、滴凍は答處の惠超にかゝる也、截斷してのくれば道理ない現成也。先師下語に斬釘截鐵、當面相呈、慈顏已顯。慧超卽大悟、下語云。瓦解氷消。慧超は佛でないと悟つたぞ。

第四節　本則評唱和譯

法眼禪師に啐啄同時底の機あり。啐啄同時底の用を具して方さに能く此くの如く答話す。所謂聲を超る色を越へて大自在を得たり。縱奪時に臨む。殺活我れに在り妨げず奇特なることを。然れども此れ箇の公案。諸方に商量するもの多く情解の會をなすもの少なからず。知らず古人凡そ

一言一句を垂示すること擊石火の如く閃電光に似て直下に一條の正路を撥開することを。後人只管に言句上に去つて解會をなして道く、惠超は便ち是れ佛。所以に法眼恁麼に答ふと。有る者は道ふ大いに牛に騎つて牛を覓むるに似たりと。有る者は道ふ、問處便ち是なりと。什麼の交渉かあらん。若し恁麼に會し去らば惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦乃ち深く古人を屈せん。若し他の全機を見んと要せば是れ一棒に打てとも頭をかへさゞる底の漢、牙は劍樹の如く口は血盆に似て言外に向つて歸るを知つて方さに少分の相應あるを除非す。若し一一に情解を作さば盡大地是れ胡の種族を滅する底の漢、只超禪客の此に於いて悟り去るが如きは、也た是れ他尋常管帶參究す。所以に一言の下桶底の脫するが如く相似たり。只則監院の如くんば法眼の會中に在つて也た曾つて參請入室せず。一日問ふて云く、則監院何ぞ來つて入室せざる。則の云く、和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於いて箇の入頭ありと。法眼云く、汝試みに我かために擧せよ看ん。則の云く、某甲問ふ如何なるか是れ佛。林の云く、丙丁童子來つて火を求むと。法眼の云く好語なり、恐くは儞錯つて會せんことを。更に說着すべし。則の云く。丙丁は火に屬す。火を以つて火を求む、某甲の如くんば是れ佛更に去つて佛を覓むと。法眼の云く、監院果然として錯會し了れりと。則不憤して便ら起單して江を渡つて去る。法眼の云く、此の人若し回らば救ふべし。若し回らずんば救ふことを得ずと。則中路に至つて自ら忖つて云く、他は是れ五百人の善知識豈に我れを賺すべけんやと。遂いに回つて再參す。法眼の云く、儞但た我に問へ。我れ儞がために答へん。則便ら問ふ如何なるか是れ佛。法眼云く丙丁童子來つて火を求むと。則言下に於いて大悟す。如今あるものは只管に瞠眼して解會をなす。所謂彼れ既に瘡なし之れを傷むること勿れと。這般の公案久參の者は一擧すれば便ら落處を知る。法眼下に之れを箭鋒相拄と謂ふ。更らに五位君臣四料簡を用ゐず。直ちに箭鋒相拄ふることを論ず。是れ他の家風此くの如し。一句下に便ち見は當陽に便ち透る。若し句下に向つて尋思せば卒いに模索不着ならん。法眼出世して五百の衆あり。是の時佛法大いに興る。時に韶國師久しく疎山に依つて自ら旨を得たりと謂へり。乃ち疎山平生の文字頂相を集めて衆を領して行脚す。法眼の會下に至つて他亦去つて入室せず。只參徒をして衆に隨つて入室せしむ。一日法眼陞座す。僧ありて問ふ。如何なるか是れ曹源の一滴水。法眼云く是れ曹源の一滴水。其の僧惘然として退く。韶衆にあつて之れを聞き忽然として大悟す。後出世して法眼に承嗣す。頌あり呈して云く、通玄峯頂是れ人間にあらず。心外無法萬目青山と。法眼印して云く。只這の一頌吾か宗を繼ぐべし。子後に王侯の敬重することあらん。吾れ汝に如かずと。看よ他の古人恁麼に悟り去ることを。是れ什麼の道理ぞ。只山僧をして說かしめずんばあるべからず。須らく是れ自己二六時中精神を打辨すべし。恁麼に他と承當するに似たらば他日十字街頭に向つて垂手爲人せんこと、也た難事となさず。所以に僧法眼に問ふ、如何なる